
リリカルなのは 質量兵器保管課

斉藤さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 質量兵器保管課

【Nコード】

N3521H

【作者名】

斉藤さん

【あらすじ】

それは英雄が生まれたあとの物語。彼は孤高でありながら、その隠した爪を忘れる事はなかった。誰のためでもなく自分の為に英雄になった男は、その目的の為に命を賭けることになる。

序章

リリカルなのは 質量兵器保管課

質量兵器つまりは人の殺害を求め続けた人間が極めた一つの殺戮兵器の事だ。これは今の管理局が禁止しようと、人間の業が同じようなものを作り続けてしまう。

ましてや様々に入り組む次元世界、全てを禁止するのは難しいのは当然の話だ。

なら禁止した質量兵器たちは何処にあるのだろう。簡単に解体できるものじゃない。資金も掛かるし人もいる、だが質量兵器嫌いの魔法好きの管理局がそういった兵器を他の世界に放置しているわけもない。

そして地上本部にはある部署があった。それが管理局の厄介ごとであり、魔法文明の敵対者とも言える質量兵器を管理する部署である。

正式名を質量兵器保管課。エリート達の左遷場所である。

「あー、たいちよー。b-20を起動させてミッドチルダぶっ壊しませんかー」

薄暗い倉庫のような場所に、その課はある。

最高評議会ぐらいしか、まともに場所もしらない、見た目は古ぼけた倉庫だが、そこは世界も滅ぼしかねない質量兵器の保管庫だ。その警備も、その人材も優秀そのものである。性格は致命的だが。

そんな物騒な発言をする部下の名前をサーリット「ゴトウと言う、元教導隊出のエース様だ。酔っ払ったおり、金髪の教会騎士にバツクドロップを決めた後、顔にゲロを吐くというその行動が認められて、堂々と質量兵器保管課に移動になった。

これが人前でなかったら、そんな事はなかっただろうが、哀れな話である。

「起動させる、好きなだけ起動させていいぞ、もうすでに保管庫内はシールドを起動させたからな。閉鎖もすんだ、起動しても特に問題は無い処分が出来ていくくらいだ。許すからさっさと起動して死ね」

当然の話だがキチンと手順に則った解体をしなければ、いまの保管庫は一瞬にして使い物にならなくなる。被害は出ないが出費は酷いのだ。

この建物を建てるのにアインヘリヤルが九十程は確実に建つ程度には酷い出費になる。

それを理解しても部隊長である、カソウ「モヤソウ准将は躊躇いなく実行を許す。実は彼の経歴も相当酷いのだが、准将になってもこんな所から出られないだけの事をしたと、思ってもらえればいいだろう。

詰め所いや完全にサボりのためだけに改造された空間で、軽く彼はそんな事をいいながらゲームをしていた。

「ってたいちよー、なにマジで閉めてるんですか。ここ閉めたら酸素供給なくなるの知ってるでしょうが!!」

「そうか、総務に新しい駄目人間の要請しておく。ところでお前はどの戦場で死にたい、死に場所ぐらい捏造してやるぞ。トレイがいいか、それとも和式、それとも洋式、ああ肥溜めなんてどうだ」

目がマジである、しかもチョイスも劣悪。そこはある意味戦場だが、誰も戦場と認めない場所だ。

同時に准将の声を聞くだけで自分の上司が本気である事を理解した。そんな場所で死なされたくないだろう、顔を青く染めサーリットは必死に叫び声を上げる、だが隊長が取り合う事は一切ない。

「そうそう忘れてた、死ぬ前にお前に意見を聞きたかったんだよ。リンディ元提督をようやくデートに誘えたんだ、結婚してもらおう事はできると思うか」

死に掛けている部下を見て大爆笑する上司、パワハラもいいところだ。

けれど閉鎖が途中で止まった。不快そうに閉鎖を取りやめた男を准将は睨み付ける。

「隊長の性格なら、一生かかっても絶対に不可能ですよ」

「なんだと優男、土下座して、土下座して、土下座してようやく、資料持ちと言うデートにこぎつけたんだ。俺も夢を持っていいだろうが」

「そうですね、確かにそうですね不可能にも一応可能って言葉はついていきますしね」

優男ことノルマンディ三佐である。この口の悪さが、上官を自殺一歩手前まで追い詰めたためここに送られてきたある意味、武士そのふである。

だんと机を殴りつけるカソウ、血が滲みそうなほどギリギリと嘔

み締める。

「お前は上司を敬わんのか」

「何処の世界に、部下を遊びで殺そうとする上司を敬う部下がいるんですか。大体魔導師としてのランクも部隊最下位の癖に」

そうなのである。人間的にどこか終わったエリートばかりだが、エースと呼ばれるような人間ばかりがここに来た結果。

総合A A カソウ

陸戦A A + ノルマンディ

総合A A A サーリット

となつてゐる。ちなみにこの三人で保管庫課であり一部隊だ。リミッターの制限などはちなみに無い。

「ふん、魔導師としての適正なんてのは、ラリットた薬中にさせておけばいいんだよ。戦いは猿に負かして俺は逃げる。大体魔導師才能至上主義みたいな風潮をあの上提督が作った所為で、魔導師なんて人間が俺を苛めるんだよ。さっさとあの爺婆しなねーかな」

すねているが言っている事は大概だ。

「隊長貴方つて人は三提督をよくもまあそこまでいいますね」

「あと脳みそも嫌い、あれ労害にしかならんって。言ってる事には五割ぐらい賛同するけど、やっぱああいう人間が若い力を潰すんだぜ」

一応彼の直属の上司は最高評議会である。

面識はあれど、彼の中では老害なのだ。彼にかかれればあれも、伝

説の三提督も同レベルなのだろう。

「それよりサーリット完全に意識失っているから、さっさと医務室に連れて行きますよ。あいつ教導隊出だから無駄にガタイもいいんですから」

「へーへーやりますよ、やりますよ。リンディさんと結婚してー」
「だから不可能ですって、あんた三日前はレティ提督と結婚したいとほざいて、息子さんに吊るされたばかりでしょう」

溜息混じりに上司の妄言を流す部下。ここは管理局地上、本局の島流し場所。入ったものしか知らない正式名称と、資料整理課と呼ばれるもう一つの名前。

ここは管理局の暗部にして墓場 質量兵器保管課 けれど実は給料がいいけど島流し、窓際族のたまり場。ここに来れば二階級特進も夢じゃない。

偉大な上司と、優しい先輩達が待っている。仕事自体はとても楽な仕事場。リミッターもかけられないからとても安心だ。

大抵一時間以内に管理局を辞めちゃうけど。

ちなみにこの一週間後に第一次JS事件が終わりました。

一章

質量兵器保管課 馬鹿と核兵器

奇跡の部隊とか言う舐めた連中が世間を賑わしているころの話。

「この管理局の英雄思考ってどうにかならんのかね」

「だから隊長、何であんたはそう辺りに喧嘩を売るんですかい」

第一次JS事件が終わってちょっとした頃、人材不足過ぎる地上本部は仕事が出来るけど駄目人間達を呼ぶことにしていた。

実際この連中相当戦闘力が高い、しかも彼らは実質の上司であった脳みそ三つが天に召された所為で、とっても対応が困る部隊に変わっていた。

「あーあーオーリスさんと結婚してー」

「隊長、あんた移り気にはほとほとあきれんんですが、それで今回諦めた理由は？」

「なんか、勝ち組の息子に思いつきりメンチきられて怖かったから」

駄目人間である。

資料整理課こと質量兵器保存課、管理局としても表に出てきてもらっては困る課だ。当然無いと困る部署でもあるのだが、エースクラスを抱えすぎ。一般公開出来ない部署名だけに、戦力過多と思われるのだろう。

ちなみにだが彼らは陸士部隊109部隊に出向中。と言っても准将が来ても迷惑なだけだ。もう一人のストッパー役は一人保管庫の

警護中である。最近保管課は、ものも言わない都合のいい道具をかっぱらって着たので、かなりサボれるようになっています。

「けどなんでまた、あの髭面の娘なんですか」

「俺さ弁護士資格持つてるんだ。それであの人の弁護を知り合いに頼まれたんだが、表情がエロかったからだな」

「それで最近、職場に來なかつたんですか。相変わらずたいちよーは本当に、わけのわからん人ですね」

サーリットは自分の上司の理解不能ぶりに溜息を吐く。

二人して応援に着ておきながら仕事は一切何にもしない辺り、質量兵器保管課の心意気が、骨の髄までしみているのが、簡単に証明できてしまう。

しかしそれを許すような109部隊じゃない、明らかにやる気のないこの二人に対して侮蔑の視線を向けていた。だが階級上、どうしても上の地位にいる准将に口が出せないのもまた軍隊らしい性^{さが}である。

現在テロリストが人質をとって立ち籠っているのだ。

こんな状況なら、高レベルの魔導師を動かさないわけがないのだが、こいつらの方が魔導師としては実力が高いのだが、困った事に馬鹿に地位をやるもんじゃない、と言う見本なのだ。

働こうともしやしねえ。

「おいおい、あの銃見てみるよ。個人認識機能がついてる、馬鹿だなーあんなの持ってたらスグに足がつくだろうに」

「と言うか我々は動かなくていいんでしょっか」

「だって、面倒じゃん。それに本当に困ったら、保管庫からパケツてきた、質量兵器があるんだが使ってみないか？」

いま質量兵器保管課の実質的トップは実はカソウその人なのだ。完全なトップであった、最高評議会は残念な事になっている。

馬鹿と鉄は使いようというが、馬鹿に核兵器だったらどうなるのだろう。

サーリットは目の前の男がしでかす事に、冷や汗を流すしかなかった。そもそも自分で、准将を止められるならとつくに、彼が保管課のトップになっている、

「さて投げるか」

この躊躇いのなさが、彼を准将まで若くして上り詰めた理由だろうか。そんな訳があるはず無いのは当たり前だが、彼ならありえそうである。

しかし世の中上手くいかないものだ。遠投の構えをする前に一人の女性が、彼の行動を阻んだ。

「ちょいまちカソウ准将、それは質量兵器やる」

それこそが奇跡の部隊の総指揮官。なんとかなんとかである。まー簡略して藻でいいだろう。

「詳しいな藻、これはちゃんと使用を許可された質量兵器だ。何の問題もない」

「けどなあ、私の記憶じゃそんな許可が下りる事なんてあらへんのだやけど」

だが『何を言ってるこの雌豚』とばかりに、見下してみるが明らかに彼女が、カソウを見る目が犯罪者扱いである。。

しかも英雄の一人だ、ちっと舌打ちして懐から質量兵器保管課名

義の書類を出す。これで俺には違法性なんて無いと言い張るつもりだ。

「さすが俺らのリーダー、あらゆる意味で駄目だ」

そう言う部署があること自体、彼女は初耳だろう。どちらかと言えば管理局の暗部であり。相当上の人間じゃないと、その存在自体知らない。

問題はその相当上の人間が、馬鹿に凶器を持たせると言う最悪の状況を作り出したのだ。

「そやけどこんな市街で質量兵器を使う必要はあらへん」
「いや断じてあるね。オーリスさんとの面会時間が短くなる」

だから駄目だろうとそう言うのは、今確実に空気が凍った。
彼のふざけた発言を聞き続けた部下でも、あんまりな内容だった。

「ちょ、よくみたらこれ准将が最高責任者やん。質量兵器の使用ゆーたら、最低でも中将三人以上の許可が要るはずやん」
「最高評議会所属の質量兵器保管課は沿う言う課なんだよ、いい加減投げていいだろう、ほらテロリストもあきれているぞ捜査官」

だが勤勉な捜査官は、いちど溜息を吐くと「確保」と非情な言葉を告げて彼を拘束する。

「ぬう、管理局の横暴だ。誰か助けてー、ちょっとこの辺りが壊滅するだけだって、な、な、いいだろう、ちょっと百人単位で死ぬだけだって」

「あかん、こんな駄目人間みたん初めてやわ」

何を今更。

だが彼の部下だけは彼女に同情の目を送っていた。周りが安堵だったとしても。そう言う苦勞は、彼が通った道だったから

「たいちよーに喧嘩を売るとはなんて馬鹿なことを、あんた絶対に後悔するぞ。どうせすぐ釈放になるし」

自由は死んだーとか叫びながら、運ばれていく准将。まさしく馬鹿だ。

「ちよ、ちよい待ってえな。あの准将さんが、何をしでかすんや?」「おめでとう八神はやて二等陸佐、我等質量兵器保管課は君の左遷を心から歓迎する」

本人は呆然とするだけだ、開いた口もふさがるまい。きちんとした書類もあつて、准将を逮捕拘束したのだ。彼女もまたエリート of 島流しである質量兵器保管課に左遷される。

困った事にあの准将、三提督のコネもあるし、元最高評議会の一人である。これでもかと権力を持っている。

カソウ准将実はまだ二十三歳それなりの理由と、それなりの経験をもって若くして准将まで上り詰めた傑物。

その彼の権力をフルに活用して奇跡の部隊指揮官八神はやては、質量兵器保管課に左遷される事になる。

上司の性格悪いぞ保管課、部下の性格悪いぞ保管課、こんなやつらが管理する質量兵器、最早テロリストに渡したほうがマシとさえ思えるこの始末。

何度も言うけど二階級特進はかなり早いよ保管課。それ以外のと

りえは無いんだ保管課。

結局質量兵器の使用に関しては、また規制されることになって不
服の准将さんが意外と可愛らしかったらしいよ保管課。

いま管理局で最も危険でスリルのある職場、質量兵器保管課、真
面目な人と常に募集中。だけど根性がないときついです。

ちなみにはやてさんは、すぐに保管課から出て行っちゃいました。
理由は彼女もまた准将と同じく特別なコネのある人だからです。

二章

質量兵器保管課 聖王猊下と先生

無限書庫であれば情報は揃う。

全ての情報が探せばあると言われていたあまりにも非常識な場所。人はその昔は遭難者さえ出た場所をこう呼んだ。

「ゆーのせんせー」

無限書庫と。

それはいいのだがいきなり奇声を上げながら突貫した准将。いつものより馬鹿さ加減三十パーセント増しぐらいで、司書長に抱きついてきた。

「また、相変わらず気持ち悪いですねー准将」

最も慣れた様子でシールドを張る辺り、結構いつものように起きている事なのだろう。結構辛辣な言葉で、拒否の感情が示されている。

「で、またそのひどい顔で何しに来たんですか。また誰か左遷させるなんていわないで下さいよ、僕も馬鹿に構ってるほど暇じゃないんですから」

え、誰これ、本当にあのユーノ君と言うぐらいに酷い発言のオンパレードである。

「あ、いえ、すみません。前のような事は申しません、まさかあの藻がユーノ先生の友人とは思ってもよらなかったもので」

「さすがJIS事件の時、唯一何もしなかった部隊の長らしい発言ですね。寝ていたら終わっていたって、あれ正気ですか」

「前日、部下と麻雀やっていたら十度もハコにされて不貞寝していただいですよ。って、そんな事はいいんですよ先生、教会のゲロ女が査察に来るんですよ」

ゲロ女と言われてもユーノには、そんな風に教会で言われる人間を知らない。

難しい顔で首を何度も傾げるが、一向に浮かぶ事はない。

「誰それ」

「ほら、あの自分は預言者だとかほざいている金髪のやばい女ですよ。絶対あれ薬やっているでしょう、部下の左遷の原因ですよ」

今間違い無くユーノは止まった。

相も変らぬ齒に衣を着せない暴言だが、正直言いすぎである。

「ほら名前は確か、ノストラダムスとかいう人ですよ」

「いや絶対違うよねそれ、なのはの世界の人でしょそれ。もしかしてだけどカリム」グラシアとか言うんじゃないの」

「そんな感じだったかな。で、今度からその女が、保管課の直接の上司になるですよ。どう暗殺したらいいですかね」

提案する言葉が常に致命傷なのはなぜだろう。

ユーノだつてこの男の願いは叶えてやりたいが、どう考えてもいつも助けてやれない内容ばかりなのだ。

「いや無理だからね。と言うか質量兵器を君が独占所有しかけたから仕方なくだったよね」

「失礼な管理局が混乱している間に、保管課の権力を僕が握ろうとしただけです」

それが問題すぎるのだ。

どういつても会話にならない。しかも答えている本人は超真面目なのだからかなり困る。

「今回は諦めるしかないよ。僕もはやてや、なのはにこっぴどくしかられたんだから」

「あの藻と奥方さんが先生に迷惑を。それはすいません、今後このような事がないように気をつけます」

「そして迷惑をかけたのは君だ。君の人間性から吐き出される言葉には、信用の欠片もないんだからさ」

うごごごごご

「りよ、了解いたしました。ユーノ先生のご命令とあらば、私は必死に努力する所存です」

ちよっと目に涙を溜めて、敬礼する。

カソウ准将は実はビビリである。

「あと、リンデイさん紹介してくれませんか。この前、笑顔を振りまいてくれたんできつと結婚できます」

「寝言は寝ていえこの駄目人間」

本当に次は大泣きして走り出した。

いいすぎともユーノは思わない。あの馬鹿すぐに泣き止み面白そ

うなものに手を出すのだ。

一度足を引つ掛け地面を滑走する。結構酷いダメージのはずだが、それよりも無限書庫にしては珍しい影を見つけたのだろう。彼の意識はダメージよりそちらに向いていた。

「おーそのあざとい餓鬼。カリム・グラシアのゲロ以外の弱点をさがさねーかー」

どこぞの聖王様である。

「え？ いいよー、お兄ちゃんも探すんだよね」

「当然だ糞餓鬼、あの薬中女に目に物見せてやるっぜ」

しかしそれが、最近読書にはまった聖王閣下だとはさすがに、知りもしなかっただろう。

ユーノは内心、なのはに殺されるんじゃないだろうか、思ったりもした。だが意外と子供のあやし方が上手かった准将は、いや子供と同レベルだった准将は、きゃっきゃと探し物競争をしている。

「あ、見つけた」

「なんだと糞餓鬼、よくやった俺に見せてくださいませ」

「はい」

子供に土下座の准将。多分権力に基本的には弱いからこそ本能で、目の前のヴィヴィオという子供を聖王と判断しているのかもしれない。

いや元々彼にプライドがないだけか。

「やるじゃねーか糞餓鬼。なんか飯でも奢ってやろうか」

「いやよべつに、それにママからへんな人にはついていけないっていわれたし」

「変だところの俺の何処が変だ、あざといにも程がある糞餓鬼め」

ムーと顔を膨らませる。何度も何度も餓鬼と連呼されては不服なのだろう。

「全部変なんだもん」

いやほんとうにその通り。

「なぜだ餓鬼、なぜだ糞餓鬼、俺はユーノ先生の教え子だ。なら先生と一緒に飯でも食うなら問題ないだろう餓鬼」

結構気持ち悪いポーズを取っているのだが、二人してガン無視だ。もっともヴィヴィオは、彼の提案をちょっと考えているのだろう。ユーノを伺うように何度も視線をカソウとの間で行き来させる。

「うん、いいよ」

ガッツポーズをしてその場で踊りだす准将。けど忘れていないか准将、どれだけカリムの弱点を探したとしてもお前の部下にはゲロ女の原因がいるんだぞ准将。

あとヴィヴィオといくらなんでも精神年齢が同じ過ぎるのは流石に問題だぞ准将。

保管庫一番の働き者はガジェット君たちです。部下は役に立ちません、それが質量兵器保管課の日常です。

真面目な方から不真面目な方まで命をおしまずいらっしやい。

三章

リリカルなのは 質量兵器保管課 上司と部下

なんかやばい組織だと世間に騒がれそうな頃の話

なんか藻の所為で色々やばくなってきた質量兵器保管課。准将以下部下二名は、美人ながらに、本当に会いたくない上司と対面する。

この課を解散する事だけは、管理局としても出来ない。何しろここには、起動すれば世界を滅ぼしかねない兵器が大量にある。ある程度能力のあるものが、絶対に警護する必要があるのだが、いつも思うがこんな性格のやつらにさせないほうが良いと思われる。

しかも今回は、外部の者を上に置く事でさらに、使用と言う面からも阻もうと言うのが目的だ。それが教会というのなら、その抑止力にも期待できるだろう。

「たいちよー、やべーっすよ。今度の上司俺が酔っ払った時に、ゲロまみれにした人ですよ」

「気にするな、ちゃんと弱点は知っている」

「いやいつも馬鹿ですが隊長は、わき腹が弱点のなになが、この場で役に立つのか教えて欲しいですよ」

ちなみ聖王が見つけた代物だ。

どう考えても役に立つ機会が、訪れるはずはない。

「たいちよー今日はかりは休ませてくださいよ」

「そうか、また俺の面子を潰す気が。言っておくが俺は超俗物だ、

上には媚びへつらうぞ」

「いや、あんた三提督も、評議会も結構な事していませんでしたっけ」

まだそれだけの軽口を吐き合えるのならまだマシだ。

詰め所で三人して愚痴をいいながらゲームをする余裕がある辺り、実際それほど慌ててもいないようだが、何も考えていないだけだろう。

「けどさーたいちよー。何時までがジェットにその上司追わせ続けるんですか」

「俺が飽きるまで」

「あははは、見て下さいよ。あれが聖王教会のゲロ女こと、カリムⅡグラシアの姿ですよ。護衛もなしにこんなところに来るなんてアホですよあいつ」

ノルマンディは、指をさして自分の上司で遊び続けている。ちなみにゲームというのは、聖王教会騎士 カリムⅡグラシアで遊べだ。こんなことしていたから左遷されるのである。

あと護衛がないのは一応ここが秘匿部署であり、必要最低限の人間しか知られてはいけないようなものが保管されているからである。

「けど人間って本気になったら意外と逃げられるものなんですな」
「それよりもこいつ以外と胸が大きいから、揺れるのがいいと思うんだが」

本当になんと言うか、まあこの部隊らしい。
見ている方向性が、まるっきりでたらめだ。

「あーすいません隊長、仕留められませんでした。人間って死ぬ気になれば、意外とどうにかなるもんですね。さすがに壁走られた時は、コントロール落としましたよ」

「まあいい、これで家の警備がどれほどの物か理解していただけただろう。殺してればなおよかったけど」

二人の会話が終わると同時に詰め所の扉を蹴り飛ばす音が響いた。その飛び出した扉はサーリットに直撃し、元教導隊所属の癖に気絶しやがった。

詰め所の前には鬼気迫る表情と、意外と可愛い涙目と、そういえばお前一体何歳なんだと感じてしまつ上司がいる。

「おや、騎士カリム様ですか。そういえば今日査察でしたね、私はこの部署のトップであるカソウ准将です。

後二人は、サーリットとノルマンディってことです。適当に覚えて置いてください」

気絶している片方はともかく、もうノルマンディはキチンと敬礼をする。

「いえ、そんな事はどうでもいいです。先ほどの弁明が、聞きたいんですが」

「いえいえ査察ですから、この質量兵器保管課の警備システムを、身をもって経験していただくのが、一番手っ取り早いかともいまして」

ちなみにだが一応言っておくが一連の会話は准将である。

もう一度言っておくが准将は本当に権力に弱い。事実かどうかいきなり怪しくなってきた。と言うか後者の言葉はまるっきり上と掛

かっついていない。

「ええ、本来であれば死んでいたところでしょうね」

「ほら完璧でしょう、さらに内部の保管庫内は完全密封されています、不用意にあけることは許されていませんから。ゲロ、いえ騎士カリムの命令と言えど、現場の判断にしたがってもらいます」

「って、ゲロってなんですか。ゲロって」

笑いをこらえるのに必死なのだろうノルマンディは、敬礼をやめて顔を真つ赤にさせながらプルプルと震えている。「さすが准将、馬鹿すぎる」そのときの彼の言葉である。

「そんな事はいいいじゃないですかゲロ女、薬中の癖に黙っていてくれませんか」

隠せよ。

「あ、う、ああー。言ったいま思いつきり言いましたよ、ゲロ女ってしかも薬中ってなんですか」

「あの騎士カリム、いい加減仕事をしてくれませんか。こういつちやなんです、教会の人はそんなにルーズなんですか軽蔑いたします」

う、うつつ、うー

「そんな唸り声されても准将が困るだけです。仕事をしますよ、取り敢えず現在取り扱っている質量兵器の数と規模、それに伴う貴方の権限、その他もろもろの資料です」

あまり何度も言う事じゃないが準書はこれで権力に媚びへつらっ

ているのである。

もうすでに涙を普通に流している。カリムの飼い犬でもいたら、既に大暴れしているところだろう。そんな飼い犬がいるわけでもないのに、目に溜まった涙をぬぐい、いずまいをただす。

「分かりました」

「それが大人として当然の事です騎士カリム、と言ってもする事なんてないんですけどね。貴方の仕事は質量兵器搬入の際の隠蔽工作ともしものときの質量兵器の使用許可のみ。元々保管課にはそれ以外の仕事はないんですよ」

反管理局団体などの襲撃などの撃退が、保管課の殆どの任務なのだ。

だが設立当初からここに襲撃しに来たやつはいない。場所的には地上本部から全く離れていないのだが、所詮島流しの場所であるのが原因であろう。

表向きには資料整理課なのである。そんな仕事ぜんぜんしてないのだが。

「分かりました、じゃあ資料を持って帰りますね」

「それは駄目です、ここの資料はここでしか使えません。一応秘匿部署なもので、そんなの常識でしょう。そもそもいくら管理局にも所属しているからって教会の騎士が、管理局の正式な書類もなしに持ち歩く事が許されると言う事が馬鹿の発想ですよ」

正論なのだろうが言っている事が酷すぎる。

もうやだこんな人たちも思っても仕方ないだろうが、この辺りはお役所仕事だ、仕方ない話である。

性格は駄目だが仕事は出来る、それが質量兵器保管課なのだ。

「あと搬入の際の隠蔽工作に、あの奇跡の部隊の支援者が入るのは目立ちすぎるんで、その辺りも考慮してくださいよ」

「分かりました。ではもう失礼します、私も貴方たちと違って忙しいですから」

「そうですか、キッチンと葉が抜けるように応援しています。頑張ってください」

一応彼にとっては大真面目な会話だった。だが顔を真っ赤にさせて踵を返す、彼女はそんな事思っていないだろう。多分泣くのは目に見えている。

「あーリンディ統括官と結婚してー」

「いつも言っているでしょうが不可能だって。いや隊長の辞書にそんな言葉はないですか、まあないだけですけど」

本当にこいつら役に立つのか保管課。実は何度も保存課と間違えたぞ保管課。あとカリムの年齢調べたけど、よく分からなかったんだ保管課。

いい加減シリアスに入りたいのだ、実はこの話からシリアスに書くはずだったんだ保管課。

上司は綺麗な金髪美人。涙目がとても可愛いお姉さんです。

二階級特進が早くなる以外の特典がようやく着きました。新人の方いらっしやい、ここは管理局地上本部 質量兵器保管課です。

四章

リリカルなのは 質量兵器保管課 他人と評価

今回は、カソウ准将の周り人の評価。

部下

天才的な馬鹿です。あんな人馬鹿以外の何者でもありません。ですが十年後まさかあんな事になるとは、思いもしません。あの生で俺の人生は、おかしなほうに行きましたよ。

部下

いや馬鹿ですよ馬鹿。しかも優秀だから手がつけられない。けどまさか五年後あんな事になるとは、思いませんでした。あの所為で私の人生はいろんな意味でおかしくなりました。

一行以外かなり適当に答えてもらいました。
二行目以降はただのでまかせにも程がある。

上司

酷い人です。あんな人が管理局地上本部の英雄だなんて思いもしませんよ。一体何が起きればあんなふうになるのか、疑問しかわきません。
けど仕事の面でも優秀なんですよね。文句がつけられないんですよ。仕事以外は、本当に困った人です。

溜息を吐きながら嘆かわしいと首を振る。

部下の過去の戦歴を見て、本来であれば中将クラスの力はある人
なただけどなーと漏らしておりました。

恩師

優秀な生徒でしたよ。まさか武装局員になるとは思わなかつたけどね。昔は結構真面目で素直な子だったんだけど、あんな事があってからすっかり変わってしまった。どんな事かって、言うのもあほらしいようなそんな事だよ。元は情報処理系の魔導師だったりするんだけどね。

懐かしそうに彼の昔の写真を見ていました。
と言うかどういふ状況でああなったのか理解がまだ出来ません。

知り合い

変な人

いくらなんでも酷すぎます。 聖王様。

元同僚

あいつと俺は陸士学校に同じ陸士学校にいたんだが、その頃は真面目で素直なやつだったぜ。あいつが英雄になったあと色々あったんだが、一時期広報課に転属になった事があるんだ。

そこであいつの本性が開いてしまっただろう。いや真面目だったからこそその勇気のある発言だったんだが、その当時の報復で資料整理課行きになっちまったんだ。

その頃からだよ。あいつがいろんな意味で変になったのは。

だからなぜ真面目という言葉が入る。

被害者

あいつの所為でわしは、管理世界中に不倫男として広報されてしまったんじゃない。あの生意気な餓鬼の所為で、そのときやつは何を言ったと思う「残念だったな工口爺」だぞ。

だが今では後悔している。あいつをよりもよって、あの部署に送り込んでしまった事を、許されるのなら過去に戻り昔の自分を殴ってやりたい。

だがもう無理なんじゃあいつはあそこに根をはっている。しかも、魔導師ランクの低下をいいことに実戦部隊にくる事もなくなってしまった。

お願いじゃ、誰か奴を止めてくれ。このままじゃ世界は、世界は。

このままご臨終なさいました。

冥福は祈るがお前は冥府にいつてほしいです。

元上司

あいつは優れた武装局員だったんだ。あの戦争を一人でとめた英雄だったんだ。なのにあの不倫爺が、あいつを資料整理課なんかに送りやがって、しかも問題児ばかり送りみやがって。

本来であれば、俺たちの上に立って地上本部をもり立てていけるやつだったのに。

一体誰の事を言っているお前は。

告白された人

あの人ですか。告白してきたり弁護してくれたり、わけのわからない人です。断りましたが、なんというか仕事は出来るというイメージの人でした。

どうしたら私の罪が、殆ど無罪になるのか理解できません。

振られてたのか准将。

白い人が登場する予定は実はないんだ保管課。ヴォルケンズも出す気がなかったりするんだ保管課。

実は責任者は英雄という特典がついたぞ保管課、美人な上司に、英雄の責任者、いつも実戦のような緊張感が味わえる唯一の部署だ。戦闘局員から、一般局員まで、どんな人間でも受け入れるけど、命の保障は出来ないそんな部署それが質量兵器保管課。真面目で優秀な人を募集しています。

五章

質量兵器保管課 エロと准将

マリアージュ事件はいつの間にか終わっていました。やっぱり役に立たない保管課です。

機動六課の元面子が相当頑張っているころ、我等が質量兵器保管課は特に何もしていませんでした。

と言うよりこの部隊に何か、期待するだけ無駄です。

「そういえば陸士のナカジマ三佐だっけ、あの人人生の勝ち組にも程あるとおもわねー」

「そうですかねたいちよー。あの人凄い真面目で俺も尊敬しているんですけど」

いつものようにグダグダとだべりっぱなしの元エリート共だが、今回は二人が留守番をしている間に、ノルマンディが他の部隊の応援に行っている。実力だけは高いので、役に立っている事だろう。多分。

「だってよ、血の繋がらない娘ばかりのハーレム作ってんだろあの人、まさに鬼畜の所業だろうが」

「え、あの人いつの間になんかありえない状況になってるんですか。羨ましい男的には本当に天国でしょう」

たぶん本人はそんなつもりはないだろうけど、はたから見ればそういういわれでも仕方ない気がする。

「パパリンとか呼ばれているらしいぞ、それに父上とか、あー嘆かわしい限りだ、俺ロリコンは、許せない人間なんだよ」

「おお！！ 非常識のたいちよーから意外と真面目な発言だな」

「当然だろう、だが俺も一度はオーリスと言うロリコンの道を歩みかけた事がある」

遠い目で過去を見つめる。だがどうみてもあの人は二十代だ。

やっぱりどこか軸がずれている准将だ。

「ってちよつと聞きますが、たいちよーがロリコンと思う年齢は何歳からですか？」

「三十代以下だ、当然だろう俺は母性に飢えているんだよ。人妻だったとか言うのがついていけると最高だ」

「そうですね、死んでください。絶対死んだほうが世界に有益ですって」

どう突き進んでも結局未亡人狙いの准将は、死んでしまえばいい。そんな事をいつていると、詰め所の扉を開ける音がした。ここに来る人間なんてカリムか、この中の誰かぐらいだ。

サーリットは軽い敬礼を、准将はおうと一言。

「すみません隊長、やっぱり出向したんですが帰れ、って言われました」

前言を撤回したい、やっぱりこいつ役に立ってなかった。

「別に構わん、嫌がらせでお前の元部隊にお前を送り込んだんだから特に間違っていない」

「さすが隊長です、けど来た瞬間の元上司の顔は青ざめていました

よ。ちなみにどういう理由で私を推薦したんです」

「元々その部隊の人間だったから、いきなりの激務だろうと呼吸を合わせられると総務に告げた」

手の込んだ嫌がらせである。

実際ノルマンデイも理解して行っていた辺り、相当性格腐っている。

「で、そんな事はどうでもいいんだ。ナカジマ三佐のあのエロパラダイスについてどう思う」

「そういえばそうですね。どうやったらあれだけの娘を囲えるのか、羨ましいんですけどね。けどロリコンは死ねばいいですよ」

「いいたい放題だ。ちなみにだがこのノリについていけるようになるれば、多分質量兵器保管課でも楽しく生活できるはずですよ。これでも結構な高給取りですからこいつら。」

「先輩やたいちよーは本当に本音駄々もらしですよ。この前もあのハラオン家の執務官に、うら若き乙女が露出多する。そう言う趣味は家の中でした方が良くか言っていましたし。」

本人あの後電話をかけて、キャロ露出の多い私って駄目とか言っていましたよ」

准将の暴言は大体、誰か知らなくても発している場合が多い。

しかしよりにもよってリンディ統括官の娘だとは思わなかったよ
うだ。

「だってよスピード上げるためにいきなり露出するんだぞ、ばっかじゃねーのと思うだろ。まずは速度より羞恥心を上げると、ただの一般常識を言ってるだけだ」

と言うか本人自体気付いていない。
あと誰も彼にだけは一般常識を語って欲しくないだろう。

「誰も准将に一般常識なんか求めていません。と言うかまだハラオ
ンとまで言つて、リンディ統括官との区別がつかない辺り本気で惚
れているですか貴方」

「つねに俺の心はリンディさんだ」

一度諦めた分際でよく言う台詞だ。

しかもノルマンディの発言に殆ど気がついていない。本当に人の
話を聞かない奴である。

「それは准将らしくて納得ですけどね」

「いや先輩、あの人馬鹿すぎて段々凄く感じてきません」

「いまさらです。あの奇跡の部隊の立役者たちや、今は無き脳みそ、
三提督にだってさっさとやめるとか老害と平然と言ったりするよう
な人ですよ」

ちなみにそんな暴言が気に入られて、質量兵器取り扱いの権利を
与えられたりしているのだから世の中色々おかしい。

「俺もハーレムとか欲しい。こう見えても昔は結構人気があったん
だぞ、餓鬼ばかりで吐きそうだったけど」

君の性癖は生まれつきか准将。

「隊長の趣味が論外なだけでしょうが、これがあの戦争の英雄とは
思えないですよ全く」

「そういえば准将の話して、ぱたりと消えましたけど、教導隊連

中の中でも伝説と呼ばれる土下座の英雄でしたね准将は」

不名誉すぎる。土下座の英雄、その言葉を聞いたとき准将は少しだけ影を濃くした。

「あれか、まさか敵前線で土下座しまくっていたら敵の大将の所までいったあの奇跡か。いや今考えても死にたく無いってのは、素晴らしいな」

あっはっはっはっは

台無しだぞ准将、部下たちも飽き返っているじゃないか准将、読者も絶対に准将の格好いい過去を期待してたんだぞ准将。

何処までも言っても格好のいい男たちが出てこない駄目人間の集まり保管課、けれど本当はみんな有能なんだ保管課、ただ性格が悪いだけなんだ保管課。

皆さんのやる気を待っています我等質量兵器保管課です。

第六章

質量兵器保管課 准将と炭素 【番外編】

それはまだ陸士学校を卒業したてだった頃の准将の物語。

准将の初任務は地獄だった。質量兵器保有世界の一つであり、反管理局世界での話しである。

質量兵器廃絶を声高に叫ぶ管理局は、この世界に交渉としてまだ成績優秀であった新米の陸士を一人とほか数名の小隊を護衛とした交渉部隊を設立させたのだ。

だが問題はこの次元世界に入ると同時に、彼らは襲撃にあう。その時まだ新米と言うことで、後衛にいたからこそ助かった少年こそが、カソウ・モヤソウ三等陸尉である。

一瞬にして、彼の仲間が皆殺しにあったのだ。

他の次元世界に逃げる事もできないままに彼は、逃げ出す事になったのだが追っ手の追跡が緩む事などなかった。

何度も絶望も在っただろう、腕も撃抜かれそれでも彼は必死になつて逃げ出した。

精神的にも追い詰められながらカソウは、これより先三年間をこの世界ですごす事になる。死亡報告は聞かされないが、誰もがのたれ死んだと思っていた。

その三年間の間に、管理局とこの世界の対立は激化していた。

そこでカソウは一つの戦争に巻き込まれる。
それこそが彼を英雄にした、次元世界の七つを巻き込んだ大戦争である。

といつてもこの戦争、最低でも数年は続くといわれながら、三日と言う短い時間でその戦争終わってしまう。それこそがカソウを英雄にした理由であるのだが。

その当時の彼の称号はこういうものだった。

カソウⅡファイアー元帥、ガチの管理局の敵でした。

三年で何があったのか分からないが、敵の内部に入り込み元帥にまで上り詰めていた。

その当時を語るものはこういつている。

「カソウ元帥だって、あの化けもんだろう。当時の有名な元帥たちを次々に蹴落として軍部中枢に潜り込んだって言うじゃないか」

「あの人は我等軍部の栄光です。誰もが否定的だった戦争を止めてくれたんですから」

「あいつがいたらこそ犠牲が出なかった。だが今でも納得がいかない、あいつがいればあの戦争ぐらい勝てたはずだ」

管理局と潰しあつて勝てるという状況から問題なのだが、この世界では彼はいまだに英雄なのだ。

彼が追われ始めてから三年間、その間で彼がどう軍部に入り込んだか、などはよく分かっていない。

今となつてみれば最高評議会と何かしらの作戦をたてていたのかもしれないが、彼がそれを語ることはなかった。

カリムはこれを見て明らかに落胆した表情を作っていた。

「あの人やっぱりおかしいですよね」

「いやあ凄いお人や、本来クロノ君より上にいてもおかしくないで」

どんな事があつたとしても三年で上り詰めるだけの、指揮官としての力と政戦におけるセンスが尋常じゃないのだ。

実際准将どころか大将閣下でもおかしくない。

「やっぱり納得いきませんね、一度あの人に文句を言ってきました」

「え、カリムなに馬鹿言うてるん」

「何処が無茶ですか、あの人絶対おかしいですよ頭」

何を今更な事を言っているのか。

「わかつとるって、けどあの人。今日ここに来るやん」

感情が高ぶっているのはいいが、冷静になつて欲しい姉代わりの女性をどうどうと落ち着けるはやて。

左遷された奴が何を言っているのか疑問だが。

「ああ、そうでした。私が呼んでいたんですよ」

「そつやそつや」

「まあもう来ているんだがな。久しぶりだゲロ女と藻、明らかに晩婚になりそうな二人、この俺に一体なんのようだ」

彼の資料一つ一つを燃やしながら、そんな事を言っている准将。

あまりの彼女らからすればいきなりの登場だ、心臓が止まりそんな衝撃だっただろう。三秒前まで間違い無く彼はそこにいなかった。

「いや、やっぱり光学迷彩系の魔法が覚えておいたほうがいいな。こうやって人を驚かせる事ができる」

「ちよ、准将。その為だけに、こんな事したんか」

「当たり前だろうが藻、確定晩婚女」

そんな事も分からないのかと見下した目で見る准将。彼の隣で怒りに体をプルプルと震わせる彼女は、騎士カリム一応彼の上司。

「それはいわんといてや、私も覚悟してるんや。もう家族いるしな」
「軽く返されるか藻、一度とは言え我が課に来た人間らしいな」

ちなみにそんなカリムを確実に無視して、二人はたわいない話を続ける。

そんな彼の行動が余計彼女を苛立たせるのだが、興味ないのだから。一瞥すると鼻で笑った。

ただ喧嘩売っているだけだった。

「って、あなたって人は、どれだけ人間として駄目なんですか」

「いやいや、俺のような人間あまりいない。むしろ貴重だ、上司としてきちんとケアしろ」

部下がいないと口の悪さが加速する傾向にあるようだ。

傍若無人、そういえば准将にはこの言葉がよく似合う。涙腺でも弱いのだろうか、直ぐに彼女は目に涙を溜めた。

可愛らしいのだが、個人的に准将は彼女がギリギリ対象外のため興味も一切ない。

「で、なんのようだ騎士カリム。俺はさぼる事に忙しいんだ」

「たった今用件を燃やした人が何を言っているんですか」

「知らんよ、なんか人のプライバシー勝手に見ているから腹が立つた。」

知っているかユーノ先生の奥方の世界は情報保護法なるものがあるんだぞ、そう言う常識考えないのか」

ああいえばこう言い過ぎて彼女達も開いた口がふさがらない。

「で、俺の輝かしい経歴に何か侮辱でもつけたいのか」

「話を聞きたいだけです。これほどの功績をあげたあなたがなぜ准将どまりで、あんな課にいるのかを」

だが彼は渋い顔をする。本当にこのことは言いたくないのだろう。

「実はあの戦争の実績は、書類整理のバイトをしていたら昇進関係のやつがあつたから。暇潰しに元帥欄に俺の名前を書いたら、混乱期だったせいか俺が元帥になったんだよ。」

しかも軍部が面子を重要視しやがって、俺に適当な役立たずを渡してそのまま元帥になりました。で管理局と戦争やらかすって言うから、仕方なく反乱起こして止めたんだよ」

斜め上すぎる。と言うか言うたび言うたび嘘をついているのだろうこの男、土下座の英雄、英雄元帥、色々な称号が実はあつたのだが、記者会見のたび嘘ばかり言っていた為。

彼はマスコミから見放され、拳句に広報で不倫以外にも管理局の暗部とも言える情報を撒き散らした結果の左遷だった。

はやてとカリムは、その場につ伏す。

「あはや、ほんまにこの人アホや」

「と言うより国自体がアホです。無茶すぎるでしょうこれは」

「これだけか、下らない用事だ。藻にゲロ女。もう俺は帰るぞ」

そういつて彼は部屋から出て行った。

「まあ、暗殺していったなんて言うわけにもいかんだろう。子供には早すぎる」

扉を閉じて彼が呟いた台詞だ。

彼の手は血に濡れていた、それも最初はただの復讐だったのだ。

次から次へと暗殺していつて、そのために必要だった物を手に入れて。

結果偽りだらけの英雄が出来た。

「内緒だ、内緒、全部内緒だ。もう知っている爺たちはいないんだ」

軽く悲しそうな笑いを見せると、いつものように彼はサボリの人生の幕をまた開いた。

ちなみにこれまでの話は全部嘘です。

七章

質量兵器保管課 説教と工口

いい加減に飛ばす事件もなくなって来たころの話。

それは保管課始まって以来の出来事であった。警報音と言う奇跡の音が響き渡った。

「馬鹿ないつもゆるいぜ保管課と言うのが、俺らの課の筈なのに」「いや本当はこう言う事が頻繁にあってもおかしくない場所でしょうここは」

ガジェットが次々と破壊される光景が繰り広げられる。その光景を見た准将は体を震わせて叫んだ。

「なんだと優秀な部下が殺されてるううううううう」

人間よりもガジェットの方が、彼にとっては働き手だったのだから。何しろ彼らの導入でこの仕事は殆どなくなった。最早詰め所は彼ら保管課の寮である。

悲鳴をあげているのは准将、雷光が次々とガジェットを殺している。

多分彼の本来の部下三人が、死ぬ時よりも彼は取り乱していた。

「早く助ける、元エース共」

「いや無茶言わないで下さいよ、あれどう考えてもSランクじゃない

いですか。二人係でも無理ですよ」

「私がエースになれた理由は勝てる勝負しかなかったからですよ」

ぶんぶんと首を振る、役立たず達。

「あー役に立たん奴等だ。彼らが死んでは我が保管課は仕事をしなくてはならなくなるんだぞ、俺がどうにかするから隙について殺してしまえ」

「了解しました。隙を逃すほどには落ちぶれちゃいけませんからね」

「そういえばこれで始めて隊長の実力が、分かるんですよ。土下座の英雄の力見せてもらいますよ」

ふんと鼻で笑って彼は稲光荒れ狂う戦場に歩みだす。部下達はあまり心配した様子もない。

と言うか准将だったら何とかしそうだから凄い。

だが扉を開いて准将は一度扉をそのまま閉めた。

「あの、俺情報処理系の魔導師だからさシールド張ってくれ」

「あんた元武装局員でしょうが！！」

「ああ、主に後衛だったし。最低レベルしか俺は持っていないぞ」

ふんぞり返るがどんどん准将の駄目さ加減が発露していく。

彼はそう言う男だ。仕事は出来るが基本は役立たず、だがツッコミのサーリットはともかく、ノルマンディはどちらかと言えば非道だ。

「取り敢えず扉を開いてください」

「おう了解した」

その後扉を開いた准将をけり落とす部下に、忠誠心と言うものがあるかと言われればそんなもん無いに決まっている。

階段から転げ落ちる准将は、意味不明な体の動きでダメージを拡散し立ち上がった。

それと同時に詰め所に相当強固なシールドが張られた。

部下の暴挙を恨めしげににらみ付ける准将。雷光の担い手に対しての生贄とでも言うべき状況だ。

だが彼はあらゆる意味で一つ変わっている。

「仕方ない、土下座の英雄と言われる由縁を見せてやるしかないのか」

言うておくがそんな物が格好良いわけじゃない。

少し視点を移すが、一般人からの通報だったそれは。第一次JS事件の際に管理局を追い詰めかけた兵器の一つ。

ガジェットドローンが、地上本局近くで発見されたと言う。

どっかのやる事と目的が絶対に間違っている科学者。

アルハザードの忌み子とか言われている、電波極まりない男でさえそんな事しらねーよといていたが実際あるものだ。

本局の執務官、名前に運命とか結構ひどい名前つけられたあまりにも可哀想な子が、その強行捜査を行っていた。

半数のガジェットをその有り余る反則的な魔力でねじ伏せていたのだが、何処からか声が聞こえ始めた。

いあ、いあ、いあ、いあ

当然准将である。当然この発言に意味は無い。

「え？ へ？ なに、これ」

シールドでガジェットの影響を阻んでいるが、動揺の所為かあまり性能のいいシールドは構築出来なかったのだろう。ガジェットからの攻撃の衝撃に辛そうな顔をする。

これも一瞬の隙だ。だがここで部下二人ですら予測しえない事態が起こる。

「攻撃をやめるガジェット」

保管課の人間の音声認証でガジェットは攻撃をやめる。准将が一番使える部下と言っただけあるのだ。

当然だがこの声はフェイトには届かない。ぴたりと止まったが、ガジェットに警戒をやめる事はなかった。

しかしその警戒こそがある意味問題だった。破壊しすぎたがジェットや、先ほどの攻撃で辺り一面に煙幕でも張ったような状況になっただけだ。

その煙の奥にまだかつて戦場でも見た事のないものを目にする。その実像が明らかに成ったとき、彼女の目がより大きく開かれる。

「え？」

半壊したガジェットを抱きかかえていた准将がいた。彼はかなり本気で涙を流している。

この世界で多分最も洒落にならん馬鹿がそこに君臨していたのだ。彼はフェイトを睨み付けると、予想もつかない暴言を吐いてくる。

「やめてください、あなたは何をしたいんですか。私の部下に何の恨みがあるって言うんです、こんな大量虐殺。」

この鬼、あくま、人の心も分からない人非人め。これだけ一生懸命仕事をしているやつを殺すなんて良心の欠片を持ち合わせているんですか」

今土下座の英雄の本領が発揮された。

どれだけ否定してもこれが彼の生き様だ。演技じゃなくて本心でやっている辺りがとても性質たちが悪い。

「え、え？ カソウなに言っているの？」

いきなり知り合いからの暴言の乱打、彼女でなくても動揺するのは当然だ。

「黙れ、鬼のような所業がなぜ出来る。いま貴様は何人の部下を殺した。今腕の中にいた部下は、もう息絶え呼吸すらしていない」

それ以前の話で、ガジェットは呼吸なんぞしていない。

「でかい胸しやがって触らせろや、珍しく服を着ていると思いきや、なんて酷い事をする。後お母さんによろしくね、個人的にプレシアさんでもいいんだ」

いつものように駄目人間を見せ付ける准将。時々欲望を吐いている。

途中から欲望しか出してないが、これだけ酷いマシンガントーク

をされればあまり口が達者な方ではない彼女は慌てるだけだ。
だが取り敢えず准将が怒っている事は分かるのだろう。

「ごめん、よく分からないけどごめんカソウ」

「誰が許すか！！ このダボハゼがー、こいつらがいなければ俺の仕事は滞るところか進まなくなるんじゃないー」

実はカソウより高い身長を縮めて、本当に怒られた子供のようになっている。

いつもハイテンションだが彼女を怒ったりする事の無い男が本気で怒っているのだ。例に挙げるなら大人しい奴が切れたのと同じだ。混乱とか色々な感情が、まだ二十になっただぐらいの彼女に押し寄せてきたのだから、しょぼくれるのも当然である。

「ごめん、ごめんって、お願いだから話を聞いてカソウ」

「聞くと思っただのかこのボケが、執務官の分際で大暴れしやがって
お前クラスの執務官なら保管課も知ってんだろぅがボケじゃねーの
お前」

「う、でもでも。でもだよ」

謝罪以前に最早准将は話を聞いていない。

「ガジェットは危険なんだよ」

「知らん、そんなもん問題が起きた時対処すればいい」

「それはちよつとないんじゃないかな」

「ある」

この後准将オンステージであった。

「そんな無茶苦茶言わないでよカソウ」

「事実だ、覚えてるよこのエロボディめ」

これだけ言えば恋愛フラグは立たないだろうと言うところまで彼女に怒鳴りつける。

この後部下に准将は打ち抜かれて気絶する事になるのだが、その頃にはフェイトは既に正座させられ、痺れて腰砕けの状態だった。

「お願いだよ、許して、お願いだからもう許してカソウ」
「嫌がるうが知るか俺が満足するまでなんでもしてやる」

こんな会話がずっと続いていたのである。

ちなみにだが撃たれた要因としては、腰砕けになって必死に耐えているフェイトの表情がやけにいやらしく見えたのでつい、「お前今の状態エロいな」が理由である。

いつもよりちょっとギアが飛んでいた気がするぜ准将。もう何をかいても許される気がしてきたんだ准将。この作品は野郎ばかりなんだ准将。

また一歩リンディフラグから遠ざかった上司がいるぜ保管課。

ちよつと業務時間が増えたけどそれは仕方ないんだ保管課。

そもそも一ヶ月の業務時間が三時間と言うのがおかしかったんだよ保管課。

こんな素晴らしい職場にご一報を、質量兵器保管課です。

八章

質量兵器保管課 製作者と科学者

それは珍しくスカリエツィが、笑みを見せているところから始まる。

「これは傑作だ、まさかガジェットが管理局の警備システムに組み込まれているとは」

そこは資料整理課と書かれていたが、彼は評議会からの情報を得ていた人間だ。それに顔見知りでもあった、評議会と面談しに言った彼に会うことなどざらの話だった。

管理局最大最悪の暗部 質量兵器保管課

根絶をのたまう管理局であつたとしても、簡単に消す事は出来ない破壊の申し子達。その管理を一手に任された男、まだ二十代でありながら最高評議会からに信任を得てしまった。

ある種、彼と同じく鬼才の一人。

過去に一度だけ戦争で使用されたことがある。管理局が隠したくて、隠したくてならない、管理局の切り札にして絶対秘匿するべき代物だ。

「あはっははは、流石カソウだ。使えるものは何でも使うんだ」

彼の手元には一枚の手紙がある。

そこにはただ容易く、ガジェットの製造法を教えろと書いてあった。

「と言うか馬鹿だ、絶対に彼は馬鹿だ」

ぐしゃりと紙を握りつぶす。彼は笑ってはいたが、その表情は少なくとも笑ってはいなかった。

同時に悔しくもあった、あのアホが自分よりも目的を達しているという事実が、だが困った事に彼はここから出ることが出来ない。

管理局は優秀だ、簡単に彼を逃がすほど甘いところじゃない。

「だがこれに返答するという事はカソウ、君は自分の首を絞めるところか吊る話になるんだよ」

最も彼はそんな事をするつもりはない。逃げられるなんて思っていないのだ。

だが、その無限の欲望の目には間違い無く怒りが、そして永久に湧き出る欲望があった。ただ湧き出る感情が、彼の表情ごと極色彩に飾り立てていた。

そんな頃の話

「やっぱり無理か。折角秘匿部署の権限で送ってみたが今よりもガジェットが少なければ俺達が仕事をしなくてはいけない」

「いやどうせここで寝泊りしているんですから、いいんじゃないですかたいちよー」

「二人して本当に脳みそ腐っているんですか、百機のガジェットが五十機になったてあんまり変わりませんよ。どうせここにはよつぼどの暇人か真面目な人しか来ません」

初めての警報はランクSだったが殆ど准将の一人勝ちだったし。

「書類整理はガジェットがやってくれているんだよ。いいかここはサボるための部署だ、サボらなければ部署といえないんだよ」

「そうですね今まで二人でしていた、兵器確認もガジェットがやってくれるようになりましたし。あのちよつと頭の残念な科学者サマサマですよ」

そういいながらも准将は資料を見ているのだが、あまり納得行かない表情だった。

「しかし上司も毎日こんなものを送ってきて何のつもりなんだろうか」

「あーそれですか、僕が出向してきた時のやつでしょう。ちよつとばかり被害が拡大したんですよ僕の所為で、仕方ないから文句があるならカリム・グラシアに言って来いと言ったもんで」

「いや俺がもしれませんよ、久しぶりに教導隊の後輩を鍛えてやったら六人ばかり入院しましてね。その時も文句があるなら聖王教会に文句いえやといたしましたから」

「いや俺がこの前呼び出された時間違って教皇を車で跳ねたのが原因かもしれない。一応証拠は隠滅したし、ばれる要素はないはずなんだが」

約一名明らかに犯罪者がいるが、心当たりが多すぎる奴ばかりである。

それより准将の発言は大事件過ぎる。この前そう言う事件が大々的に出ていたんだが困った話である。

「っと違った、どうやら俺が送った手紙の内容がばれたらしい。どうやらあの科学者がばらしたらしい、いいじゃねーか使えるもんは

質量兵器でも使っちゃえばいいんだよ」

流石人質事件の際に被害者ごとまとめて吹き飛ばそうとした男の発言だ。なにより保管課の人間の発言じゃない筈なのに、こうじゃないと保管課じゃないと言う気がするのは、この課らしいとでも言うべきなのだろうか。

「じゃあその言葉のまま送っておきますね」

「頼む、どうせまた同じ事しかいわない。ああいう上司って最悪だよな、真面目な部下のやる気を失わせる代表だ」

だが煽る部下はさらに最悪だろう。

彼の部下であるノルマンディはともかくだがサーリットは明らかに准将に汚染されてきている。

そもそもこの三人の頭の中には働かずに金がもらえりゃいいやとか言う思考が完全に植えつけられているのだ。

こういう上司はもっと最悪である。

「うーうー言っているあの人の姿が浮んできますよね。三十過ぎてなにやっているんだか」

「さあね、少将にもなると色々忙しいんだろうよ。俺も忙しいのだから、そうそうこの問題なんだがどう思う」

「ってこれ執務官試験の勉強じゃないですかたいちよー」

かなり驚いている様子だが、ノルマンディは驚くようなそぶりを見せない。

「いや、俺が管理局でとつてない資格これだけだし。やっとこの部署に着てからの全ての資格を確保できた。後はこれだけだしな暇だからこんな事もできるんだよ」

「できねーですよ。いつも思うんですが准将って頭のいい馬鹿ですよね」

少しの思案の後にさらさらと問題を終わらせていく。

何でもできる准将に少しは尊敬の念を持つ部下だが、地の底の評価の准将に何を追加しても特に意味はない。

「そうか、こんなもん何処まで言っても暗記問題だぞ。自分の今までの経験の中から答えなんてもんは出てくるんだよ。執務官試験なんてその典型的なもんだろう」

「けど隊長じゃ魔力ランク的に結構厳しいでしょう。たしかこの前の定期検診ではBランクだったでしょうが」

「なに言ってるんだ、俺の魔力ランクはAAAだぞ。昔部隊でつけていた、リミッターを解除してないだけだ」

だからなぜ君はそう意味もなく凄いのになぜんぜん凄くないんだ。

「ただ困った事にその部隊が全滅してな、当時開放権限を持っていた奴が死んだだが、困った事になそいつしか知らない暗号でロックされててな。一生開放されなくなってしまうんだ」

「流石たいちよーだ、いみなくオチがついて回る。尊敬全く出来ませんよ」

スカさんが怒りに燃えているさなかの保管課、今日は特に騒動もありません。けどカリムさんの使いがったのよさが実は尋常じゃなくてヒロインになりかけたんだ保管課。

本当は凄い上司なんだ准将は、ただ頭が残念なだけなんだ。

そんな楽しい職場、質量兵器保管課です。いま私達はこの職場に新しい風を求めています。

九章

質量兵器保管課 設立と現在

なぜこんな物騒な課が出来たかのお話。

新暦に入る以前から誰でも使えてその破壊力の非常識さから、質量兵器が管理局より根絶される。

しかしながら最高評議会は、表でそう言う決議を行いながら、もう一つの策略を動かそうとしていた。

そもそも才能に頼ったと言う時点で欠陥が明らかだ。

魔導師だって人間なのだ、選民意識の働く者がいない訳がない。またそういった人材の確保が困難になるのは当然だ。

実際時空管理局は、現在進行形の人材不足に陥っている。

高ランク魔術師は咽喉から手が出るほどに欲しい状況だ。

そしてAMFと言うものが始めた、ある程度優秀な間同士なら対応策はあるにしても、もしかしてこれより先に魔力が完全に消去されるような道具が出来た時どうすればいい。

管理局の戦力は消える事になる。

ゆえに最高評議会は一つの決断を下した。

それこそが時空管理局最高評議会所属対魔導師無力化対策質量兵器保管課なのである。

まだ現在のところこれ以外の対策部署は、保管課以外存在しない。その対策を講じるはずだった最高評議会は消えたのだ。

また保管課がばれた際に、管理局は教会にその力の権限を握らせる事により聖王教会を抱きこんだ。

現在保管課には一千万の質量兵器が眠っている。解体する予定とされているもの達だ。

しかしこれは管理局によって使用目的で保管されているのである。一応の体面は資金不足と言う名目だ。

現状でこの保管課を知っているのは、エリートのたまり場である執務官ですら、かなり優秀なしかも個人捜査官に限られる。

三提督も実情も場所も詳しい事は教えられていないが、知っている事は知っている。

ただおちよくられる為だけに、入れられた八神三佐も、あと教会のごく一部の人間。

そしてこの課を抜ける際に殺されたもの言わぬ屍達。

そんなもんだろう。この課はばらされるわけには行かない課なのだ。その程度の秘密厳守が出来ない人間であるのなら殺されても仕方ない。

管理局は別に子供に優しい組織ではない。慈悲無き部分に慈悲などくわえるわけではない。

これがばれる事自体、管理局にとっては致命的なのだ。

あらゆる次元世界を牛耳っていると、いつでもいいような組織であり。

質量兵器を持つ世界を屈服させているに決まっている。そして強引に兵器を奪い根絶させた。

どう冷静に考えてもこの程度は行なっている。と言うよりしないはずがないのだ。

不満を持たない世界はないだろう。そしてもし管理局が質量兵器を隠し持っている事が判明すれば、どんな事が起こるは目に見えている。

だからこそ今この責任者になったある女性は、胃に穴が開きそうな思いをしている。

しかしながらその現場指揮官であり、質量兵器における殆ど全権を持つ、カソウⅡモヤソウ准将は、そんなの何処吹く風であった。

実際に彼の立ち場相当危うい。英雄と呼ばれ、発言や行動が色々々々問題ではあり犯罪者でもあるのだが、なぜか彼の身辺調査をしようと思いつくところは一切出てこないのである。

管理局だって、こんな邪魔な人間必要じゃない。

組織として今の彼に価値はないはずである。質量兵器所持だって一応は、許可された代物である辺り管理局の公安でも対処できないのだ。

何しろ法律に違反などしていない。

それでなくても今、管理局は色々とごたごたを抱えている。その中で一番酷いのが、教皇が意識不明と言うものだろう。

何者かによって暗殺されかけた疑いもあり、上へ下へと大騒ぎの状態だ。

しかし彼には一つだけ、隠し様もない不祥事があった。

「大変だなそつち、そうそつちの方も兵器の搬入の準備できているからさつさと持って来いよ」

「了解しています。それとは別の案件ですが、スカエリエッティになぜあんな手紙を送ったんですか。あれの所為であなたの保管課責

任者としての信用はがた落ちですよ」

あれだけ言いたい放題言われても、まだ人を心配できる余裕があることに驚いた准将は、こいつマゾでもあるのかと彼女に失礼な視線を向けていた。

これこそが准将の唯一の不祥事だ。

だが英雄の失態をばら撒くわけには行かなかった管理局の工作により知れ渡らなかつた所為か、こうやってカリムに怒られるだけで済んでいるのだ、気にしたそぶりを見せない。最もこのあと査問されるのは殆ど確定だ。

「いいんだよ別に、もう一つの方がばれてないなら適当な言い訳を文面で送っておく」

「ってまだ、上げられるようなとんでもない事しているんですかあなたは」

「リンディ提督にたいするストーキングで息子に殺されかけた事が」

はあと方を胸を撫で下ろすカリム。

もし彼がとんでもない不祥事を起こしていれば、彼女にもまた悲惨な目にあうのだ。

彼ら家族にはきちんとした謝罪をしておこうと、心に誓う彼女であった。知り合いだから不問にはできる。

「そうそう忘れていた。ちょっとだけ真面目な話なんだが」

「真面目な話なんですか凄く珍しいですね」

「最近あんたも好みになってきたんだ。胸吸わせてくれませんかね」

顔を真っ赤にさせる、どっちの意味かも分からない感情が彼女に渦巻いていた。

その感情の発散させる方向など貞淑な彼女にあるはずも無い。た

だ通信をきり、最近デフォルトになってきた、うーうーと言う泣き方のまま机に蹲った。

「ん？ 凄く真面目なお願いだっただけど。いいじゃないか吸わせるくらい」

彼のあのお願いは、彼自身からすれば大真面目極まりない発言だった。切れる前に揺れた胸の大きさを手で調節しながら妄想を再現する。

「もういやだよ……あの人」

ただ心はまだ乙女の彼女には、彼の扱いは難しすぎた。

その日いっぱい彼女の仕事さ出来ないほどに、心に溢れる訳の分からん感情を暴走させていた。

そろそろシリアスに入りかけているぞ保管課、けど准将は相変わらずすぎる保管課、背景だけはやたらと重いんだ保管課。

やめれば二階級特進が約束されます。それこそが我らが質量兵器保管課です。色々とまどろっこしいですが新たな力を募集しています。

十章

質量兵器保管課 英雄と査問

准将の立場が残念になる話。

「残念だよ、カソウ元三等陸士。あの頃の君にこんな査問をかけること自体、私は不服だった」

「そりゃ仕方ないでしょう。それが仕事ってもんですよ、アナウメ元三等陸佐」

それはかつての上司との再会だった。

彼が英雄になった事件の上司と部下であった。現在の地位を中将、彼を陸士学校時代から鍛えていた恩師の一人ではある。

「ではまず釈明をお願いするかな」

「特にありません。いくらアナウメ中将でも保管課の情報を教えられませんか、そのくらい猿でも知っている内容ですよ。知っていて言うのは、猿どころかの狸だけですよ」

「まさか、一番言われたくない馬鹿にその発言をされるとは思いもしなかつたよ」

少なくともそれは恩師との会話には程遠いものだった。

二人してあからさまな牽制をしながら笑いあう。

「やはりあの課の情報を差し出す気は無いというのだな。この、歩くテロリストめ」

「いえ基本的に都合の悪い事を、開示するつもりがないだけですよ。」

それぐらい理解しろこのゴリラ、いやこれは全生命に対する侮辱だ。こんな生きる価値もない存在に生きていると言う称号をくれてやる事自体がおこがましいですよね」

何度も言うが一応昔は恩師であり上司であつた人間である。

だが彼がこんな状況になつたのはある意味こいつの所為だ。大体八割前後こいつの所為である。

「ああいえばこつ言う糞餓鬼め。昔は素直でいい子だつたのに見る影もないわ」

「ユーノ先生から勝手に引き抜いたくせに何を言っているんだ、お前が俺を無限書庫から陸士学校にぶち込んだのが原因だろうが、ゴリラのような顔してるくせになに人間の言葉喋ってるんだ」

基本権力に弱い彼であるが、この中將は別のようである。

言葉の節々に棘がある。何かしら因縁があるようだが、暴言の応酬はこれで収まるわけがない。

「と云うか、いい加減に貴様の老害も見飽きた、そつだ脳みそみたになつてみるといい。ほら全速力でさ、お前の新たな就職先だぞ」
「貴様どちらの意味か分からないが、どちらにしろ最低な事ばかりいいおつて」

「査問といいながらどうせ保管課の情報を搾り出したいだけだろう。あわよくば、管理者権限を手に入れたいだけだろう。それだけで本局にだって対抗できる戦力を得るんだからな」

それは凶星だつたのだろう、中將は顔をしかめた。

だが考えても見れば、准將がこれを外部に保管課系列の事を喋る事など無い。それにこれは非公開の代物だ、いくら喋っても証拠など無い。

すぐさま彼は表情を治して彼一睨みする。

「当然だろう、あつちの戦力が反則過ぎるだけだ。質量兵器の保管権限ぐらい持つておかないと困る。そして貴様はさつさと前線にもどれ、八神なんていう女が今じゃ地上本部における新たな柱となっている。冗談じゃない、貴様が成るべきなんだその柱は」

凄く嫌そうな顔をしている准将。色々とあるだろうが彼はこう言う事を昔から言われ続けていたのだ。

昔からこれがうざつたいと心の底から思っていた。

そして今の彼のサボリ癖を見てわかるだろう、そんな忙しい事、誰がしたいと思っっているのは当然の話だった。

「え？ あんた藻が嫌いなのか、折角新しい英雄が出来たんだ。頑張つて俺を忘れてもらわないと。祭り上げられるなんてごめんだね、いいように扱われればいいんじゃないか。家族でも人質にしたら股ぐらいなら簡単に開いてくださるうよあのおまちゃんなら」

「そんな事を今取り上げてはいない、何の為にあのスクライアに土下座してまで貴様を武装局員に仕立て上げたと思っっている。地上本部の柱になるべき人間だったからだぞ」

「気のせいでしょう、きつとあなたの頭が沸いていたせいですね。消えればいいんじゃないでしょうか、そんなやばい頭で管理局の上にいるのは問題すぎますよ」

いきなり敬語で話してみるが言っている事は最低だ。

准将は明らかに目の前の男が嫌いだ。だが目の前の男は困った事に彼に期待をしている。

それが過度かどうかは、実際本人達にしか分からないのは当然の話だ。

しかそこまで言って准将は会話をする必要が無いと思ったのか立ち上がる。

「いい加減去るとの会話にあきてきました。結論だけ言って死んでください」

今日は折角の非番だったのに呼び出されて彼は不機嫌なのだ。

いつもと殆ど変わらないくせに、非番と言言葉に何か感じる所でもあるのだろう、見下すように睨み付けた。

「そうだった査問だ査問、スカリエツティに技術提供を申し込んだらしいな。それがどういう事か分かっているのか」

「おい、それが普通本題だろうが、猿か猿だよなゴリラ。下らない時間で俺の寿命を使うな、お前の寿命だけ全速力で使いきれ」

親指が下に叩き落される。だがそんな彼の行動を見ても文句を言う事はなかった。

ただ真面目な話をしている時にふざけた事をしている彼に対する目はかなり冷ややかではあったのだが、准将は空気も読めないから気付かない。

「弁明はどうした」

「ガジェットドローンは、警備に都合のいい兵器はない。何より保管課は正確に問題ある奴しか入らない所為で、処分なくちゃいけないのが面倒なんだ。その文句については既に出している、だが表の資料整理課と言う題目が入る人間を無能か性格の難のある奴に限られている状態だ。だからこそある程度の戦力を恒久的に確保できる手段が必要だったから、資料請求しただけだ」

くどいようですが准将は仕事だけは出来ます。再確認の為にもう

一度。

「だがあの犯罪者がもしそのガジェットを脱獄に使おうとしたらどうするつもりだ」

「心配の理由が分かりませんね。土下座の英雄カソウ准将が、そこまでの無能だと言うのならあなたは完璧に死んだ方がいい。そんな無能を管理局に入れた人間なんですからね」

ちなみにだが、彼はそんな事が起きても知った事じゃないと思っている。

分が悪いとみた中將は話を逸らすように、資料をあさり次の話題を探し始めた。

「それとだ君には六十件の事件に関する容疑がある、証拠は何一つないが少しばかり問題だろう」

一応査問である為、そう言ったことに対して口が出せないのだ。准將は舌打ちして中將を見る。

「証拠が集められない管理局が、それともそんな容疑をかけようとする管理局が、その程度の話は時間の無駄だ」

大体六十件じゃなくて、九十六件だと言い張りたいが、ここぞそんな馬鹿な発言をする准将では流石にない。

だが次の資料を見た時、中將はやけに嬉しそうに笑ってしまう。

「リンディ 統括官へのストーキングについては」

「失礼な事を言わないでほしい純愛だ。ただちよつと仕事中の写真をとったり、家まで迷惑をかけないように後ろから付き添ってみたり、何度も告白しようと思っ呼び鈴を押すけど逃げてしまったり

しかしていません」

それを人はストーカーと呼ぶのだ。

一番冗談だろうと持っていたところが事実だった。馬鹿らしいと思つて笑つたと言つのに事実だった。

まあ、取り敢えず事実だった。

資料を持つ手が滑り落ちてしまつ。

馬鹿だ、この男本当に馬鹿だ、言わなくていいことを言いやがつた。

「か……か、そ……………カソ……………ウ、カソウ准将それは君の得意な冗談だよな」

「純愛を否定しません、私はリンディ総括官に惚れています」

「頼む、そこだけは否定してくれ」

今中将の足場は崩れ落ちた。いままでこいつは管理局にとってプラスになると思ひ続けた人間が、ただのストーカーだと言つのだ。彼の言葉があまりにも中将にとっては想像しがたい事実だった。それこそ叫んでしまふほど。

「何を言っているんですか中将、あとは本人に既に三百五十八回ぐらい結婚を申し込んだんですけど断られていますね」

「諦めてくれ、せめて百超えたあたりで」

「あとは、一日に十通のラブレターを送っています。現金を添えてよく無記名で送ってしまうんですよ筆不精なもので」

開いた口がふさがらないだろう。色々と間違つた方向に駄目だった。

ふるふると震えている手は、彼の怒りを表しているのだろう。だが途中でびたりと拳の震えが止まった。

高々と振り上げられた拳が机に凄まじい速度で叩きつけられ、辺りに中將の手の折れる音が響き渡った。

体を振るわせて中將を見る彼の顔は普通にビビッていた。流石と言うほどの迫力に彼は完全に押し黙る。これが歴戦の管理局の英雄の姿であった。

「カソウ＝モヤソウ准將、本日を持って時空管理局員から解雇させていただく。秘匿部署である保管課の情報を喋らないと言う誓約書に判を押し早々に管理局から消え去ってくれ」
「え、ちよつとまじ」

本日を持ってカソウ准將は准將じゃなくなりました。

と言うか実は最初の写真以外全部嘘なんだけどね准將。けどこれで保管課と言うタイトルに偽りありじゃないかな准將。君いくらなんでも馬鹿すぎだよ准將。あと君がさっきの言葉を言えば大抵の間は真実だと思つよ准將。

本日より保管課から無職に変わります保管課、これで本当にいいのか保管課、殺されるような事はなくても監視ぐらいされるんじゃないか保管課。

とうとう英雄がいなくなつたけど、美人で可愛い上司がいます。あと新しい上司は真面目な人らしいです。

更なるバージョンアップをして復活する予定、質量兵器保管課に祝福を！！

十一章

無職 酔っ払いと就職

一般企業に四十件ほど就活後の元准将の話。

「畜生、世間が悪いんだ俺が悪いんじゃない」

酒を煽ったコップを机に叩きつける。

「だんなーいくらなんでも飲みすぎですよ」

「うるせーたこつパゲ、俺は今管理局主体のこの世界に絶望しているんだ」

「いや旦那、あんた管理局系列の企業に申し込んでねえとかいってたじゃないですか」

いや元准将なにやってんだあんた。

一応管理局のエリートだ。天下り先ぐらいあってもいいはずなのだが、殆ど強引に叩き落された。

資格だけでも相当量持っているはずなのに問題があるのだろう。

答えは面接だったりする。書類選考では確実に優秀な人物であるのだから通るのだが、面接であの輝かしい暴言をぶちまけるのだ。

特に性格、性格が駄目すぎた。

「いつそユーノ先生にでも雇ってもらおうか」

本人は首を絶対に縦に振らないだろう。ここでもやつぱり性格で。

「一応司書の資格も持っているんだけどな、しかも経験者だし。一応将官クラスの間人なんだからそれ相応の場所があつてしかるべきだろう。実績が無いわけでもないのに」

「いや旦那のそう言うところが、駄目だったじゃないですかね」

「まあ面接官に、美人ですけどちょっと整形がきつすぎないですかとかしか言つて無いんだぞ」

いきなりダイレクトアタック過ぎるにも程がある。しかもオーバーキルだ。

「あとは情報課で見たことのある不倫の人だとかかだな。どう考えても俺に非なんて一つも無いじゃないか」

「思いつきり無茶苦茶大ダメージの部分を決っているじゃないですか旦那」

「納得いかない、俺は納得いかない」

多分面接官もこんな奴を書類選考時に落とさなかつた事が納得いっていないだろう。

もう一杯と酒を店主に注がせてまた一気飲みする。

「うまい、こんな上手い酒ない。退職金だけはアホみたいにあるから大分マシだけどさ、仕事しなくても貯金もあるからいいけどなあ」

二十三の身空で無職は色々と世間的にも悪い。何度も言うが基本的に無職は俗物だ。

口は悪いし性格も悪いが、それでも基本的に俗物である実は体面などは凄まじく気にする弱いのだ。

何度も酒を浴びるように飲む毎日。

うおん、うおんと、泣き喚く、偽りの罪で自分は裁かれたのだと彼は泣き喚いた。

「旦那、あんたって人はなんて馬鹿なんですか。査問で嘘偽り無く言うといっただくせに思いつきり自供ってあほでしょう」

「普段なら冗談の通じる相手だったんだけどな普段だったら。一体なぜあんなに起こったか理解が出来ない」
「きつと旦那が空気を読めないからです」

結構ショックを受けている無職。

しかしこれは彼が陸士学校に入ってから身に着けてしまったスキルだったりする。

何度も言うが彼が昔は本当に真面目で素直だった子です。空気だっただけ読んでいたのです。

「くそ、退職金代わりにガジェットと、管理局の不祥事をばら撒いてやったんだが、もうちょいぶち撒いてやりゃよかった」

「あの……旦那がやめてから管理局が教皇の意識不明事件以来のてんやわんやが続いていますよね。将官クラスの人が次々と逮捕されていってると、言う話でしたから性格が悪すぎでしょう」

やりたい放題の男である。なまじ仕事が出来から性質が悪い、これだけの事をしておきながら証拠を残さないのだからここまでくれば一流だ。

「最もここをくだ巻いてばらしたと言っても嘘と思われるのが関の山、やっぱりここはいい店だ」

「いや旦那のおかげでこの店はいろんな意味で、性格の悪いやつら

が集まるところになってますがねえ」

「大体管理局も前線だったら雇ってやるといつてるじゃないですか、それを断る旦那が悪いですよ」

元々は総合Sランクの魔術師であった無職だが、首を横にブンブンと振る。

「痛い思いをしてやる職業じゃないよあれは、無駄に命が掛かっているのに給料はあの課の半分とか馬鹿じゃないのと思うだろう」

「それでも英雄じゃないですか旦那は、昔の性格だったら今頃元帥だっていけますよ」

「無理無理、そうなるような事があつたら管理局が質量兵器で吹き飛ばすだけだって、それぐらいありえない事だな」

無職が保管課ならそれもありえた、本当にあり得たんだから困った話だ。知っている人間全てにお前テロリストだろうといわれるだけのことをしてきた彼ならありえるのだ。

「管理局なんて滅びればいいのに」

「旦那の性格が変われば就職だってどうにかなるでしょう。素直な性格がどう進めば、辺りを蹂躪する戦車になるのか教えて欲しいですよ」

本当にそうである。

だが無職は大して気にしない。と言うより自分の性格が悪いなんて彼は思っていないのだ。

人の常識と自分の常識の際に気付く瞬間はまだ訪れない。訪れたとしても特に変わらない。だから人の話を聞かないのかも知れない。

「あーあー、なんか面白い事でも起きないものか」

「はいはい物騒な事を言うのはやめて、そろそろ閉店ですから消えてくれませんか。後いい加減店の前の張り込みの捜査官をどけてもらわないと商売上がったりますよ」

「はいはい金は、ここにおいておく迷惑料もコミだ文句は無いな」

問題ないですよといって金をしまつ。

鼻歌を歌いながら外に出る無職、どんな捜査官かは分かっている。かなり優秀な存在と聞いているからだ。

「カソウ」モヤソウ元准将ですね。108部隊所属ギンガ」ナカジマ准陸尉です、お話させて頂いてよろしいでしょうか」

無職も当然断りを入れるつもりだった。彼の犯罪に証拠は無い、背景彼がいたとしてもばれないだけの偽装はしている。

任意同行をするほど彼も暇じゃない。

「それでは、質問です。教皇事件の重要参考人としてあなたの名前が挙がっています、あなたのその頃のアリバイを教えてくださいませんか」

「それは」

「わかりました、ではつぎに」

この子、人の話を聴かないにも程がある。

「あなたが現在所有している兵器に関してです、それは保有が許されているものではないはずですが」

「ああ、これはな退職金」

「退職金としてそれはありませんし一般人が所有していい兵器ではありません」

ものの見事に会話が通じない。性格としてはおっとりしているほうのはずなのだが全く人の話を聞かない。

この後も矢継ぎ早に、質問を浴びせかける彼女。

そんな事ばかりするもんだから、

「おい、その鳥頭」

いい加減無職も切れた。

「はい、なんででしょうか」

根が素直なのだろう、ドスの聞いた言葉に反応して珍しく彼の言葉を最後まで聞こうという姿勢を示す。

「人の話し聞くか無いよね、まるで猿と会話しているようだったよ。ガジェットは既に許可書もある、それに伴った資格も当然取っている。また教皇に関しても一切の証拠が無いのに、まるで犯罪者のようないかたしやがって、馬鹿ですよ、いや馬鹿以外にありえない、流石ロリコン帝国の年長だ、ナカジマハーレム正妻め、どうせ父親のロリコンワンダーランドを広げるじゃまをする俺に対する嫌がらせだろう。」

そもそもその査問は受けたはずだ、全部証拠なしの不十分の不起訴、いい加減にしるこの管理局アップヤード。もうこの程度の暴言で泣きそうですか、泣けいっそ泣いてさっさと帰れ、パパにでも慰めてもらえこの無駄女」

ここまで言ってすっきりしたのだろう一度無職は息を落ち着ける。反省はしているのだろう頭を下げていた。だがふるふると体を震わせているのは怒りだろう。

カリムと違つて涙を流す事を必死に絶えていた、気丈な態度を必死に保ち続ける。それなりに酸いも甘いもかみ分けているのだろう。

「あ、あのそれについては申し訳ありません、けどナカジマハーレムってなんですか！！ 正妻って、ファザコンって！！」

「管理局のゲンヤハナカジマの情報をあされそれぐらい捜査官ならしろ」

「私達は公安じゃないんです。あること無い事、言うなんて最低です」

「人を犯罪者扱いするなんて最低ですーこの人」

一応念のために言っておく、無職は彼女の言った事を全部やってきている。ガジェット以外は全て彼の犯罪履歴に乗っ取った代物だ、これだけ彼の罪を見つけて問いただしてきたのは、彼女が優秀な捜査官と言う証明なのだ。

ぼろが出そうになった無職の苦し紛れのいい訳のような怒声が、まだ精神的には未成熟な彼女を怯えさせた。偶然とは言えまたずいぶん強引な手段である。

「それで脳みそアップヤード、俺を捕まえたいならまず証拠を持ってきてからだ。」

もう会話したくないお前と」

「酷いです、何でそんな事を」

「お前と話したくないから、ハーレムのマハラジャが呼ぶなら任意でもいってやるさ、後新しい就職先と、家とかも」

やはり無職は無職だ、言いたい放題だった。

この傍若無人な発言を来たギンガはさすがに口を大きく開けてポカーンとしている。

そのまま彼女の返答に答えることも無く後ろを振り返る無職。

本当に保管課から無職にタイトルを変えたんだ無職。
仕事も希望もサボりもあつたもんじゃねえ無職。

いま実は保管課は人員補給がなされてきちんとした課に変わりつつある。まさに青天の霹靂、起こりえることの無いことが起きていた。

人員も大分揃ってきました課長はとても優秀で真面目な人です。
こんな新たな職場、質量兵器保管課に集まれ。

十二章

無職 ゲンヤとカソウ

ハーレム親父に呼ばれた頃の話。

いろいろ性質の悪い無職が呼ばれていた。
取調室に二人が対面するように座っている。

「カソウ元准将だな。すまんな呼びだてして」

「おう、よく呼んでくれたハーレムクリエイターナカジマ」

びしりと空気が歪む、明らかに表情が固まっているのだが、無職は気にしたそぶりを見せない。

と言うよりほめ言葉と思って使っているの彼は、だが当然いい空気が流れていない。それを感じ取れるほどの能力（空気が読めない）が無職あるわけも無いので、軽く鼻を鳴らした。

「まあいい、あなたには二つの嫌疑があるんだ。アリバイもある証拠は無い、だがあの場所に車で移動していたのはカソウ准将あなただけだ」

「そうかい、そうかい、なら証拠をもってこい。話はそれからだな ナカジマ三佐」

一発で会話を遮断する。二の句を告げさせの無いのが彼の性格の悪さです。本当に疲れる存在である。

「さて、どの内容で俺を確保したいのか教えて欲しいハーレム親父、

個人的にはあんたのロリコンソウルについて深く言及したいんだが」

本当にこれを聞きたくて彼はここに来ている。

なんともふざけた男すぎて、あきれの感情しか抱かない。

「それは今関係ない、それに俺は別にロリコンじゃない妻一筋だ」

「嘘はいいですってナカジマ三佐、どう考えても幼女ハーレムを作ったりしてるじゃないですか、パパリンと呼ばせたりしているんでしょう。流石ナカジマ三佐、格好いいぜ、その渋い表情から少女に手を伸ばすその毒牙、素晴らしい」

「いやあんた人の話ぐらい聞いてくれ」

ゲンヤを尊敬の眼差しで見続ける。きらきらとヒーローでも見るように視線が突き刺さる。

居心地の悪い視線に晒され、所在なさげな笑みを作った。

可愛い娘の部下でもいたら、憤慨の一つでもしていたのだろうか、この無職相手に、真剣にやりあうほうが馬鹿なのだ。

どれだけ熟練の力をもつても暖簾に腕押しと言う感覚を久しぶりに味わう彼は、もしかして結構やばい山なのかもしれないと本能的に感じていた。

はつきり言おう、あまりに気にしないほうがいいと思われる。

やばい事は多分やばいのだが、気にするだけ無駄。こいつに関しては気にしている事が論外なのだ。

「カソウさんよ、残念だがこればかりは、そらしちゃいけないだろう。教皇が意識不明の重体、そしてあんたが消えてからの管理局のトップの失態が結構なレベルで管理局を揺るがしている。

少しばかりおかしいだろうあんた、これに関連性を持たせないと

言う方が不思議だ」

「で、だから、全部証拠を用意しろといっているだろう。情報漏洩罪に殺人未遂、どちらも証拠が無い。困った事にナカジマ三佐、それはただの脅迫に過ぎないだろう」

何処までも慇懃無礼に会話を通す。

「だが今回の出来事は少しばかり危ないし、他の捜査部隊なら証拠をでっち上げかねない」

「おやそれは恐ろしい、可愛いそうな一般人を管理局と言う組織はいたぶると」

こいつが真犯人です、何度も言いますがこいつが真犯人です。

「食えない奴だよ。流石あの英雄だけのことはある」

「よく煮たら毒薬、焼いたら毒ガスと言われています」

「まさに事実だ、だが今回の罪状は間違い無くあんと、どこの部隊も見ている。でっち上げる場所もあるだろう。それであんたは逃げ出すのか」

首を傾げる無職、普段全く感じないシリアスの空気に、少し動揺した様子だ。

「何でだろうね、全くなんでだろうね、証拠はどこにも無いんだからどうしようもない。ナカジマ三佐、証拠はひとつたりとも無いんだ。下らない捜査をしている暇があるなら、きちんとした仕事をしていて欲しいのだが、それが管理局の元准将としてのお願いだよ」

そこで取調べは問答無用に打ち切られた。

部屋から出て行く無職にゲンヤは、困ったようなあいまいな表情

を作り溜息を吐く。

「犯人だったらとんでもない人物で、犯人じゃなかったらよほど懐の広い人物と言うことになるぞあの人は」

ある意味とんでもないが、過大評価しすぎである。

ゲンヤはばさりと今まで起きた事件を見て、間違い無く犯人であるあたりはついていてる。だが証拠が無い、何一つ証拠が無いのだ。

そしてあの態度だ、証拠があるならいつでも捕まっつてやると言うあの態度。管理局を挑発しているようにも見える。

だがそんな事よりも彼がしでかした事だ、今教会と管理局は右往左往の大騒ぎである。教会や管理局の上層部の隠れた犯罪などの情報が全てばらされたのだ。

これにより管理局は、一時まともに機能しないんじゃないかと言うほどの騒ぎを見せているのだ、今もなおその被害は拡大している状況である。

無職の心の叫びなら、あれ俺何か悪い事した程度の話なのだが、ことがことなのでそうも言っていられない。

簡単に言えば管理局は、弱体化しているのだ。

元々人材不足の管理局は、さらに歩みを緩くせざるえない状況になっている。

これにより反管理局組織が、活発に動き始める事になり、一層の行動の緩慢さを導いてしまっているのだ。

この原因の全てがカソウⅡモヤソウの所為で、あるのだから笑えない話である。

「やれやれ、でっち上げが始まるならあんたらで正せばいいだけだろ」と思っただけだね」

最後に捨て台詞のように、ゲンヤに告げた言葉は、彼にひとつの衝撃を与える。

「つまり俺が捕まえるべきは、でっちあげをする仲間の方だと」

訳の分からん感銘を彼は受ける。

確かにそうだ、彼の言う通り裁くべきは無実の男ではなく。無実の男を犯人としようとする管理局だ。

ゲンヤの正義の心が意味も無く燃え上がった。

「なるほど、子供に最近力を入れすぎていたと言う事が。さすが英雄だ、言う事に道理が通っている」

今仲間の不正を正すため、公安でも無い部署の男が動き出す。それこそが陸士108部隊長 ゲンヤ「ナカジマ」である。

おい何をやっているんだ無職。やりたい放題過ぎるだろう無職。

また一人、真面目な人があんたに毒されてきただろうが無職。

実は今保管課で反乱がおきています。真面目な上司は部下によって血祭りに上げられているところです。

いま質量保管課は彼らに勝る戦力を求めています。お願いです。それが助けてくださいお願いします！！

十三章

無職 異端審問とテロリスト

無職が教会の人間につかまったところの話。

魔法でバインドされた拳句、物理的に縛られてカリムの前に、差し出された可哀想な無職。

しかしながらカリムの怒りは烈火のごとく、飼い犬の忠誠は犬の如く、なんとも困った二人が彼の前の前に君臨していた。

「なんだ行動は訴えるぞ、絶対俺が勝つに決まっている。ゲロと犬め、よくも俺に対してこんな事をしてくれたな」

こいつにしては結構ドスの効いた目をしているが、二人はどこ吹く風、と言うより彼よりも烈火を明らかとしていた。

「それは失礼しました、けれどあなたにはそれだけの事をされる事実があります」

「ないね、脳みそに薬物でも注入して、未来を予言するとかふざけた事をほざいているくせに、大体一般人にこんな事をする教会の人間の事なんか信用できるか」

結構正論であるが冒頭の言葉が不味かった。どこから取り出したトンファーがカートリッジを弾いてとんでもない事になっている。

「くそ、飼い犬の前だからと強気に出やがって、この誘拐魔めだから教会のやつらは気にいらねえ。宗教と政治を分離させない、この状況が嫌いだね、何しろ管理外世界には政教分離をうっている国が

あるというのに次元世界の惨めなところだ」

結構な暴言だ、よりもよって教会の将来教会のトップに行くような人間の前で言うようなせりふじゃない。

そして何よりその原因を作った男が言う台詞でもない。

やれやれと見下すように二人を見る。宗教人は宗教の事だけ考えて、政治に介入するなと言う侮蔑が含まれていた。

「政治になんて教会は介入していません」

「信用できないが、だったら管理局に介入するなつての、誰がどう見ても聖王教会の政治への介入としか誰も見ない事ぐらい猿でもわかる」

さらにもう一発カートリッジがロードされる。

折角の室内と言う条件さえ、逃げ場の無い闘技場の様に感じてしまふあたり、もうろくでもないにも程がある。

けど糞虫のように縛られた無職が、一体何を出来るかといつてもたいした事はできないだろう。

「あなたの元部下です、どういう教育をしたら課をのつとるなんて事が起きるんですか」

「俺には関係ないです。だってもうゲロ女もあの馬鹿ソートップも俺の部下でも上司じゃもうないですし」

「あなた以外にあのテロリストを止められる訳が無いでしょうが、生まれてはじめて見ましたよ。ニアSランクの部隊が壊滅されるような光景を」

なにやったんだ、あの部下達。

そんな事を考えて首を傾げてみるが、いまやも元部下が、彼の言うことを聞くわけが無い。

真面目な課長が、サボりまくる彼らにどうせ文句でも言ったのが運のつき、Sランクの魔導師であったとしても味方から不意打ちされるなんていつも想定しているわけが無い。

しかも増員された部隊の面々には、薬を飲ませて行動不能に陥れる。

そして鎮圧の為に、仲間を人質に取ったかく乱戦法で、Sランクレベルの人間を次々に倒していき逆に殲滅してしまったと言う。

上層部レベルでは予想外の大事なのだが、資料整理課の人間に教導隊さえ負けた今の状況の方が、他の部署の人間には別の意味での重大な衝撃だった。

「だってあいつら負ける戦いしないし。勝てると踏んだからやっただけだろう」

「だから止めてくださいと頼んでるんです。一般人であつてもあなたは英雄でしょうが」

「いや俺は無職の一般人ですけど」

三発目、そろそろ部屋が明らかに熱くなってきた。

魔力で部屋の一部が恐ろしく歪んで見えるが、二人してそのことに気付かない。と言うよりそんなことを気にしている暇はもう無い。

「大体なこう言う話は、そこにいる物騒な女をさっさとどけて放すものだぞ。あの課は教会にとつても管理局にとつても極秘機密だ。犬に与えるえさとしては極上すぎるだろう今回の件は」

「餌って酷いですよ、シャツハは私の優秀な護衛です。今回の事を

聞く権利ぐらいあります」

「ない、断じて無いね。今回の話は管理局における最重要機密だぞ、たかが戦鬪馬鹿に教えるような内容じゃこればかりは断じてないね」

ここで限界が来た、無駄に戦鬪能力が高い彼女は、彼の発言にいい加減耐えられなくなった。

「あなたいい加減にしてください」

そういつてカソウの目の前のデバイスを向ける、今まで溜めたまり力の所為で凄まじい突風を放つが、彼がごろごろと壁に転がる程度のものだった。

「いやいい加減にしないしさつさと出る、これは一般人であつても情報漏洩が行なわれれば管理局と教会両方共倒れになる可能性だつてある話だ。たかが一回の教会騎士に教えてやれるようなものでは断じてない。猿でも分かるだろうそれぐらい、理解したならさつさと尾を丸めて退室しろ」

「言葉を選びなさいといつています。仮にも騎士カリムは、あなたの上司であつた人です、それにそんな無礼な物言いを初対面の人にしていい訳が無いでしょうが」

「初対面の人間をそのどぎついトンファーで殴りつけて、バインドかけた拳句、ロープで縛りつけた女の言う台詞だとは思えませんね。さすが教会の飼い犬だ、無礼千万この上ない」

言っていることは結構真面目のだが、ロープで糞虫のようになつてしまった彼の発言は、マジで喧嘩を売っているようにしか見えないというところだろう。

最もその原因はあちら側なので、その程度で腹をたてれば彼だつて逆切れしてもおかしくない。

と言うより既に彼は、苛立っている何しろいきなり通り魔が殴つて縛って縛り付けたのだ。これで腹を立てない人間がないはずが無い。

「そ、それは、すいません。ですが、言っているいいことと悪いことが「まずやって良い事と悪いこととの区別をつける様になってから言え」

二の句を告げさせないのは、カソウの土下座の英雄たる由縁である。相手に喋らせず強引に自分の目的だけを遂行させる手段だ。

最もここまで暴言を吐いているのに、謙譲語レベル敬語だと思っているこいつは最低だと思われる。

「シャツハもうその辺でやめておいて、この人に対して言葉で勝とうとしたら一生後悔するわ。それに言っている事は間違つて無いから、部屋から出てお願い」

いくら暴力シスターでもカリムのお願いは、断れないのだろう。凄まじく苦渋に満ちた顔をしてはいと頷いた。唇から強く噛んだためだろっ血が滲んでいた。

「ざまーみるこの飼犬め、尾を丸めてさっさと消えろ」

彼女が退室する時、彼を蹴り飛ばして出ていった事を、咎める者は誰一人いなかった事を追記させていただこう。

「でだ、俺に何をさせたいんだ。機動六課なんて馬鹿な部隊を作つたアホ女、ジャンキーの妄言に付き合うような暇は無いんだが」

「そんな事は関係ありません、どちらにしろあの調子であれば、保管課が外に露呈した拳句、管理局に教会共倒れなんてこともありえ

ない話じゃなくなるんですよ」

「いや滅びればいいと思うよ、ほら一度滅んだ方が管理局の意義も見出せるっつもんだろう」

そう言ったら世界は、てんやわんやの大地獄だ。それなりに理由があつて、今管理局は次元世界の法をつかさどる場所に、なっていることぐらい猿の証明でも気付く。

「駄目に決まっているでしょう、今管理局が折れたらあらゆるレベルでの根幹が破壊されます」

「いや人間って以外と根性がある奴ばかりだつて」

ぶちりとカソウの無責任な発言に、カリムが切れた。

バンと机を叩きその音が、部屋中に響き渡る。何気に鍛えられているのか高そうな机にびしりと無残な音が響いた。

「あなたの意見は聞いていない、今から私のいう言葉をキチンと行かないさいと言っているのです。今回ばかりはあなたの言葉を聞いている時間は無い、あの馬鹿二人をどうにかしなさい！！」

何度も言うが基本この男はビビリだ。烈火のごとく吼える彼女に体を震わせて怯える。

「けどさー、俺って無職の一般人だしー」

しどろもどろになりながら視線を泳がせる男。英雄である男。

「そこまで言うならあなたは今から一つの組織の頂点に立ってもらいます。名前は独立組織アンチデーゼでどうです、基本的に管理局とトラブルの請負所、完璧ですね」

「あ、あのですね、騎士カリム。どういう発想の元に行なわれたものか知りませんが、つまり私にまたやりたい放題させていただくと言うことでしょうか？」

「構いません取り敢えず今回の仕事を請けてもらうにはこれぐらいの事をしないといけない程に状況逼迫しています。と言つかもう作りました、教会からの支援金も用意しています」

無職改め組織のトップ、首領とでも彼はクラスチェンジをした。輝く顔は無職であった自分の体面を、どうにか保つことの出来た喜びであろう。

即効での土下座、素晴らしい流れ作業にカリムは愕然とする。

「喜んで拝命させていただきます」

しかし冷静になったカリムはふと思う。この人に組織を預けたら何をしてくすか分からないと、だがもう遅いカソウを動かす方法が浮ばなかった彼女は、これしかないと信じてこんな暴挙に打って出た。

他にも彼を知っている人間からの支援もあつたので、すんなりと通ったあたり彼の英雄としての知名度は相当なものだったと言う事を再確認させられたのだ。

「では最初の依頼です、あの馬鹿二人をとめてきてください。本当に無駄に優秀な人材ばかり用意している、保管課にもう私はついていけないんです」

「あいあいさー、おやびんキッチンと処分してくるので、ゆっくり待っていてくださいえ」

陸軍指揮の敬礼を行なった後、シャツ八すら愕然とするようなス

ピードで、彼は自分の元いた部署に走り出す。

これが更なる混沌を導くことになるとは、結構誰でも気がついていたような気がしないでもない。

けれどよかったね無職から解脱だよ首領、けどいくらなんでもいきなり組織の長なんておかしくないかな首領。なんにしる管理局や教會的にも首輪を着けていられるのでその辺りから組織の長にされただんたと思うよ首領。

本格的にやばいです。あの二人がとうとう保管課を占拠しました、これでサボれると言わんばかりの態度を示しています。

だが後悔するといいいのです、今彼らの元上司であり英雄とまで呼ばれた男がそこに光臨するのですから。

さあ復活の質量兵器保管課です。つねに新たな力を募集しております。

十四章

独立組織 過去と未来

カソウが部下との戦いに赴き時の話。

「なんて悲惨な光景だ」

そこには目も覆うような光景が広がっていた。人質であった者たちが全裸でつるされているのだ、困ったことに女性の一人や二人いたならまだマシだったかも知れないが、そんな事はなかったです。

野郎の全裸なんて見ることも自体お断りの彼からしてみれば、いきなりの精神攻撃に心は大ダメージでした。

「あの馬鹿のツイートップめ、よくも俺にこんな無残なものを見せやがって」

いきなりですが殺意のゲージが振り切れたのか、いきなりガジェットで彼らつるされている人達に、攻撃命令を発令しやがりました。

確か非殺傷設定はついていなかったはずのガジェットですが、改造する暇でもあったのか、全裸の彼らは悲鳴を上げるだけで許されませんでした。

どちらにしる非道極まりないのは変わりません。

「醜いものぶら提げやがって死ねばいいんだ。こついうやつらは、と言うよりお前らいくらなんでもその露出癖どうにかした方がいいぞ」

と言うより彼は勘違いしていた。

これが趣味だと思っていたらしい。否定したいが、先ほどの攻撃でそんな事をしている余裕はなくなっていた。

ただ軽蔑の眼差しで彼らを見ている。否定したくても出来ない彼らの悲哀は想像したくないほどの悲劇だろう。

そんな彼らから視線を外せば昔懐かしい彼の元城だ。

今はガジェットなど存在していないが、その代わりに死屍累々といった感じで、ぶっ倒れている彼の後任や増員された人材。

しかしそこは悲劇だった。犯罪者用の拘束具で縛られ、彼の部下に指を刺され爆笑される彼らの姿。

「まったく、たいちよーでもなしに俺らに命令している事、自体頭が腐ってるんだよ」

想いつきり腹を蹴り飛ばされる、彼の後任名前は特に決めていない。結構そのまま胃の中身を撒き散らすあたり、彼らは相当無慈悲でした。

「そうですね、大体真面目に仕事しろとか言いますけどね。勝手にあなたのルールをこの課に持つてくるのは少しばかり脳が腐っていませんか。そうだ今から食事の代わりに下剤でも飲みますか、この外で待機している境界の人達に脱糞シーンでも見てもらいましょう」

「そうですね、この生意気な馬鹿にはそれぐらいの事し無いと理解できないですからねー」

「やめてくれ、それだけは、頼むから許してくれ。サーリット様、ノルマンディ様、お願いですか……あ」

今ここは阿鼻叫喚の地獄だった。
自分の部下だった奴らが野放しにされた瞬間、これほどの暴走をするとは正直、彼だって想像してなかった。実はリミッターになっていた事自体驚きである。

彼は脱兎の如く逃げ出した。

「ってなにやってるんですかカソウさん」

「だってあそこマジでやばいですって、悪魔しかいませんでしたよ」

「その王様だったあなたが言わないで下さい！！」

逃げ出したとたんカリムに怒られるカソウ。だが実際係わり合いになりたい類の事件ではなかった。

ちなみに彼が逃げ出して五分後予告は行われたとだけいっておく。

「無残な出来事がまた一つ起きましたよ。どうするんですかカソウさん」

「だから無茶でしょうがあゝの悪魔たち、俺を上司なんて思っただけです。今あいつらの方に向かったら間違い無く俺もあの地獄に加担するでしょうが」

ぎゃんぎゃんと喚いていたカリムはその一言で止まってしまった。

「あのカソウさん、今聴き間違いじゃないと思うんですが加担するとか言いませんでした」

「だってそうでしょうが、自分は痛い思いをしたくない、なら痛くない側につけばいいんですよ。これが簡単なイジメの論理って奴です」

「なら止める側についてくださいよ。あの人達の思考はテロリスト

と変わらないんですよ」

それは彼自身が一番よく知っている。

何しろ真面目だった教導隊のサーリットを保管課に染めたのは彼自身だ。

「知ってます、誰がそう言う教育をしたと思っっているんですか」

「知りたくないですよそんないやな事実」

「理解しているなら、今更そんなくだらない事で時間を使わないで下さい、馬鹿ですかあんたは」

「あー、また馬鹿って言いましたね。私は馬鹿じゃないです」

いま目の前で憤慨している彼女を薄目で見てもそれは明快だった。三十過ぎだと言うのに、動作一つ一つがどうしても幼く見えて准将はとても吐き気がした。

そこは可愛らしいと思うべきだろうが、彼の好みの問題である。

「いや完璧な馬鹿だろう。理解していないとは流石ゲロ女」

「それも言わないで下さい、良く考えたら乙女にゲロ女ってなんですか訴えますよ。いい加減に」

「それは困る勘弁してください、今度からジャンキーって言いますから勘弁してください」

どちらにしる無礼すぎる発言だった。

かわりが無い気もして彼女は、どうしようもない感情をうちに押しさえて泣きそうになる。

「そして彼女は気付く。まさかこれが快樂なの、もしか私ってMなのかもと」

「そんなわけ無いでしょうが！！ 本当に今泣きますよ、女の涙は

核兵器ですよ」

そんなに物騒なんて聞いたことが無い気もする。

「勝手に泣け、豚の様にぶぎーぶぎーと泣いてくれると俺の好感度が十ぐらい上がる。お前の好感度は二十三ぐらいだ三十三になるぞ」
「お断りです、と言うかいい加減にしてください。あの人たちを止めないと色々とんでもない事になるんですから」
「あー了解了解、分かったよ。さつさと終わらせよう」

彼は通信機のようなものを取り出した。これは彼が自分で改造した詰め所への通信機である。元部下達と酒でも一緒に飲む時の為の連絡用だった。

だがカリムや他の誰にも彼のしでかすことは分からない。

「じゃああつちと通信を取るその間、どいつにも傍受されないようにしておいてくれ」

「はい、それぐらいなら容易いものです」

そう言うと一人防音結界を作り、その中に引きこもってしまった。彼のそんな態度を見て少しばかり、自分じゃかなわない英雄の部分でも見た気になったカリムは、無力な自身の力にすこし悲しくなる。

『久しぶりだな馬鹿共』

『おやおひさしぶりっすねたいちよー』

『気楽な言葉出返してくれて全くありがとつだよ。馬鹿が、取り敢えずさつさと出て来い』

彼の言葉に反応する様に二人は笑う。

『流石ですね准将、あなたの言葉なら仕方なく従いますが、一応私達を脅すための言葉を聞いておきますよ』

『用意してある質量兵器をぶっ放すと言うつもりだったんだが、あほなことしやがって』

『そりゃ准将なら間違い無く嘘にならない。まあこつちもいい加減働きたくなくなりまして、留置所なら気楽に過ごせるでしょう』

そこまで理解してやるのかサボりの精神は、これから彼らは重罪人として裁判を受けて一つの場所に拘禁され続けることになる。構成プログラムなどもあるが、全て拒否するつもりだろう。

『ならあと一回ぐらい遊んだら出て来い。留置所も気が向いたら出てくればいいか友達でもつれてな。それが嫌なら玩具を作る道具でもいいぞ』

『無茶言わないで下さいよ』

そこで通信は切れた、そのあと六度の悲鳴の後両手を上げて彼らは出てくるのだが、彼らの手に拘束具をかけるまで彼らの余裕の文字が現れることは一度としてなかった。どれだけビビっているのか理解出来ない。

この後、独立組織の長となった彼は保管課の管理を任されることになる。それに伴い管理局は特別職として彼に准将を与えることになる。

彼らの部下は、弁護人を准将に任せるといいししばらく彼はそれを受ける事になる。

取り敢えずなぜか復職した彼だが、部下をつけられることはなかった。またあの二人に精神を痛めつけられた面々はその日のうちに

管理局を辞めることになる。

実はこのため准将が、請け負わなくてはいけない状況に追い込まれたのだ。管理局としてもこれ以上の情報開示は避けるべきであり、その秘密を知っていて、まだ有能だと言い切れる男は、こいつしか居なかったのだ。何と言う元鞘であろうか。

とうとう復活だよ准将。実は准将と言わすためだけの後付設定なんだ准将。けどそれっぽい理由はできたと思うんだ准将。これにより彼をクビにした中将は怒りのあまり泡を吐いて倒れたんだ准将。

とうとう人員が一人になりました。上司は美人さん、それ以外のとりえは最早無い。

ここは管理局の坩堝、そして一つの組織が生きていくための巢窟。

質量兵器保管課です。

いつでも若い力を募集しています、今は請負の組織がやっていますが、それでも本当に真面目な人を募集しています。

十五章

カリムに結局訴えられて、自分で無罪を勝ち取ったところの准将の話。

一人寂しく職場にいることを嫌った准将は、折角戻ってきたので恩師に挨拶しに向かった。

いつもの事だが司書の慌しい声が響いている。

「ユーノ先生お久しぶりです」

「ああ久しぶりだね、なんか首になったり民間組織のトップになったり忙しいらしいね」

「いえ、別にやってる事は、管理局にいるときと変わってないですから。何にもしてないですよ、僕にはガジェットと言う優秀な部下がいますから」

そう言う問題では普通はない。

だが変わり果てたとは言え彼の生徒だ、准将は当然の話だがユーノよりも年齢的には低い、それを補って余りある恩が准将にはあった。

まだ学生だったころの話になるが、魔力値からして戦闘魔導師になるべく生まれたような性能をしていた准将であるが、昔は暴力や争いごとが嫌いだっただけ、研究者になろうと思っていたのだが、彼は頭が相当悪かったのだ。

当時と今とではベクトルが、違うにしる学力的にはかなり残念だったのだ。

その頃、考古学に対して力を入れ始め、講義に来ていたユーノに必死に頼み込んで、勉強を教えてもらったのだ。

それ以来彼はユーノの事を先生と呼んでいるのだが、実際彼の変貌振りを見て一番驚いた人物だっただろう。しつこいようだが彼は、昔は本当に素直な子で、真面目に勉強をし続けた結果管理局から誘われたのだ。

今は見る影もないが、人に歴史ありと言うことだろう。

「で、あの糞餓鬼どこですか、今度こそやつに情報処理魔術師としての実力を見せてやりたいんですよ。この前は書庫の検索で負けましたからね」

「学校だよ、君みたいな暇人じゃないんだよヴィヴィオは」

「そうですね、あの馬鹿俺との勝負から逃げようって言うことですね」

そんなこと一言も言っていない。

「いやだから学校だって、まだ一桁の年齢の子だよ常識を考えようよ」

「けどいつも先生は常識は覆す為にあると教えてくれたじゃないですか!!」

「一般常識を覆せ、なんて一言も言っていないよね」

首を傾げるだけ傾げてみせる生徒、人生経験的なものでユーノの発言を流して見せるが、

「で、学校どこですか。今から常識を破壊してきます」

そんなことこいつに頼むだけ馬鹿な話であった。

期待と言う言葉だけはキチンと打ち砕いてくれるのだ。

彼はユーノに軽く魔法で捕縛される。

「先生これは一体、放してくださいよ。こついった趣味はちよつと先生でも受け付けませんよ」

「違う、というよりさ常識的に僕が正しいよね。と言うか、一般常識を破壊するなといっているのが分からないのかな」

「元武装局員に常識を問わないで欲しい。常識なんて捨てたほうがいいに決まっている、そもそも戦いで生きていける人間は人間じゃないんだ」

本当にああいえばこつという男である。

「そんな事言つてたら僕の友人全員駄目人間なんだけど」

「じゃあそう言うことでしょう。そもそも人間にSランクなんて力持たせるなんて、全地形対応の高機動型の戦略兵器が歩いているのと、変わりはしませんからね。あれならアルカンシエルなんて言う質量兵器真つ青な兵器の方がマシですよ。まだきちんと管理されるぶんね」

あけすけな生徒の発言に、ユーノ自信納得できる内容があつた。

正直に言えば日常生活におけるSランクの以上魔法は不要に近い。そんな管理もされていない感情しだいで動いてしまう人間と言うガソリタンクに管理を施していないことは少しばかり疑問が浮ぶのは仕方ないことなのだろう。

「最も俺には一切関係ないですがね。それはそうとあの餓鬼にあつてきますよ。折角面白い本を見つけたのにいやがりやしねー。そして今の教育のあり方を問う為に、一度学級崩壊起こしてみます」

「だから君はなぜ教育を破滅させるのか聞きたいよ」
「いいですか、歳をとってからじゃあ遊べないんです。調べてみたところあの糞餓鬼は、成績も優秀で友人関係も良好とここまで順風満帆な奴が私はとても憎い」

取り敢えず会話が繋がっていない。

さすがのユーノも彼のぶっ飛んだ発言に、どう対応していいのかわからない。

「会話する気ないね君は」

「勉強が俺と違って出来てたんですよ、その上、友人関係も良好なんて俺に喧嘩を売っているとしたか思えません。だから俺も構ってもらいたいです」

「だからさ、少しは僕と会話しようよ。と言うか君とヴィヴィオをあわせると、何かろくでもない事しかしそうだから、出来るだけあわせないでくれと、なのはヤカリムに言われてるんだよ」

やれやれと彼は首を振る。

「十歳も近くなったくせにその程度の判断も出来ない子供を作るとは、奥方はどうやら親としては相当無能なようで、少しばかり甘やかしすぎじゃないですか」

「まさか君に教育の事で結構まともなことをいわれるのは初めてな気がするけど、誰にも君には言われたくないと思っっていると思うよ」
「内容自体には否定しない辺り、可愛がっていると言うことですか。あんまり餓鬼に構いすぎると、あの人も晩婚気味になると言うのに、先生もご苦労様です」

准将の言葉は結構彼の深いところに突き刺さる。実際まだ付き合い合っているわけでもないというのに、いつの間にかなのは子供まで

出来たのだ。

「それは言わないでよ。けど学校は集団生活を営む上で大切な場所だからさ、友達を作ったりとか」

「苛められたりとかですな」

「そこは違う、相変わらざるくでもない合の手を入れてくるね。そこだけは昔から変わってない」

いまだに縛られた准将を見ながら溜息を吐く。

多分解除すると同時に全速力でヴィヴィオのところに向かうのは、目に見えていた。

「そんな事を言っていて時間稼ぎをするのはいいですけど。どうせあの糞餓鬼はここに来るんでしょう」

「ヴィヴィオは司書の資格も持っているし読書が好きだからね」

「と言うかもう来てますけどね。先生って時々馬鹿ですよな」

不思議そうに彼らを見るヴィヴィオの姿がそこにいた。

誰にでも好かれそうな可愛らしさを見て、准将はイラつく。誰にもは、もう省いたほうがいいかもしれない。

首を傾げたまま、准将を見る彼女は忘れかけていた変な人を、思い出し取り敢えず頭を下げてみた。

「いや、やめて先生、私にはそんな趣味はありません。ああ……、でも気持ちいいかも。先生ヴィヴィオさんが見ていますよ、なのはさんにばれたらどうするんですか」

「いやいやいや、爆弾発言のレベルじゃないよねそれ。分かった解除するからそれ以上はやめてよ」

拘束を解かれると、また訳の分からんポーズを決める。カッコイ

イでも思っているのだろうか、思っているのかもしれない。

「久しぶりだな糞餓鬼、以前のリターンマッチだ。実力の差を見せてやるぜ」

「ゆーのくん、そんな事していいの」

「いいよ、どうせ彼は司書の資格も持っているし。元々ここ出身だしね」

「そう言うことだ糞餓鬼、リベンジマッチといこうじゃないか」

ふっふっふと笑いながら鬼の首でもとったような態度をする。

こいつの性格はもう理解しているのだろう。と言うより母親の影響が強いのかこういったことは元々すきなのだろう。

「うんいいよ。けど私が勝ったら名前で呼んでね」

可愛らしい笑み、准将にとっては喧嘩を売られてると同レベル。

「いいだろう餓鬼め、これに勝ったらお前のことを名前で読んでやる。私のやさしさだ受け取るがいい」

「りょーかいしました」

「と言うか君達は何でそう相性がいいんだい。阿吽の呼吸で馬鹿をやってる気がするよ」

二人が互いの視線を交差させ火花を散し戦意を高めている時。突如として無限書庫扉が激しく開かれた。

そこに走ってきたのだろう、息を荒らしくしたカリムの姿がある。

その目は仕事をサボっていた事にあわてるようなものではなく。何かもつと切羽詰った状況になったことを示唆するものだった。

「カソウ名誉准将、スカリエツティと共にあの二人が脱獄しました」
「機動六課でも作ったらしいじゃないですか、頑張ってください。
応援していますよ、ファイト!!!」

えーそりゃ無いよ准将、カリムさん泣いてるじゃん准将、聖王様
は今からの勝負事に息を荒くしてますがね准将。

人材のいない部署質量兵器保管課、改め独立組織のものです。人
員不足がやばいのでお願いですから誰か着てください。

今管理局は様々な事件でどうしても弱体化しておりますが、どう
かお願いします明るい職場であるのは間違いないです。独立組織へ
の就職お待ちしております。

十六章

ようやく第二次J S事件が起こっていた頃の話。

予想外に准将の暴走の所為で、管理局自体が大ダメージを追っていた為、スカリエツティの行動は、管理局には地獄であったようだ。カリムからの要請も仕事が忙しいと打ち切っている准将は、特に何もしていない。

かつての部下とかスカリエツティ的なものが、大暴れしているのだが、彼からすれば知った事じゃないのだろう。

「そついえば最近、また機動六課が復活したとか」

「貴方が私の要請を全て断るから仕方ないでしょうが」

「何を言っているんだ、スカリエツティは保管課の事を知っているんだぞ、ここを守らずどこを守るといふのだ」

言い訳だけは超一流である彼に、詭弁を語らせる隙を与える事自体、彼女の敗北だろう。

もつこのやり取りも数回にわたる。

「あの人たちは確かに優秀ですけど、今回はまた貴方の部下の所為ですよ」

「いや違つたろう、あいつらを捕らえていた、奴らが無能だったからだ。大体前の時にキチンと俺は捕まえてやっただろうが、あとはそつちで頑張ってください。俺の組織はトップ一人と言つあまりにも弱小組織であるためこう言う大事件はお手伝いできません」

実際彼の言っている事は当たり前前の話である。

だがこの目の前の金髪は、彼を英雄と言う色眼鏡でまだ見ていたりするのだ。

あと訴えられた女の言葉を聴くほど彼は、人間も出来ていない。それと忘れていたが、第二回聖王VS英雄の戦いは、英雄の勝ちでした。凄まじく大人気ない行動ばかりしていたので、聖王様はリベンジマッチの為に、更なる努力をしているようです。

彼女の真摯な願いを聞いても、残念ながら彼は手伝う気が一切ないので、全て聞き流しながら書類に目を通してている。

「大体俺はそんな面倒ごとの為に、あんたを呼んだんじゃないんだよ。俺の組織三人ほど部下を入れたから保管課の警護に当たらせるって話だ」

「それはもう聞いてますし、どうやら地上本部のそうそうたる面子からの推薦ですから私としても否定する事はありません」

結構な量の書類の中から上の人事関係の書類に目を通す。だが途中で彼女は間違い無く固まった。ある項目で彼女の思考を停止させるような代物があったからだ。

宝石振八、ノルマンディ上陸作戦、サーリットと言う訳の分からん名前が並んでいる。

流石にカリムは固まった。特に真ん中、取り敢えず真ん中。

「名前ですらありませんよこれ」

「ミッドチルダにも頭のおかしい親がいるという事ですかね。けど将官クラスの推薦もあるんだから特に問題ないと思いますよが」

名前のインパクトが強すぎて、カリムは手が震えていた。

「この宝石と言う人、私の知り合いと同じ世界の出身者かしら」

「そうかもしれないよ、管理外世界アルハーザードとか言うところからきてるらしいですね」

「けど振り仮名が書いてないから名前がよく分からないわ」

ほうせきふりはちさん、たからいしふりはちさんと、ぶつぶつ呟いていた。

カリムが悩んでいるのを見て准将は見てやれやれといった様子で助言をする。

「ああ、そいつはジュエル」スカリエイトらしいですよ」

「どんな無茶振りですか、しかしスカリエティと殆ど変わらない名前なんて可哀想な限りです」

「そうですね、あいつなんてすぐ捕まるでしょ」

書類にさらっと目を通して、頷く色々と突っ込みどころはあるが、人の名前などで差別をしてはいけけないと思ったのだろう。保管課勤務の許可を出す。

「許可します、情報漏洩などにはキチンと気をつけてくださいね」

「あいあいさー」

「そういえばまた新しい形のガジェットが入ってきてますね。しかも管理局を攻撃したのと同じ型機体ですよ。もう、奪ってきたんですか」

何を当たり前のことをといわんばかりに頷く。

正直既に保管課は過剰戦力を抱えている。しかし彼女が彼を別組織とした所為で、彼女からの介入は許されないし。保管課保護戦力としては間違い無く多いほうがいいため何も文句が言えないのだ。

とくに今は時勢が時勢だ。この難局を過ぎたら減らせばいい。

対応できる戦力を持つ事は間違った事じゃない。管理局も今は人員不足が、さらに酷くなっている時期だ。特に司令官クラスの人間の、教会も指導者が今はまだいない状況。

何もかも上手く回っていないのだ。ここぐらい戦力を整えていてもハズレでは無いと、彼女は思ったのだろう。

「本当は貴方が指揮でもとってくれば、話は別だったんですがね」「いや俺って、そう言う才能困った事じゃないんです。魔力がある頃なら前線にも出張れましたが、いまはデバイスも酔った時に無くしましたしね、ストレージデバイスならにいい奴でしたよ」

「はあ、もういいですよ。貴方に頼んだ私が馬鹿でした」

准将に渡された書類を持って彼女は保管課からでていく。

また説得に失敗したと溜息を吐いて、泣きそうになる。実際カソウ個人の戦力だけで十分に機動六課の面子に入れる事だって問題ないはずなのだ。

しかしリミッターの所為か毎年のように魔力が下がっていき、現状でカソウの魔導師としてのランクは実はBランクにまで落ちていた。AAから凄い衰退振りである。

カリムはそんな事を思いながら、教会へと戻る。その時ついでに見た予言で、またとんでもない事実が、浮ぶのだがまたそれは別の話。

彼女が帰ってくるのを見計らって部下である二人が話しかける。

「たいちよー、ガジエットの量産体制を確保しました」

「あとスカリエッツィはそろそろ返しますよ。量産技術は手に入れましたから」

「おう、それでいい。あんな使いやすい男は、こうやって道具のように使えばいいのに、脳みそは馬鹿すぎる」

実際この三日後第二次J.S事件はスカリエッツィの逮捕により収束する。あと二人の首謀者は見つかる事がなかった。それと同じくして、宝石振八が彼の組織から脱退するのだが、まあそれは別の話だ。

「あの野郎技術提供しないからこういう目にあうんだよ」

「本当に馬鹿ですよ。准将がガジェットなんて都合のいい道具をあきらめるわけ無いのに」

いやまで、までよ、本当に君達テロリストみたいだよ。

しかも地上本部を壊滅に近いダメージを与えた、化け物だと言うのに。全く彼は容赦なく道具扱いしましたし。

流石英雄のなのか、本当にそれでいいのか！！

「しかし本当に管理局がやばいぐらいにダメージ負いましたけどこれからどうなるんでしょうか」

「しらん、俺には関係ない。そのために無職にまでなってやったんだよ。これで脅した結果、資金が確保できて、安価でガジェットなどが量産できる」

こいつ一体なに考えてんだといわんばかりの暴走だ。

これじゃあ本当にテロ組織と変わらない。

「これで俺達は、本気でサボれるようになった。後は仕上げだけだ」

「了解しましたたいちよー」

「ようやくゆつくり出来るんですよねこれで」

いや待て准将、冷静に考えて君らただの犯罪組織だぞ准将。君は一体何を考えている准将。もう少しで終りなんだ超展開なんてお断りだよ、分かっているのか准将。

さあ、もう殆ど言う事もなくなってしまいました。

だからお願いです質量兵器保管課あらため独立組織統合本部へ就職の方はご連絡を。

十七章

そりゃいい加減准将の悪行がばれる頃の話。

スカリエツティが彼によって再逮捕されたが、一つの問題が起きた。彼の話した内容だ。脱走の際、カソウ准将が手引きしたと、冷静に考えれば言われても仕方のないことだ。

今まで、そう言った事になら無いだけ不思議だったのだ。

それを聞いた管理局はすぐさま軍を派遣。

かなりの数の武装局員が彼を取り押さえている。そしてその指揮官こそアナウメ中将だった。ようやく彼を捕まえる事ができて、満足そうな笑みを溢している。

ちなみに彼の居場所を通報したのは、彼らの上司であるカリムである。

「くそ、金髪のゲロ女だと思って甘く見すぎた」

「いや准将、君はそれのどこに甘く見る要素があるんだ」

「たしかに酸っぱく見ることは出来るかもしれないが」

今更カリムを弄って、何の意味があるのか理解が出来ない。

相当レベル魔力の落ちた彼に、同ランクの魔導師がいても勝てる気など彼はしない。

簡単に組み伏せられた彼は、すぐにバインドをかけられ動けなくなる。縛られた息苦しさからか、やけに深い息を准将は吐いた。

中将の後ろに、結構マジで怒りくるっているカリムの姿があった

が、准将は特に気にした様子も無い。

「貴方って人は、スカリエッツィをあの二人を使って脱獄させた拳
句、ガジエットの技術提供を強要させ、用済みとなったら捨てるな
んで、あのスカリエッツィにも勝る悪行。なぜそんな事をしたんで
すかー！」

「どうした酸っぱい魔人、サボリたかったからに、決まってるだろ
う。馬鹿かお前は、俺は自分の目的を一度もたがえた事なんて無い
ぞ」

裏切られたと彼女は思っただろうか。しかし事実として准将は自
分の主義主張を変えたことなどなかった。

ただあれだけ暴言を吐かれていても信頼していた准将が、彼女を
裏切ったような気がして涙が自然と目から溢れてくる。実際そうだ
から困った話だ。

「中将殿、あれうるさいんで、黙らせてくれませんか」

空気が読めないことなら一流の准将。一言でカリムの涙を消し去
る。

これがまだまともな言葉だったらよかったのと思うのだが、困
った事に彼にそれを望む事が無謀すぎる話だ。

百年の恋でも冷めるように流した涙が瞬時に枯れる。

「貴方って人は最後の最後まで、何でもこう私に対して酷いんですか
「いやだつて好みじゃないしゲロ的なものでさ」

「あー！！ また言いましたね！！ それ引つ張りますけどまた訴
えられたいんですか」

何気にいつものやり取りだ。いい忘れていたが部下二人はさつさと准将を捨てて逃げ出した。

あいつらに忠誠心を望むほうが無茶苦茶な話である。後がジエツトもついでに連れ去ったようだ。

「ふん、また無罪にしてやるだけだ。俺の弁護能力を甘く見るな、大体この逮捕自体不当逮捕に近いものだ」

「破壊活動防止法やら大量の罪でお前は捕まるんだよカソウ。騎士カリムや、スカリエツティの証言もある。お前をしょっ引くにしても相当の理由の筈だが」

中將の言葉を聞いて、こりゃ無理だと彼は諦める。彼の態度に自分が准将を売った様な罪悪感に駆られカリムは、彼に視線を合わせられない。

「くそ、ここで俺を倒しても第二第三の俺が、貴様らを」

「やめるお前の場合それが本当になりそうだ」

「いいか忘れるなゴキブリは、一匹いれば百匹いるんだ」

だから本当にお前が言う事実になりそうで怖いんだよ。

百匹湧く准将、正直相手にしたい類の生命体じゃない。一瞬想像したカリムは、罪悪感など忘れて体を震わせる。

「お前ら失礼すぎるだろう」

「そんなことはどうでもいい。君には任意など無い、捕まってもらおう」

「はいはい、言い逃れできるような状況じゃない事ぐらい理解しますよ」

スカリエツティの脱獄は、彼がしたものだという事は決定された。

しかしながら英雄らしいのか、そうでないのか、准将はいつもと変わらない対応をしている。

実際は、正直な話。彼はスカリエッツィを話した時点でこうなる事は予想ついていた。

殺して埋めた方が問題にどう考えたってならないからだ。

こいつは馬鹿だが仕事は出来る。しかも優秀どころか、裏技じみたレベルの話でだ。予想のつく事を、教皇の殺人未遂事件の真犯人である彼が理解しないはずが無いのだ。

「余裕だなカソウ」

「どう考えたってこれで終わるわけ無いことぐらいわかるだろうゴリラ」

この状況にあっても彼は罪を増やす。次は侮辱罪といったところが、なんとというか馬鹿にも程がある奴である。

今更罪がプラスされたところで、最高刑にしかなら無いので特に意味は無いだろう。と言うか、裁判が終わる前に死にそうなレベルだ。

しかし実際これでも彼の犯した罪は、一割にも満たないあたり彼らしい。

「貴様の所為で管理局は弱体の一途を辿っている。優秀な人材の首がまるで当たり前のようにぼろぼろ落ちていく。結果として本局と地上本部の上層部はボロボロだ」

「そこ俺は別に関係ないし。理解しているゴリラ、人間の言葉を話す前に人としての知識を深めよう。ね、それぐらい言葉を喋るゴリラなら理解できるゴリよね？」

喧嘩売ってます。そもそも口でこいつに勝とう、と言うのがチャ

レンジャー過ぎる、その代わりにカリムの拳が彼の鳩尾に突き刺さる、怠惰で過ごしていた彼にその一撃は悲惨すぎた。

と言うか、いい加減准将の扱いに慣れたのだから。殴れば黙るといふ極めてシンプルな思考が出来るようになった。

それがいい傾向であるわけが無いのは、誰もが周知だろう。カリム本人でさえ。

「いい加減黙っててください。貴方はまた捕まっただですよ、罪を軽くするためにガジェットの量産工場を教えてください、あとかくまっているあの二人も」

「えー、ぼくそんなこと知らないよーかりむおねーちゃん」

なかなかマウントでバインド喰らった人間を殴る教会騎士なんて見たことねーと思われるが、実際やってるんだからしょうがない。

「いや騎士カリム、ちょっとやりすぎでは」

「そんな事ありません、私をゲロ女といたり薬物中毒と違ってみたり、これぐらいしても収まりがつかないんです」

「え、違っただんですか。予言などと言う妄言を吐いて、役にもくそにも立たないファンタジー小説の魔法の詠唱みたいな言葉で無駄に人員を動かす。薬物中毒患者でしょう」

言うておくが一応准将の発言だ。

予言なんてファンタジー小説の代物としか、思っていない准将らしい発言だ。

現代の時代で、預言者なんだとほざけば、ちょっと鉄格子のついてそんな病院に送られるのと同じ事である。

開いた口がふさがらない、その言葉の通り口をあけたまま准将の

言葉にダメージを受けているカリム。そりゃいくらなんでも、そんな扱いをされたらショックであろう。

「え……って、ちょ………う、ううーうー」

正直な話、場が凍った。J S事件以降はカリムのスキルはすでに重宝される代物だったと言うことが、判明している准将はそれを知っているのに、ジャンキーの妄言だと思っている。

ファンタジーより何気に現実を見て方の隙間を縫う准将なのだから、彼らしいと言えば彼らしい。

「悲惨な話だよ、仮にも教会のトップに立てるだけの器がありながら。薬物中毒だぞ、アナウメ中将もどうかと思えますよね」

「私に振るな准将、お前は捕まえられてもなお迷惑をかけるのか」「失礼な、俺は心に思っている事しか口にしていない」

だからそれが悪いと、今ここにいる人間全てがそう思った。思わない人間のほうがおかしい状況だ。

彼の尋問も実際かねているからこそ、彼の声を封じていないのだが、これ以上喋られると、本当に泣き出しかねない金髪の教会の人がいるのでアナウメはあわてた。

「テロ組織統合本部、破壊活動防止法ならびに騒乱罪などももろの罪状で君を逮捕する」

そういつて彼に紙を突き出す。准将は出された紙を斜め読みして一度だけ頷き。

楽しそうに一度だけ彼らを見回した。

「その前に一つ問題を出そう。俺の現在の組織統合本部は、管理外世界に組織の拠点を置いていて、その国の法律に乗っ取った組織だ。理解したね、また住所もそちらに移した。つまり俺は管理外世界の人間であるわけだ。

つまり管理局法では俺を裁けないわけだ。なぜ君達はこんな事をしているのか、はなはだ疑問だね。そう言う書類は、騎士カリムに渡していたはずだが」

いま間違い無くこの場にいるもの全てが凍りついた。しかも今回ばかりは最低最悪な理由だ。あれだけの破壊活動をして、管理局方では管理外世界は不可侵であるのだ。

彼を捕まえるつもりなら、管理外世界の法律でその世界で裁かなくてははいけない。

あほな書類に混ぜてこんなものをカリムに渡した辺り確信犯過ぎる。

また管理局自体もこれを認めている。その証拠の書類もキチンと用意してあった。誰もがこの状況を認めたくないだろう。どうあっても彼を捕まえるには最大限の手続きを踏む必要がある。

誰も言いたくないだろうが、彼はあくまで管理外世界の人間であるのだ。介入するにはそれなりの手続きが必要だ、アースラ組のような裏技がつかえるわけじゃない。

少なくとも現状で捕まえる事はできないのである。

だが一人だけその中で、こずるい思考の浮ぶ奴がいた。カリムである、自分達の無力を感じ頂垂れた武装局員達を奮起するように、叫んだのだ。

「だったら書類手続きが終わるまで縛って監禁してればいいだけの話でしょうが」

「ちよつとまで、なんで法の番人である管理局が法を守らないとどういう事だ。卑怯だ、ずるすぎる」

「誰も貴方に言われたくありません。なら私たちのほうで監禁しておきます。管理局の方は何も知らない方向でお願いします」

遅しく育ったカリムだった。

全部准将のお陰だ、感謝なんて一つたりともしないだろうが、間違え無く准将の所為だ。

こんな重罪人を逃がす事をよしとするわけも無い人間達は、必要悪というものを身にしみて感じる。

「うう、神は俺を見放した」

「神がいるのは私達教会側です」

「くそ、この野郎、所詮ゲロ女風情が、まさか俺の最後の敵になるうとは」

切羽詰ってきたのだろう必死に准将は暴れまわった。だが十数人の局員によるバインドだ、Bランクの准将じゃどうにもならない。

「放せ、畜生放せよー、サボりたいだけなんだからさー」

「そのためになんで管理局や教会が大ダメージを追わなくちゃいけないんですか」

「ふっふっふ、それは俺がかつて司書だった時まで遡る」

ちなみに延々と准将の人生ダイジェストオンステージが開始されたのだが、誰一人聞いていなかった。

「聞けよー、折角俺の人生語ってやってのに」

「誰が聞きますかそんな馬鹿みたいな人生。と言うより覚悟してくださいよカソウ准将。貴方は管理局史上最底の犯罪者として刻まれる事になるんですから」

「そうか、俺をそこまで苛めるならもう一つ問題を出してみようか。ちなみに答えは教えないぞ次は、君達で正解してみよう」

どうしても誰も彼もが怯えた。

何と言つか困った事にこの人、問題を出すたび状況を悪化させたような錯覚に陥るからだ。それ以前に元々が問題だらけの人物だからだろうか。

どちらにせよ、さっきのトラウマが酷く彼らを怯えさせた。

「さてあの藻とであった時、俺は質量兵器の持ち出しが自由でした。では問題です、果たして俺が持ち出した質量兵器は一体何個だったでしょう」

ここで打ち切るんだ准将。最低なタイミング過ぎるだろう准将。けれどももう本当にあともう少しで終わりなんだ准将。

さて本当に終盤もギリギリの保管課です。

御託は言いません、独立組織統合本部のメンバーを求めています。至急ご連絡を。

十八章

ある意味物理的にも核爆弾クラスの発言をした准将の発言を全員が聞いた頃の話。

「例えばそれが、ガジェットと同じく量産されていた場合はどうだろう。そしてもしガジェットに積み込まれていた場合はどうか。何の為に無限書庫に二度もいったと思ってるんだろーね。法律の穴を抜ける方法と、質量兵器などを作っている企業をリストアップするためだ。」

またその企業を脅す材料を用意する為に、流石無限書庫なんでもそろってたよ。

今まで言ったのは、もしかしての問題だ。例えばそれがミッドチルダや時空管理局本局、地上本部なんかにすでに設置された後だなんて俺にはとても言えないよ」

しよっぱなからかつ飛ばしていく准将である。

一気に誰も手出しが出来なくなる。こいつは今民間人を人質に取ったのだ。

元管理局員の分際で開いた口がふさがらないとはこう言う事を言うのかも知れない。

「え、あ……あ、あな……たは、あなたは何を考えてるんですかー！ー」

「だってもしかしての話だし、事実じゃないかもしれないしー」
「で、バインドを解くつもりはあるのか無いのか、はっきりさせて欲しかったりするんだが」

法をつかさどる番人として、管理局員はどうするか追い詰められ

ていた。

事実とは言っていない。だが、この男ならやりかねないという、マイナス方面での信頼が、彼らには既に根付いていたのだ。こんな信頼のされ方、正直お断りだと思う。

彼らは自分の無力さを痛感した。それこそ少年漫画の挫折を味わった主人公張りに、復活しないところを除けばもう完璧である。

「バインドを解け、民間人を巻き込みかねないのだ。本当ならここで殺してもいいが、こいつにはまだ部下が残っている。そいつらがなにをしでかすか分からん」

「しかし!!」

彼らは敗北を認めるしかなかった。

ゆっくりと解けるバインドが、彼らの敗北をさらに刻み付ける。

地面に膝をつくものが溢れた。

地面に涙がこぼれ落ちた。

「あなたは、何がしたいんですか!!」

「いや特に何も、強いて言うならサボりたい。とか言ったら怒られそうなので、えーとそうだそう、管理局を支える為に行っていた脳みそ連中の代わりをしてやろうと言うのだ」

もはや誰も信用しない。

しかもサボりたいという理由のほつが強いのにへんな題目を掲げた所為で、後々彼は苦労する事になるのは目に見えている。

「管理局は高潔で素晴らしい組織だ。その善性は凄まじいものがあるだろう、だが世の中理屈で行くわけが無いのだ。政治に慈悲なん

てやる事自体無益、貴様らがそれを行なうからこそ俺は、こんなクーデターを起こした」

「どう考えてもでまかせじゃありませんか」

しかしここで准将は話を聞かないという、彼特有のISを使って聞き流す。

「なにより」S事件を合わせるに対応が後手に回る傾向が強い。大きな組織であれば仕方ない事だが、危機感などがなさ過ぎる。最低限の緊張感も保てないからこそ、ガジェット問題に対応できなかった」

適当ではないのだが、何と言うか色々駄目だ。

どれだけ正論を叫んでも、最初の言葉が最後まで後を引く。

「だからこそ、俺は管理局にその危機感を訴える組織を形成する。それこそが統合本部、我らは時空管理局に対して常に攻撃を仕掛ける用意をしてある」

何か間違っている。しかも喋っている本人自体が、全部でまかせを喋っているのだ。

最早いろんな意味で収拾がつかない。

「現状での我らの戦力は、ガジェット七万、そのオペレーターなどを合わせて九万。管理局ほどではないにしても、相当の大きさを誇る組織だ」

聞くだけで馬鹿らしい量だった。

管理局には絶対的総数で劣る物の、ガジェットの量からしてまだ増える。

「何を考えているんですか本当に、サボりたいだけであんな組織を形成しないで下さい」

「え、だってユーノ先生が、仕事は一人でやるより三人でやったほうが楽だって言ったから」

「何で変なところで馬鹿みたいに素直なんですか。サボりたいなら人を増やせばいいってどんな発想ですか。と言うより管理局はそんな理由で、こんなに酷い目にあっているんですか」

そりゃ聞き逃せる場所じゃない。誰だってそう思うだろう、管理局襲撃なんかも実際死傷者が出かけたレベルだ。

笑い話ですむには少しばかり酷い気もするが、准将は首をかきげた。

「いやそれは、危機管理能力がぬるい管理局の無能だろう」

そして爆弾を落とす。ちなみにそんな状況に追い込んだのは、忘れてはいけない。全部こいつである。

「トップがズタズタになった状態で、まともに機能する組織なんてありません。と言うかその原因を貴方といわれています」

カリムの発言に准将は不服そうだった。彼としてはたいした事をしていないつもりだったのだろう。

「失敬な、ただちょっと教皇ひき逃げして、不祥事を管理局中には撒いただけ出しな。その不祥事とかも無限書庫から調べましたよ、本当にあそこは何でもありますよね」

「全部貴方が原因じゃないですか。と言うかその理由全てがサボりたいってどういうことですか、どれだけ私達に迷惑をかけたらい

んですか」

「強いて言えば一生とか？」

本当になりそうだから恐ろしい話である。

ここにいる全員が彼に殺意すら湧いている。と言うか湧かないほうがおかしいだろうこれ。

「大体サボりたいなら捕まってくださいよ。一生牢屋に監禁してあげますよ」

「いやに決まっていんだろ馬鹿ゲロ、そんな世間体の悪い事出来るわけ無いじゃん」

お前は自分の犯罪歴を全部暴露しておきながら、そりゃ無いだろう。

「もうそんなもん死滅しますよ」

「なに、そんな事あるか。ちゃんと組織の長だし、キチンと法律にのっとりて逮捕権限を棄却させた。その際に俺を監禁しようとした管理局員を脅したところでチャラに決まってるだろうが」

何気に正当性があるように聞こえるから不思議な話だ。

正当性があるのと既に、明らかな犯罪を暴露している辺り彼のうかつさ加減が、誰でも理解できるだろう。

「チャラに出来るようなレベルじゃありません、超法規的措置で行なって捕まえてやりたいのに、貴方の言葉は悪い方だけは大体信用できるという悪夢のような事実があるから動けないんですよ」

「卵が先か妊娠が先かって奴だな」

「そんな言葉聞いたこともありません。と言うかもういい加減、消えてくれません。教会や管理局としても貴方の組織を見過ごす事な

「できないんで対策を立てたいんですよ」

大分性格的に駄目になってきたカリムは、完全にやさぐれている。関係ない話だが准将のカリムに対する好感度が四上がった。と言うかどこで好感度が上がったのか理解できない。

「やべえ熟女の空気を感じてしまった。こいつ俺の好みじゃないのに」

「本人の前で熟女とか言わないで下さい。こっちも貴方なんてお断りです」

地面の石をカソウに投げつける。

身体的基本性能が実はあまり高くない准将は、その石をまともに受けて悲鳴を上げる。

恨みがましい目でカリムを見るが、忘れちゃいけないこのビビリ彼女の鋭い視線に怯えて目をそらす。

「くそ、覚えているよゲロ女。お前みたいな可哀想な奴、まだいじりまくってやる」

そういつて彼は脱兎の如く逃げ出した。

すべてのものが理解した。自分達は犯罪者に負けたのだと、その場ですすり泣く声さえ聞こえる。

管理局は負けたのだ、正義を信じて戦ってきたというのにその努力が全て打ち砕かれた。彼らの心は折れそうになった、ただ泣き声だけが響く。

「すまないカリムどの、私があんな奴を見つけないければ。そうすればこんな事にはならなかったというのに」

「仕方ないんです。私もあの人を英雄としてみていました、質量兵

器なんてものはいたいした問題じゃないんです。兵器は使う人間が問題であったのに」

二人は後悔する。私達が彼と言う犯罪者を作り上げたど、日とりうつひよーいと叫んでる、馬鹿の所為で余計その心は強くなる。

「けどここでやめるわけにはいきません。私達しかあの人の対処法を知らないんです」

「老兵がまだ動かなくては成らんのか」

なんかここだけシリアスだが、今までを見ていれば笑いしか起らない辺り悲惨な話である。

「早急対応をしなくては、カソウは曲がりなりにも英雄だ。信者がこぞつて入ってくる、そうなる前に対処をしなくてはいけない」

「はい!」

ここで終わりなんだ准将、次で終わりなんだ准将。ところで実は質量兵器は彼が持っていたがジェット分しかないものであしからずだよ准将。

本当に長い間の拝読、真に有難うございました次で終わりです。

では最後の求人募集を、ただいまこちら統合本部。現在至急人材が欲しいです、就職希望の方は連絡を。

十九章

そしてとうとう終わりの頃の話。

実際カソウの離反後、特に変わった事は無かった、ただ管理局に一つの緊張感が生まれたただけだ。

管理局は常に攻撃される側である事を、再認識される事件だったのだ。

結局カソウの言った質量兵器に関しては、嘘であった事が本人から言われている。

俺もそこまで馬鹿じゃないと、彼は言っていたが誰一人信用する人間はいなかった。

管理局の法によって動かない組織が一つできてしまった。

しかもこれは堂々と本局の前に作られたのだから喧嘩を売っている。しかもそこに全戦力を用意して攻撃の準備までしておきながら何もしないのだ。

いくら管理局がゆるい組織でもこんなことをされれば対処に動く大きな組織の仕方ないところだろうこの辺りは、結果として藻が望んだ、動的に動く部隊がいくつもできる事になる。

時としてこういった劇薬が必要な事はあるのだ。

まさかサボりたいだけでこんな大事を行なったとは誰も思わなくなってくるから驚きだ。

彼はこれだけの為に、嫌われ役を請け負った流石英雄だと。結局色々な人間から言われ続けてしまう。

当然だ、眼前に敵対組織ができていて。その攻撃が何時襲い掛かるか分からない状況、いやでも対応しなくてはいけなくなったのだ。攻撃しない理由は、面倒だからと言うだけなのだから凄まじい。

「ありえねー」

「いや准将、あんた本当にこれを何も考えずにやってたんですか」

今の自分の状況に、彼は予想外だといやな汗を流していた。

「なんでだ、何でこんな事になるんだ」

「いやたいちよー、あんたどう考えたって組織のトップになったら仕事が増えるのは当たり前でしょうが」

「そんなことは無い、仕事は皆でやれば少なくなるんだ」

だがそんなことは特になかった。

むしろ保管課にいたときのほうが楽だったぐらいだ。彼は何を考えていたか分からないが、取り敢えず思惑は確実に失敗している。

「どうすればいいんだ、どうすればサボれる。しかも現在の状況じやあ、誰もやめさせてくれない」

「そりゃあんたあれだけ大々的にやったんですから、もうここをやめたら即逮捕ですよ」

さらに突きつけられる事実には、准将は突っ伏す。

ありえねー、俺の作戦は完璧だったというのにと、昨今の悪役で今更言わないような事をつぶやいた。

「強いて言うなら結果ではなくその後の経過が分からなかったところが問題だったんじゃない」

「何で誰もつつこんでくれなかったんだよ。サボりたいから努力し

てくれって言っただけじゃないか」

「世の中で、サボるためだけに時空世界史上最大の組織に喧嘩売る奴を俺は知りませんよ」

つまり彼らもまた准将に騙されたのだ。

彼は自分の組織を持ちたいと彼らに話を持ちかけた。しかも作るなら管理局に対抗するほどのものがないと、その作戦を見てこれならいけると判断した彼らは、彼に汚染されて実行するはめになったのだ。

「何てことだ、けど仕事しないと皆を食わせられないし」

「無駄に責任感のある人ってこう言う時面倒ですね」

ノルマンデイに、サーリットは二人して准将のうかつさを笑う。

彼らとしてはこの状況は感謝こそすれ、それ以上のことを感じる事は無い。

「たいちょうー仕事が溜まりかけていますから、さっさとやって下さいよ」

「って五分前に全部片付けたじゃん」

「あのですね、准将の仕事は正確で素早いですが、一つの組織をゼロから作り上げるんですよ。その始まりが忙しいのは当たり前ですよ」

気を失いそうになった。最近かけられていたリミッターを解除した所為で高位の魔法がつかえるようになったため、新しいデバイスを起動させてしぶしぶ仕事を開始する。

元々こういった事を得意とする人間だったりする。戦闘向の能力じゃないのだ。本当に。

さつくりと仕事を終わらせる辺り有能ながら、最早流れ作業のよ
うにやっている辺り彼の魔導師としての非凡さがようやく理解され
つつある。

「仕事したくねー」

「准将が自分で決めたんだから、いい加減諦めてくださいよ」

「分かってるよ、今度聖王教会に呼ばれてるから言ってくる」

結局のところ准将はただ忙しくなっただけで、管理局はちょっと
だけ融通が利くようになった。

何時しか敵対組織と言うよりは、対立組織へと変わり。後にこの
組織が、管理局を強くしたとまで呼ばれることになるのだが、結局
あまり関係ない話だ。

結局准将はサボれない事に苦しむだけだ。

「あー、もー、さぼりてー」

そんな声がいつも彼の部屋に響き渡る事になるだけだった。

これからすぐ彼は教会で、カリムの手によって捕まえられる事
になるのだが、別に大した事じゃないのでここに記しておく。

結局彼は拘留所で過ごす事になるが、ある意味気楽な生活が出来
たのでよかったかもしれない。まあ三日で部下に救い出される事
になるのだが、その時の彼の悲鳴は悲痛であった。

これにより一度悲惨な戦闘が行われて、二つの組織は多大なダメ
ージを負うことになる。

以降准将を捕まえようという人間は、カリムさえいなくなるが、
彼にとってはそれが素晴らしい事かどうかはわからない。

「准将仕事です」

「たいちよー仕事です」

「お願いですサボらせてください」

ちなみに、そんな事一生無理でした。

質量兵器保管課 終了

後書き

あとがきと言うほど書くことなんて無い

元々別のところで掲載していた。私の不手際で消してしまった作品。番外編は読者が見たければ出すけど、今はそのつもりもない。実は続編があるけど、それも見たい人がいなければ出すつもりは無い。

心の余裕が欲しいけど特にどうでもいい。むしろオリジナルが、この作品ほど人気が出る日があるかのほうが私には気がかりだ。合言葉はリメンバーゲロ、この言葉があればこの作品は何度でも復活するさ。いや知らないけどね。

そしてこの課に入ってくれた方がいるが、それはここで公開するつもりはないのでありますがとうとう感謝だけ伝えます。

あとこの作品の元々の予定していた作品を載せて、一応のお仕舞いとさせていただきます。

この作品は感想を催促してみる。くれなかったら番外編や二期なんてだすもんか、いや嘘ですけどね。

二十話を纏めて掲載するのは疲れしました。

予定していた話のダイジェスト。

それは英雄だったものが、管理局の不正を暴きだしたことから始まる。

だがその彼の行為は騒乱罪として報じられ、彼が指揮していた部隊を派遣し彼を捕らえることで収束した。

英雄大暴動と呼ばれるようになる事件は、様々な悲哀の中で終わりを迎えた。

だが英雄の有用性と能力を知った、最高評議会は彼を捕らえられた後、彼らの前に英雄を引き吊り出して、ある計画を実行する事を命じる。

その命令こそが時空管理局最高評議会所属対魔導師無力化対策部門質量兵器保管課なのである。元々保管されている質量兵器を使用する計画だった。

しかしながら英雄は断った。だがそれを最高評議会が許すはずもなかった、その計画を知るだけで簡単に言えばころされても仕方なかったのだ。

その日のうちに英雄は、三人いた家族の内二人をなくす事になり。一人を人質として確保される。

それから三年程度の月日が過ぎた頃は、もう誰も一人の英雄の名前を忘れていた。

二人の優秀な部下だけを与えられ、ただひたすらに質量兵器の兵器利用に対する項目を用意し続けた英雄は、ある事件を聞く。

ジュエルスカリエッティの事件だ。それに連動するようにカソウ准将は、管理局の要人にたいして家族を守る為に政戦を始めだす。

完全にまだ混乱している管理局の隙を突くように、あらゆる手管をしかけていく。

結果として教皇の殺害、主要企業に対する脅し、政府要人への賄賂や恐喝暗殺などを行なっていた。

その中にはゲンヤリナカジマもいた。調整の際に監禁されたギン

ガの為に、彼の言う事を聞くしか選択肢はなかった。

その頃には完全に激化していたJ S事件、英雄は其中で一人の戦闘機人に出会う。

それは彼が守るべき対象だった家族である。それこそがチヨウソウウモヤソウ失敗作として放逐された彼の妹だった。

また彼はその妹を殺害してまう。

救うものもなくなつた英雄は、茫然自失になる。

その時を同じくして揺り籠が管理局を襲う際に現れた。暴走して英雄は艦隊に向けて質量兵器放ちミッドチルダ自体を滅ぼそうとし始める。

完全に暴走した准将を止める為にカリムグラシアが、彼の前に立ちはだかる。

ただそれは完全に隙を突いた、いとも容易いナイフでの一撃であった。息も絶え絶えな英雄は最後の意地なのか騎士の首を絞めて殺害する。

しかしながら深く突き刺さつたナイフは准将の命を確実に奪う代物であった。彼女を殺害する頃には、彼は目の前さえ見えないほどに弱っていた。

そこにたどり着いたのが、サーリットとノルマンディであった。彼は英雄の遺言を聞き届けると、彼の当初の計画を最後まで実行する事を誓つた。

スカリエツティの逮捕には成功したものの多大な悲劇がミッドチルダには起きていた。

だがその悲劇の全てはスカリエツティが受け持つ事になる。

存在しない課の人間が暴走しても、知られてはいけない物が知れてしまつては管理局自体が傾くからだ。

そうやって英雄であつた男は、歴史に封殺される。またカソウ准将を封殺した男こそがドソウ中将であつた。

だがまだ悲劇は終わらない。

まだ娘が監禁されているゲンヤは、娘を守るためだけに暴走し次から次へと管理局の要人を殺害及び逮捕していく。

このゲンヤの行動の被害を受けたノルマンディは死亡する。またこの復讐によつてサーリットは、ギンガとゲンヤを殺害する。

そして死んだ彼の遺産によつて、サーリットは管理局に対して大攻勢をかける。

と言つても戦争を仕掛けたわけではない。今までの死んだものの蓄積全てを使つて、管理局に対しての暴走を外から監視する組織を作り上げたのだ。

だがこれを否定するドソウ中将との間でいざこざが起こり、どろ沼の政戦が始まる。この戦いでサーリットの立ち上げた組織は弱体化する、主要メンバーの六割が暗殺されたのだ。

そして最終幕、管理局と組織の会議が始まる。この結果管理局にサーリットの組織は吸収される事になる。

この会議の後、サーリットはドソウを暗殺するべく行動に移した。だがそれを見越していたドソウによつて彼は捕らえられる、理由は管理局の監視と言つて無用な組織を作つた騒乱罪や殺人未遂。

けたたましく笑うドソウを見て憤死しそうになりながらも策を考えるが、彼は何も出来ないままに捕らえられ拘置所送りになる。

そして最後の手管を使い、脱獄し今度こそドソウを殺害した。だ

がその際にドソウによって付けられた傷により、彼もまた死亡する。

e x ・ 1 後日談

完結したと嘯き後日談を書く頃の話

組織の長となった准将だが、なぜかこの組織の最高役職が准将になつてしまふ。

理由は特に無い、しいて言うなら部下が彼の事を准将と呼んでいたら最高役職がこれになつただけだ。

その結果、色々と組織の役職が面倒な事になつたが、全部准将がどうにかしている。サボりたいはずの准将だが、今更過ぎる。組織の長と言つのは常にこういうものなのだ。

血の涙でも流しかねないほど仕事をさせられる准将。自業自得だ。

一 応対管理局武装組織 スベテモヤソウ 全権統括准将とか言う訳の分からん階級が彼の為に与えられている。

色々な管理世界を回り、支援者を集めていたらかなりの戦闘人員も用意できた。

今となつては冗談のような話だ。かつてカソウが捕まえられた時のK Y事件は、両組織に多大なるダメージを与えた。ちなみにこの時のカソウの発言が、『空気ぐらい読めよ、俺はまだ留置所に居たかったのに』なんていう発言を残しているが、誰もがそれはお前に言いたいと思つている。またこれが、事件名になつている。管理局も案外冗談の通じるものだ。

その際の事件の死傷者の量から、管理局から優秀な人材はさらに減つてしまつただろう。

だがそんな事は准将には関係ない。

「仕事がなくならない、なんでなんだ人の二十倍以上の仕事をしているというのに！！」

彼はどこまで言っても自分本位だからだ。

「だから他の人の仕事をさせてみたんですが」

「駄目だ、こんな事では駄目だ、わかっているのか上が優秀すぎれば下は無能でもよくなる。だがそんな組織は上がいなくなればすぐに駄目になる」

こんなくだらない事を二度も言わすなと彼は叫ぶ。

サボりたいだけの癖に言っている正論だけは真面目に聞こえるこの男の発言、正論なのだがどうしても説得力が無い。

「だからそれをしない為に今色々とあなたに仕事をさせてるんですよが」

「なら俺以外にこれをさせる」

「駄目ですよ。たいちよー、こればかりは権力欲のある人間にさせるわけには行きません。これは貴方にこそ適切な仕事ですよ、権力の分散をキチンと行なえるのは常に、第三者だけですから」

「正論だ、確かに正論だが、こいつらは准将の扱い方を心得すぎている。」

まさか権力の中心に居るやつが、仕事をしたくないために権力の集中を避けるのは准将ぐらいだ。だからこそこの場合は正解である。効率のよい分散を行なうのは優秀で無欲な人間だけだ。それがこの場合、彼らではなく准将とだからだ。仕事をサボりたい為に、彼のトップの権力をそぎ落とすと思われるだろうが、困った事と言う

か彼の性格上の問題かもしれないが、仕事だけはキチンとやるのだ。この辺りが、真面目だといわれている奇跡のような過去がある准将が唯一昔と同じといえる辺りかもしれない。

「けど常識を考えてこんなのは組織を作る前に決めて置くところでしょう先輩」

「サボりたいからと言う理由で、起動した組織に、そんなの望むだけ無駄ですよ。最もだからこそ、管理局はこの組織ができて完全に軌道に乗るまで、危険性にすら気付けなかつたんですよ」

「あと作った組織が一応、管理外世界だからな。あつちの法律で作つてある、簡単に管理局が手を出さないようにな」

性格が悪すぎる。

犯罪組織を作ると変わらないのだ、法の番人の目をくらますにはこれぐらいの事を、しなくてはならないのは、当たり前前の事だ。

「だがお前ら俺に仕事をさせすぎだ」

「前科持ちにまでしたくせに何を言ってるんですか。貴方は私達を巻き込んだ側の人間なんですから、倍はしてもらいますよ」

「そうですね、俺だつていきなり総司令官ですよ。ガジェットがなければ物量負けしてましたよ」

万を超えるガジェットは最早戦場をゲームに変えたといわれるようになる。

実際KY事件のおり、このガジェットの大量投与が、かなりの問題となったのだが、准将はあまり気にした様子は無い。

理由は簡単だ、戦力があればそれだけで抑止力なる。少なくとも管理局は、簡単に攻撃出来なくなるのだ。現状で彼はそれだけの戦力を既に抱えている。

「しかし管理局は存外嫌われているな」

軽く資料を目を通しながら准将は呟いた。当然の事だが、話をそらすためだ。

「完璧な組織なんて存在しませんよ。と言うより嫌われて当然です、結局管理局が次元世界を牛耳ってるんですから、嫌われないほうがおかしいでしょう」

「確かにそうっすね。まあ嫌いな人は名前から既に拒否でしょう、折角次元世界と言う可能性を見つけたらそこは、管理局と言う組織が統括する世界でしたじゃ、話がまかり通りませんからね」

「俺が英雄にさせられた世界も全くその通りだったしな。嫌われな組織があるなど常識であり得ない、そのお陰で俺達はおまんまを食い上げないですむわけだ」

仕事は増えて泣きそうだけどなと彼は繋げる。

また頼まれた仕事が山のように増えていく。いい加減本気で逃げ出してもいいと思う。

こういつとき無駄に責任感があったりすると損である。准将はちなみにそう言うタイプだ。

「何度も言うがいい加減休みたい」

「ああ、無理です。少なくともあと一ヶ月は睡眠以外の休みはありませんよ」

「たいちよー俺だって、戦略とか覚える為に必死なんですよ。戦術はまあどうにかかりますけどね」

多分この中で一番地獄なのは、サーリットだろう、彼は総司令官の役職にありながら、部下が元将官だったり歴戦の英雄だったりして、それは、それはふざけたレベルの面子が揃っている。

小僧である彼は、彼らにそういった面子に敵うわけもない。ぶつちやけると彼の給料は、そういった人物より低かったりする。一応設立メンバーなのに、准将は仕事に感情を挟まない人なのだ。彼は後々の総司令官として鍛えてくれと、准将本人がそういった人物に命令している。また慈悲を加えるなど。

実際慈悲など与えられずに厳しすぎる教育が行なわれている。

結果として、今もなお、彼らの宿題を必死になって、解いていたりする。

ノルマンディは驚いた事に、准将の秘書だったりする。他にも事務関係のところのトップだったりするが、基本万能キャラなのでコングスタントに仕事をこなしているようだ。

なぜかカソウの周りには性格に難があるが優秀な奴が揃う。最もそういった人物も元々は、准将が殺さなかった、質量兵器保管課の元面々だったりする。

いやでも優秀な人物が入るのは仕方ないことだろう。一応全員エースクラスだ。

あと今更、准将が殺していないのにはばれていない理由とかを語る必要は無いだろう。

彼だからだ、ビビリが人を殺せるわけが無い。

「誰も俺に優しくない」

「優しくする理由が理解できません。あと明日管理局との会談があるんで、存分に喧嘩を売ってください」

「俺はお前らに喧嘩を売ってやる」

この日准将は、本気でベッドで泣いた。

ちなみにこの復讐の牙は、管理局にむけられる。管理局にはいい

迷惑だ。

それはある種の緊張感の中で行なわれていた。

時空管理局地上本部 英雄と呼ばれた男、カソウモヤソウ准将。今もなおその地位は変わらずは、管理局に喧嘩を売った時と変わらない服装のままに、ミッドチルダ地上本部に降り立つ。

管理局は今にも破裂しそうな火薬庫と対談する事になるのだ。

いやでも緊張する、中には緊張のあまり失神するものさえいた。

KY事件の際の被害は、准将の組織を否が応でも脅威と管理局に刻み付けたのだ。

もう二度と同じ悲劇を起こす事はできない。

事件以降管理局には、准将を恨むものも居れば、このお陰で管理局がより一層強い組織に変わったと言う者もいる。

そのための必要悪だと叫んだ人物さえいた。

「お久しぶりだ、騎士カリムという裏技を使ったのが中将になつておめでとう」

「ええ、お久しぶりですカソウさん」

「まだ三ヶ月しか経っていないと言うのに、老けたもんだ。寝てないんじゃないか美容の大敵だぞ」

お前が大敵だ。

「それはもう貴方のお陰で眠れない毎日を過ごしていますよ」

「そうなのか、それは悪い。けどどうあっても俺はお前の気持ちにはこたえられない」

「誰がそんな事を言っていますか！　それより付いてきて下さい。今日は会談の為に来ているんでしょう」

特に変わっていないカリムは、准将に当然のように遊ばれる。すぐに目に涙を溜める癖は、まだ治っていないようだ。取り敢えず三十の癖じゃない。

管理局の温度は今とてつもなく低い、理由は火薬庫がくるのだ。火花一つ出してはいけない状態だ。

「ドソウ大将か、流石に老害スリーは、ここにくるほど若くないか」
「黙れ、あの人達を侮辱する事は、貴様でも罷り成らんだ」
「いやどうせさ、もう引退しているだろう？　あれしてなかったっけ、どうでもいいやあれは」

絶対にいつか彼は刺される、多分死なないけど刺される。百パーセント死なないけど刺される。

ここまでくどく言う必要も無いけど、一度どころか二度三度、いや五度、十は確かか、いや百ぐらい。取り敢えずそれぐらいは刺される、魔法でも打たれるかもしれない。

けどなんか死にそうに無い。死んでも生き返りそうな気がする。

「でだ、今回の会談だが、こちらの要求する賠償金は三百といったところでいい」

「ちょ、ちょっと、それはいくらなんでも！！」

「留置所を破壊され、囚人や看視を含む七千名の死傷者についてはどうする気だ」

鼻歌を歌う准将、知った事じゃないと軽く馬鹿にする。

カリムが顔を真っ赤にして体を震わせる。

「それは騎士カリム、君の無能の所為だ。あくまでそちらの無能の所為だ、俺のどこに落ち度があるかな。僕は君達の管理外世界への介入に関する書類は見せてもらっていないんだが」

ちなみにだが、准将はその書類を捕まる前に既に抹消している。管理局を内部情報だけで混沌に陥れた人間が、その程度の事が出来ないはずも無い。本当に大迷惑だ。

「ちが、いえ、私は、私はキチンと書類を用意しました」

「棄却されたけどな。そして何よりぶち込んだ場所が不味かった、俺を留置所に入れるのならば、俺の第二の故郷じゃないと道理に合わない」

あくまで管理局は不可侵の形をとらなくてはいけないのだ。であれば犯罪者である彼だとしても、裁く形と方法は全て管理局の法ではなくその世界の法である必要がある。

いくら管理外世界でもそれぐらいの裏工作は、管理局であれば容易いだろう。次元世界の行き来も出来ない世界の科学力と政治では、比べるのも無残な差があつてしかるべきだ。

つまりでつち上げが可能であり、書類を弄くる事も不可能ではないのだ。

どれだけ重罪人でも、国の主権を犯す事は不可侵とまで言うてる国が許されるはずも無い。それは遠まわしに管理外世界の人間は人間ではないと言っているのと変わらないからだ。

そういつた例外を作る事が許されるはずもない。管理局はそういう組織だ。

「ですが、貴方はあの時Sランクの力を取り戻しています。そんな人が通常の高速でいいわけ無いでしょう。リミッターをかけるための処理です」

「だが俺はあくまで管理外世界の人間だ。別の世界の法律を管理局が犯す事は内政干渉以外の物ではない。こういうことに例外をつくらることが許されないのは当たり前の話だろう。」

そもそも管理局よりの人間であろうと、宗教人が国の主権を侵略するのと同じ事だ、つまり宗教の政治介入だ。許されるわけが無いよな、少なくとも世論は絶対に許さない。そう言う方向に俺は持っていく事ができる、ここで殺されてもだ」

困った、本当に困った今回の准将は普通に真面目だ。しかし実は話をそらしているだけだったりする。

言っている事は正論で、どれだけ彼が管理局からすれば犯罪者だとしても、彼の組織は巨大で管理局としても無視できない、と言うか目の前にいるから余計意識してしまう。

困った事に質量兵器を堂々と所有を公言している彼は、そう言う意味では管理局以外の所からそれほどの糾弾は無い。

この組織の設立の名目に、AMFが発展した際の対策の一つとっているからだ。最初からつかえるものは使うというスタンスだけは彼は変えていない。

「そもそも管理局には、俺に出して欲しくない情報がいくらでもあるよな。保管課に、第六十管理世界大戦に、保管課エース殺害事件、それともほかにどれがある。その全てを三百で黙ってやろうと言うんだ、安いと思わないか？」

しかしヤクザの恫喝と変わらない発言の数々だ。

実際ここまで酷い脅しは無いだろうが、どの外交でも脅しは当た

りに使われているだろう。その程度の代物に過ぎない。

そもそも通常外交において、ここまで自分達の痛い所を突かれる内容を用意する事自体が、あまり想像しえない話だ。

理由は准将が昔から知りすぎていた、だがこの程度の事カリムたちも言われると思っていた。

「ですが、貴方が犯罪者である以上どこまで言っても妄言です。書類があっても偽造で済みます、最初からその課は、存在しないんですから。貴方の存在していた、証拠は貴方以外に出せません」

「これは秘匿部署として仕方ない内容だな。だが、宗教と政治の混在はそろそろ度を増してきたところだろう。それが俺に架かればどうなるか理解も出来るはずだ、黙って用意するかそれとも譲歩する内容を用意しろ」

「確かにそうだろうなカソウ。お前にそう教育したのは私だ、なら次の言葉はわかっていだろう」

怒りだけを押し殺して声に殺意を籠める。

差し出されたコーヒーに毒を入れられてもおかしく無いと言つのに、軽く一気飲みして准将は、続くべき言葉を待った。

「アルカンシエルを総計百発以上貴様の組織の撃ち込もう」

降参と軽く諸手を挙げる。戦力で管理局に彼の組織が敵うわけが無い、冗談でもそんな手段が使われれば、簡単に組織は基地ごと消滅する。

最もその際は管理局も大量虐殺の汚名を受けなくてはならなくなるが、少なくとも保管課やその他の負の部分が晒されるよりはマシだ。

なにより准将たちの組織が優秀だとしても、管理局が無能と言う話ではない。管理局は優秀だ、それだけは間違いないのだ。

百年以上にわたって管理局は次元世界を支えてきたのは、無能では断じて無いからだ。准将の組織は、実際管理局が本気になれば一瞬で潰される。

もうすでに彼は次元犯罪者として扱われても仕方ない。ロストロギア以外の兵器の所有は全てしましているような組織だ。

本局の目の前にあるというのが問題なだけで、無視できない程度の組織に過ぎないのだ。

「ふっふっふ、アルカンシエルでの砲撃。流石ドソウ大将だ、けど正直それが妥当だ。困った事にそれをされると勝ち目がない」

「余裕がありすぎる貴方は一体何を考えているんすか」

「別に組織的に管理局に勝てるものが作れるなんて最初から思っていない。今日来たのはただの商談だ、組織には金が要る。そして目の前に金を出してくれる組織がある」

これが理由だと准将はあまり見せない、詐欺師の笑みを作り上げる。

カリムでさえ、これがあのカソウかと思うほどだったのだから、どれだ准将が日ごろ駄目だったかわかるだろう。

「貴様の組織で欲しいものなぞ何一つ無い。貴様が結局全て奪い去った質量兵器ぐらいだろう」

「いいやそんなことは無い、絶対にあんたらはもう一つある。さてここに一つの品物があるわけだ。我が組織最高の品物が」

腕を汲んだまま不適に笑うだけで品物を出すそぶりは無い。

何一つ彼は用意していないのだ。疑問に思うのは当然、カリムもドソウも同じだろう。

「まだわからないのか、とても簡単だぞ、管理局が現状で咽喉から手を出したいほどに欲しいものは一つしかないだろう」

管理局が欲しいもの、それは簡単だ。准将や彼が起こした事件により減った人材だ。

「欲しくないとは言わせない。その全てが第一線級、事務ともにいいものを揃えているぞ」

「え、ちよつと待ってください。なぜここで人材を与えるとこの選択肢があるのですか！！」

「簡単だ、人間が少なくなれば管理局は俺達を壊せなくなる。しかも用意している人材ラインナップは少なくとも、管理局の教導を耐えられる人材を用意している。欲しくないとは言わせない」

「これが全てサボりたいからこそ、できた組織だなんて誰も思わない。」

誰もが彼を英雄だと思うだろう。実際サボりたいからこそ准将がかなり死ぬ気で仕事をしているのだが、そんなことに部下しか気付かない。

「だが情報を流される」

「今更情報が何の価値がある。管理局に諜報員がいないと考えている事自体驚きだ。俺とお前らは敵対しているんだぞ」

何よりその情報収集能力がアホみたいに高い男が目の前にいる。

「そして何よりお前らに売り出すのは、人材じゃない。それもあると言っただけだ。独立組織 スベテモヤソウ を一括りでお前らにくれてやる」

「冗談だろうと誰もが思うだろう。」

だが准将はサボれない時点で、この方法は考えていた。書類手続きに関して失敗など無い、そして部下に喧嘩を売るのは当たり前的事だ。

そんなの先ほど予告してある。

仕事が増えたとしても、サボるためなら努力を惜しむ事は無い。忘れてはならない、サボる為に管理局と敵対したのだ准将は。

悲惨な大馬鹿であることはもう証明されてある。誰一人開いた口がふさがらないであろう。

「あいつらは俺に喧嘩を売った。だから仕事を終わらせて、さらに努力してあげただけだ、最もこれは後々やる事だったがな」

「それを今か、よりにもよって責様は今やるのか」

「どうせ俺は捕まえられる。更正プログラムなんぞ受けるつもりも無いから寝て過ごす、これほど完璧なプランは無いだろう。それに緊急時における無能はなくなる、これでもたつく事も無いだろう。あの時みたいに」

全ての武装隊を動かす上で能動は必要だ。

ドソウは屈服するしかないだろう。完璧に管理局側の負けだった、対抗するまもなく管理局は変わってしまったのだ。

正攻法ではないが、これほど完璧な手段もあるまい。全て偶然の産物だとしてもだ。

「こいつが、せめてこいつが馬鹿じゃなければ」

「もう遅いです、諦めて下さい大将閣下」

「何を泣いているんだ。まさかうれし泣きかそんな喜ぶなよ、ただじゃないんだしさ」

断じて違つ。

彼が馬鹿じゃなければ、本当に管理局だつてもつと強大な組織に変わっていただろう。ドソウは、プラスになったとしてもせめて頭さえまともならと本気で泣いている。

死者も出た、色々出た実は不正をしている官僚なども全て消えている。最も命も相当数消えているが、それは民間人にも言えることだ。

必要悪と打ち切るべきかと二人して戸惑う。ただ負けただけならいい、遊ばれた結果として負けたなどと言う無残な結果だ。

その絶望は筆舌に尽くし難い。

「なんか泣いているし少し通信するから。邪魔すんなよ」

一度デバイスが薄く光る。

そして准将は何時までも鬼だった。

『あ、准将、会議終わったんですか』

『いや交渉は終了だけでもうちよいか』

『それで、この組織はいくらぐらいで売れそうですかね』

なんかばれたた。

「いや、いやそんなこと俺がするわけ無いだろう」

『サボりたくて仕方のない貴方がなにをするかぐらいこつちは読めるんですよ。当然部下にも支援組織にもそういつています』

『たいちよーが自分の組織を管理局に売る事は確実だと、何年部下していると思っっているんですか』

だが彼も負けた。まさかここで部下が彼に噛み付くとは思わなかった。

……いや、結構前から噛み付いていたか。

『准将が管理局を売るのはわかっていましたが、貴方の裏工作を退ける自信が無いから、こっちに有利なように条件を変えておきました』

「あれ、え？　すげー不平等条約にしようと思っていたのに」

『いえいえ、別に悪くないですよ。准将に仕事をさせ続けるというのがこっちの条件ですし』

いま、通信を強引に聞いたカリムとドソウの目が輝いた。

まさに書類に印を押させようと考えて、既に取り出していたのが敗因だった。

それからの二人の動作はまさに神がかっていた。

最初にカリムのシャイニングウイザード、そしてドソウがすぐさま後ろに回って、一撃目で失いかけた意識を保とうとするが、鍛えられた腕が彼を掴みそのまま地面から引っこ抜く。

カリムにはトラウマを呼び起こすジャーマンスープレックスホルド。だが攻撃は止まない、カリムは准将顔面に着地した。当然の事だが下着を見て准将は失神しかける。

「痴女め」

もしかしたらその言葉の後の、水車落としが致命傷だったのかもしれないが、彼なら死なない筈だ。殺しても死にそうに無い。

彼は生きていた、必死の形相で立ち上がるようにするが、一連の攻

撃を硬い地面で受ければ致命傷になりかね無いと言うのに、流石S
ランク魔術師といったところか。

少なくともここではほめ言葉ではない。

彼は必死にカリムにすがりつく、その表情は必死で一応精神は乙
女のカリムは、恐怖のあまり硬直する。

色々と年齢をいいたい放題言っていたが、いや訂正言いたい砲台
だったが、そしてその恐怖が限界に達した時彼女は准将の腹を抉っ
てしまった。

准将は結局、書類を奪われ絶望する。

そんな犠牲の中、教会騎士カリム⇨グラシアは、ゲロ女として再
誕した。

e x · i 後日談(後書き)

今日から一日一話投稿していきます

e x ・ 2 後日談

准将と部下とカリムと被害者とグラントフィナーレの頃の話。

「もつやだよお」

「そう言うな俺もいやだ」

ゲロを浴びせかけられ涙を流す彼女。シャワーが終わったが、この二人だけは絶望が目に刻み付けられている。

なんと言う悲劇だろう、准将はこれから元帥相当の准将になるのだ。意味がわからない役職だが完全に准将を元帥にするような無能じゃ管理局は無い。

「俺はこれから仕事漬けか」

「貴方の所為で私はこれからまたゲロ女の道を歩む事になるんですよ」

「頑張れ、俺は応援しないゲロよ」

かるく准将は脊髄反射でカリムを怒らせる。

彼女は椅子から立ち上がり、指を刺して大声を上げる。

「あーまたですか、またそれを言いますか」

「何を言っているんですか、もつさつさと受け入れたほうが楽ですよ」

「できませんよ、どこの世界にうら若き乙女がゲロ女とか言われて喜ぶんですか」

首をかしげる。准将は何度も言うがカリムに対して基本暴言はほめ言葉だ。何度も言ったか自信がなくなってきた。

金色の髪を振り回して、キヤーキヤーと喚く。

目に溜めた涙がやけに、可愛らしく見えるこの三十代である。

彼女はゲロの言葉に反応するたび、予備の貞淑な服装を振り乱してまだ濡れている髪から飛び散った水滴が、服に染みていた。

「いやだって好きなんだろゲロ、じゃなけりやゲロなんて浴びないって」

「全て貴方達の不可抗力でしょうが、どこまで私に迷惑をかけるんですか」

「それでだ、お前のゲロネタは飽きてきたが、俺のほうの問題だ。このままいたら間違い無く仕事に殺される」

彼は書類を見て冷や汗をかきっぱなしだ。

そこには一つ准将に明らかに都合の悪い文章書き留められていた。

『また組織の受け渡しの際、組織の全権統括准将であるカソウモヤソウは、管理局との有効の為に前線への派遣などを行う事を確約する』

と書いてあった。

准将は死にそうだ、何しろ今まで書類などで管理局を嵌めてきた癖にここに来て失敗している。

「うかつだった、裏切り者が身内から出るなんて」

「最初の裏切りはカソウさんでしょう」

「違う俺は奴らに最初からそう言う旨を伝えてあるから裏切りじゃない。俺はいつでもルール上で相手を嵌める事しか考えていない」

その一番の被害者は目の前のカリムであるので、いやでも納得させられる。

書類上だったり、法律上では間違い無く准将は裏切っていない。キチンと手続きをとっている、ただそれをばらさないようにやるだけだ。

「今までのツケです。貴方が管理局や、それに関わる人達の命の復讐ですよ」

「いつそ殺されればいいんだ。そうだ俺が殺されれば」

「やめてくださいよ、何でそんな発想になるんですか!！」

何でこの人は簡単に准将を信じられるのでしょうか。つくづく疑問です。何しろ騙された回数ならその数千倍だ。

けど本気で泣きそうになるのは、少しばかり准将も困るだろう。

「うざいなー、いいじゃん死んだって、神は自殺も許してくれる素晴らしき心を持っているさ」

「ごめん、明らかにこいつ駄目だ。」

「だからなんでそう言う発想になるんです」

「あまいな騎士カリム、俺はサボりたいが為に管理局に喧嘩を売った男だぞ」

そんな事実今更聞きたくない。

と言うか、聖女の涙も准将は効かない。ノーダメージだ、本当にここで空気を読めば恋愛フラグでもたったかもしれないのに。

空気が読めないのは准将のレアスキルだらもう今更過ぎる。

彼にそんな事を望むのは、かなり無謀なチャレンジだ。

恋愛とは全く無縁、女性の感情をぶち壊すのは、カリムと准将の今までの会話を見てもらえば理解できるだろう。

「しかしリメンバーゲロ、俺も仕事が増えるし、お前も俺の監視官に代わるわけだ逃げたいよなお互よ……」

「それは貴方に言われたくないですが同感です。対カソウ准将对策のトップですし私、ってまた言いましたねゲロって、リメンバーゲロってなんですかどんな暴言ですか、ゲロを思い出すなんてどんな暴言です」

「そう言うなって、お前のゲロなら食べたい人種もいるさ。ロリコンには好かれそうな顔してるしな」

准将の暴言は悲惨すぎる。

しかもフォローのつもりで言っているから容赦なさ過ぎる。ロリコンに好かれそうには、意識すればお前美人だから気にすんなよ。の意味であるから驚きだ。

当然それがフォローとも思わないカリムは、准将の発言に憤慨している。

「どう言う言葉ですか。フォローであっても喧嘩しか売ってませんよ」

「言葉のままの意味なんだがな、失礼な奴だよ。しかし仕事したくなーから死にてー」

准将は一人呟く、完全にやる気の無い行動ではあるが、彼のそんな言葉を聴くたびカリムはあわてていた。

「しかしさー俺ってロリコンじゃないけど、風呂上りの女性ってエ

ロイよな」

彼の発言だけは常に台無しだったが。

カリムはそれにも反応して、真っ赤になって准将を罵倒し始めるが、ゲロリメンバーにより、一瞬にして彼女は話をそらされる。

結局この日カリムは本気で二度泣いた。

それから一年ほどの時間が過ぎる。

カソウ准将は七つの戦争を終わらせた、前線に君臨する管理局の英雄は質量兵器戦略課と共に名を響かせる。

しかもその全てを口で終わらせたのだから彼は、実際問題彼の能力は英雄どころか、暴力だった。あらゆる手段を使って世界を屈服させ続けた。

「仕事したくない」

「そんな事いつている状況じゃないでしょうカソウさん」

「ゲロとジャンキーとか最近言わなくなったが俺はいつもそう思っているよ騎士カリム。だから休ませてくれ、最近は紛争にも俺を出して泥沼化を止めたりと俺もう死ぬぞ」

しかしカリムは気にしたそぶりを見せない。准将の優秀さは尋常ではない、彼は馬鹿だが優秀それはいい、これこそドソウ大將が彼に期待した代物だろう。

真面目であればこれが当たり前のように行なわれていたのだから正気の沙汰じゃない。これが管理局地上本部の英雄と言われた彼の本当の力だ。

実は凄かったが、何でもこう両極端なのか驚きだ。

准将を恨んでいるものは多い、だがそれ以上に信者が増えていたのだ。

いまや管理局の一代派閥である。その所為で仕事が増える。最近では面倒だからその九割をあの特徴的な部下に任しているが、それでも彼の仕事は増える。

「もうさ、いいじゃん。部下でも出来るんだし俺する必要ないぞ。このナイアガラ女いい加減、休みをくれ」

「駄目ですよ、あなたは仕事をしないといけないんですから。そして新しいですけど私ナイアガラが何かわからないです」

考えてみれば彼女は、地球の事詳しく知るはずも無い。

こういつとき無駄に知識の深い彼は、と言うか准将の知識は基本なぜか無駄がつくが、カリムがその事を知らないくて拗ねた。

「本当に死んでやろうか、俺の怒りは凄まじいぞ」

だからこの仕事を終わらせてくださいとカリムは准将に仕事をプレゼントする。何気に彼女は最近教会の仕事よりも准将の秘書みたいな役割になっていた。

机を何度も叩き、世の中が悪い。なぜ俺がこんな事を解かれは嘆き続ける。

そんな事をしていたら、部下達が彼を引き吊り戦艦など強引にぶち込み仕事をさせるといふ日々がもうずっと続いていた。

実際今も変わらない、彼は会議の為に引き摺られ仕事をさせられるのエンドレスだ。

「もうやだ、仕事したくない」

「駄目です、貴方はもう仕事しかしちゃいけません」

そう言っただけは車にぶち込まれる。

准将は頭をぶつけ痛みで呻き声を上げる。

「なかなか大層な身分ですね英雄様」

彼の姿を見た運転手は嫌味をこぼす。手元には範囲はしょぼいが威力だけなら折り紙つきの質量兵器が存在していた。彼は恨まれているのだ、それだけの活躍をし続けた。それは妬みもあるかもしれないが、そんな彼に復習しようと言う人間がいてもおかしくない。

恨まれるだけの理由と存在が証明されている。最も准将はその姿を見て爛々と目を輝かせていた。

「どこがだ、仕事なんざしたくねーのにさせられる勤労戦士というだけだろうが」

「だがあんたは俺らの国に大してあんな事をしやがったんだろうが」

それはどう見ても彼に好意的な人間ではなかった。

准将がこの時嬉しそうに笑ったのは、ただサボれる可能性が出たからだろう。

「どれ、色々やったぞ俺。少なくとも、千人は殺したからなどの国でも」

「その殺された恨みを晴らしに着たんだよ。恋人の仇は打たせてもらうぞ」

「あっそうか、一緒に死んでくれるのか。なんて有難い、ラッキーださっさと殺してくれ。こんな素晴らしいタイミングは珍しい」

その日管理局は、一人の英雄を亡くすことになる。
それは単なる自爆テロだった。だが困った事に准将の願いどおり
だったのだから困った話だ。

この日を誰もが悲劇の日と扱い、三提督と並ぶ英雄 統括准将
が彼の称号になる。

落日の日といわれ質量兵器戦略課も少しの間、その暴走は穏やか
なものになるのだがそれさえどうでもいい話。

管理局から持ち出しはやてによって、捕まえられた時と同じ兵器
だった。皮肉といえば皮肉だが、殺されてしかるべき人間だった。
だからこそ誰もが納得してしまう、自爆テロであったとしてもだ。

これより先、テロ組織が管理局によって根絶させられるようにな
ってしまうのだがそれは仕方のないことかもしれない。

英雄をなくした管理局は、その矛先をテロに向けてしまったのだ。
それは質量兵器と同じく、こうやって管理局はまた英雄の意向を聞
いてしまったのかもしれない。

また鉄槌が振り下ろされる。また管理局は一つ高潔な組織にまた
一つ変わっていくのだ。

まあそれから先のことは誰にもわからない。

では続きを、それは太陽の光が降り注ぐ日々。
山間の村に大きな畑を抱えた人物が一人いた。

「いい野菜だこれは、これで今日はこれで生きていける」

汗をぬぐい一人、畑で精を出す男がいた。

一人身ながらに村の人間からも、真面目な人間だといわれている
評判の好青年だ。

魔導師としての実力も高いため自警団の非常団員になっているよ
うだが、本当に困った時しか手伝うつもりは無いといっている。

「土もよく出来たし、今年は豊作だろうな」

満足そうに畑を見つける彼は、そのまま見続ける。青々と茂った
野菜達を見て満足そうな笑みを作る。

最初の一年目は駄目だった、次の二年目は多少土が仕上がってき
た、今年は完璧だった。天候も万全完璧だった。

そこに一つのへりが降り立つ。

金色の髪がへりの風で髪が乱雑に舞い上がる。

煉獄の怒りを背景に纏い、ワルキューレの騎行がバックコーラスで流れていそうな迫力だった。

その目は涙が溜まっている、ただしそれ以上に怒りが溜まっていた。

「見つけました、お久しぶりですねカソウさん」

「り……、りめん………ばー、……ゲロ」

それが永久総括准将の帰還の合図であったのは言うまでもない。

そして管理局黄金時代と呼ばれる、完全な意味で時空管理局が次元世界に、君臨するだけの基盤を作った柱の一つとなる。

当然、彼が望んだものであるわけが、無いのは間違いない話である。

人生が上手くいかないのは当たり前前の事実であるようだ。

e x . 2 後日談（後書き）

次からは、保管課前日譚 時空管理局広報課 の始まりです。

第二部 時空管理局広報課

それは英雄が始まった時の話だ。
誰もその話を詳しくは知らない。

事件を知るものは全て口を塞ぎ、彼の栄光がどう言うものだったかを教えることはなかった。

ただ土下座の英雄と言う名を残すのみだ。
しかしその戦争は速く終わっただけじゃない、その国の上層部は全て殺されていた。

英雄が交渉したと言われる人間まで全てが。

資料整理課 第六番倉庫蜂P - 82の個人管理書類の中にのみその事実が記載されている。

カソウⅡモヤソウと言われた英雄の汚点にして栄光の物語。

地上本部から出向と言う形で経験を積む為に来た新米の情報幕僚が上司達の死亡によって昇進し、幕僚長となって戦争を平定させるまでの下らない話。

それは管理局に一人の英雄が生まれる物語だろう。けれど正気では生きていけなかった、戦争と言う名の悲劇により生まれた被害者の物語でもある。

後に管理局と敵対し、最強ともいえる組織と互角に戦う事になった男の前日譚。

時空管理局次元航行部隊への出向幕僚の歩み 第六十管理世界大戦

「さあ住民達、この戦争を終わらせましょう。皆さんそれで満足でしょう、アルカンシエルを住民に向けて砲撃用意」

管理局にあつてその男は異質すぎた。

目の前で起きているのはただの虐殺の予告だ。

「第六十世界管理世界総督 こちらはレジスタンスだ、この僕は管理局の戦艦を強奪する事に成功した。これよりこの世界に対して攻撃を開始するが、それは住民だけにさせてもらう。この世界が管理局に勝利したとしても、誰一人生きていけない世界に変える」

それは首都に浮んだ戦艦、既に発射段階で待機された最悪の砲撃だ。

「こちらソウギハカソウ、降伏をしなければ手始めに首都を焼き払う。最早管理局など関係ない、戦争を起こした貴様へ反逆する」

たった一台の管理局の船が全てを変えた、激戦区から強奪されたのである船は、間違い無く首都に存在し容赦なく、彼ら全てをなぎ払おうとしていた。

この世界の人間の為にと思っていた彼らには、その脅しは痛烈すぎた。

管理局と講和しなければ間違い無くこの船は焼き払うだろう、そ

れだけの確証を得ていたのだ。鍵は殆ど最後まで廻されていた、あとはもう少して終わる。首都に戦艦がいて彼らを狙っている、それだけで戦争は負けと否応なしに刻み付けられるのだ。

たとえ激戦区では互角以上に戦っていたとしてもだ。

「分かった管理局と講和する。だからそれだけはやめてくれ」

「了解したけどもう声とお前らとは別のところで決まっているんだ。だからお前らの命が必要なんだよ、ごめんね」

鍵が最後まで捻られる、それを引き金にして半径数百キロメートルがなぎ払われカソウモヤソウと言う英雄は誕生した。

と言う嘘を告げて、第二部の予告とさせていただきます。

第二部 時空管理局広報課（後書き）

本当に嘘です。

一章

質量兵器保管課 第二期 時空管理局広報課

それは准将が始めて准将に成った頃。

第六十管理世界大戦が恐ろしい速度で終結した立役者であるカソウ准将が、管理局のイメージアップなどの戦略の為に広報課に移動になった頃だ。

元々一時的な出向のはずであったが、カソウ准将はこの頃になると魔力リミッターによって八ランクほど落とされていた弊害か、デバイスの損傷の為か、どちらにしろ医者から前線勤務が不可能であると言う診断書を用意して、広報課にきちんとし転属を行なった。

これを嘆いたのは、ドソウ中将以下大戦メンバー全員である。

実際の准将の活躍を見たのは、彼らであり。また敵であったのだが、ただ土下座の英雄と皆が口にするだけで、実際なにを行ったのか理解ができないうちに、この戦争は終わっていた。

いや戦争ですらない、死者や怪我人に到る人的被害が出る事はなかったのだ。

そんな功績があるからこそ彼は、英雄と呼ばれていて、将来を期待されたのだが、管理局の軍事関係のところから逃げてしまったようである。

今の彼の仕事は広報、最初の頃はテレビなどの露出をメインにしていたが最近はいくらか話が変わるようで、部下であるチヨウソウとトバソウと共にラジオをメインに出演していた。

いつもの軽い会話を交えながら、二人は楽しそうにラジオを進行している。

既にこの頃から覚醒し始めていた准将ではあるが、基本この頃は礼儀正しい子である。

「さて、今日はカソウ准将からのフリートークを用意していますよ」

「いや無理ですよ。僕にはそんな事できません」

お前誰だ。

「いつも通り控えめなカソウ准将ですが、そんな事じゃ英雄として使い潰されちゃいますよ」

「いえいえ、そんな事させるわけ無いじゃないですか。既に僕は、医者診断で前線勤務さえ出来ない無能者に成り下がっているんですよ」

二度聞きたいお前誰だと。

これが全盛期の准将である。サボりたいと思う前の、優秀だった頃の彼だ。

実際保管課にはいる半年前の話である。

「おやおや、そういわないで下さいよ。チヨウソウは准将の玉の輿狙ってるんですから」

「へーそうなんですか。取り敢えず好みじゃないんで、後六十ぐらい歳をとってもらえますか」

「ひどいよ、准将酷すぎるよ。うら若き乙女に、どんなハードルを要求しているの、と言つか八十位だよ私。寿命が尽きて死ぬといってるのかな」

この漫才コンビのような掛け合いが、ミッドチルダの若い子に人気だ。

ちなみに准将は計算的腹黒キャラとか思われているが、わかっていると思うが天然だ。

素で彼はやっている、良く考えてみるとこれからの変貌はその素質が最初からあっただけのような気がしないでもない。

「いや、趣味ですが」

「凄いや、どんなハードルかな。と言うか用意された年齢のハードルが既に無茶苦茶だよ」

「まあ、冗談ですよ最低でも後十年は必要ですけどね」

ようやく彼がガチである事を理解してのだろう、彼女は否応なしに感じるいやな空気を払拭しようと、努力するのだが軽く准将はスル―。

「さて、そんな事はどうでもいいですが、ここ最近広報課から転属になるかもしれないんですよ」

「へー、もしかして司令部にも行くんですか。准将の功績なら当然ですが」

「いやと言うか成るかもですし、司令部にも行きませんよ。左遷されると思います」

結構軽く言うが、英雄を左遷すると言う行為がどれほど彼が使いづらいかを証明するものであったのは間違いない。

だがこの場合は違う、准将が今からの発言がそうなる事は間違いない確信した発言だった。

もしこれからの准将の行動に左遷などのリアクションをとれば、保身を考えた管理局の上層部や彼を嫌う人間達が、准将を左遷したり首にしたと言われてもおかしくない。

特に一般の人が管理局に陰謀論を唱える証拠には十二分になるだろう。

そして管理局に対する不信感を煽るには、丁度いい代物であるのは間違いない。

「それ一大事じゃないですか」

「いやそうでもないですよ。どうも僕の雲行きが怪しいので、開き直るべきかと思ひましてね。と言うよりチヨウソウさんが言ったんじゃないですか、躊躇うな拳は振りぬいてこそその拳だって」

丁度三十分前の話だったりする。

チヨウソウは准将の言葉を聴いて、もしかして気でもあるかと思つたがそんな事は一生無い。

鞆から取り出した、紙の書類を目の前に用意する。ちなみだが准将が紙の書類を好むのは、ぶっちゃけると偽造などしていないための証明である。

そして何より、証拠として残すにはこれほどきつちりと説明できるものも無いからだ。本人の直筆ともあれば、どういうものか理解の出来ないものはそうはいない。

後准将の個人的趣味だ。紙だとなぜか情緒があるらしい、多分だが書類を提出すると言う動作が好きなんだろう。

「准将さんなんですかこのスキャンダラスな感じの書類は！！」

「いやだから貴方の言うとおりに、拳を振りぬいてみようかと思ひました」

「これ振りぬくとかそう言うレベルの話じゃないですって、なんですかこの一番まとまなのが本局幹部の不倫って最悪すぎますよ」

彼の用意した書類はそれは悲惨なものだった。

実はこの書類の中に保管課の記述もあったのだから准将がどんなレベルの情報まで掘り出していたか想像するだけどえらいものである。

「さて本局のスイセン、ナガソウさんの情報です。ここ二年ほど浮気をしていますねこの人、ここ二年ほどの情報を見る限り秘書のゴジョウさんでしょうか、一応証拠写真も出揃っていますが、このスイセンさんのロリコンプリは尋常じゃないですよねチヨウソウさん」「ふらないで、それ首飛んじやうから、それに答えると私の首飛んじやうから」

「あつはつはつは、まさかこの程度で下の者の首を切るなら管理局って言う組織は利権構造の塊じゃないですか」

今准将は確実に釘を打った。

これで彼が首になれば管理局は、そう言うものだという情報が無意識に植えつけられる事になる。

それを狙ってやったのかは、判断しかねるところではあるが、これから先の准将を見る限りガチだろう。

「あのとちらにしる出世遠退きますよ」

「もう准将だしこれ以上は出世もしたくないです」

君は二十前に准将だもんな。

「私の出世まで遠退くのですが」

その被害者は溜まったものじゃない。一応彼にこんな発言をさせたのは彼女が原因だが、理不尽すぎるだろう。

躊躇っていた准将の背中を押すことがどんな事になるかなんて、
実際この当時の人間は知る由もなかった。

「それはともかくどう思いますこの不倫男、僕の調べじゃスベルと
言う人や、マリルと言う人、後六人ほど同時にやっつたらしいです
から論外だと思いませんか」

「いやいや、私達の直接の人事権をもっている人をこれ以上掘り下
げるのやめません。これ一応准将のファン以外にも結構な人が聞い
ているんです、もういたる所がてんやわんやですから」

「何を言っているんですか。誰もが驚くようなネタを用意しろつて
言っつたから用意したんですよ。ただ公開するには困る内容だった
ので、躊躇つてたらチヨウソウさんが背中を押してくれたんです。
頑張りますよ僕は」

きらきらと輝く目は、世俗で汚れた彼女には色々なダメージを与
えるものであつたのは間違いない。

「見ないで、そんな目で見ないで下さいよ。そしてそんなに頑張ら
ないで下さい。と言うよりなんで私を首謀者みたいな扱い方するん
ですか、そんなダイレクトボール欲しくくないです」

「そんなつもりは無いんですが、それより他のは機密レベルが高
すぎて公表できないな。折角調べたのに、どうしようかチヨウソウさ
ん」

「私に引き金を引かせないで下さい。どれだけ私を首謀者にしたが
つてるんですか」

准将は目の前で何度も思索する。

首を傾げてみたり色々としている、多分悩んでいるのだろうが、
ラジオの癖に異様な空白が出来るのは少し問題じゃなからうか。

その度に胃が縮むのは、彼以外の人間である。だが公的放送であ

るため、放送停止が出来ないのだから困った話である。

チョウソウは、チョウソウで、今日の前の男に引き金を引かされようとしていて涙目である。

「そうそうその浮気男ですが、どうやら管理局の公的資金を横領しているという疑いもあります。と言うか確実です。ねこれ、ほらこの書類見てくださいよ」

「うわー凄い量ですけど。貴方はこの人に何の恨みがあるんですか、ここに三年の行動が完全にデータ化されて残っていますよ」

「違いますよ。恨みなんてものはありません、強いて言えば昨日分別するべきゴミをしていなかったぐらいです」

そんなのでここまでされるのか、チョウソウは嫌でも背中になやな汗を流した。現在進行形で背筋が寒いだろう。

何より驚きはその資料を一日で用意した彼の手腕だろう。流石である、Sランクの情報処理魔術師だけのことはある。

「なんですかそんな事で行なうことじゃないですよ。プライバシーの侵害どころか陵辱とか、制圧とか虐殺といったレベルですよこれ」
「え、だってさ、悪い事してこの世で生きていけると考えているこいつが悪いだけだろう。それに本人からも許可を得ているよ僕は、だって当たり前だろうそのぐらいの礼儀は心得ています」

広報課ですが貴方の行動調査を行なってもよろしいでしょうか。許可するのであれば、音声許可と書類許可を出してください。

まさかここまでされるとは思わなかったのだろう。軽く許可を出してしまっただの。

「って本当に許可もらってるし。声紋照合とかも間違いないって事

は、合法的にプライバシー陵辱行なってるよこの人」

チヨウソウの叫びが、あたりに響き渡る。

最早ラジオ番組としては無残な代物に変わってしまったが、この日管理局広報課ラジオ「どの処理が好み」は、最高の視聴者数を獲得する事になる。

「もしかして私はとんでもない人の背中を押ししたのではないだろうか」

後に彼女はそう語るが、遅すぎなんだよ。きっと誰もがそう思う事になるは間違いないだろう。

准将の回顧録にもこうある。

『今の俺を作ったのはチヨウソウとバソウと言う人物だ。あの人のお陰で俺は、あの課に出会い組織を設立する事を考えたんだ』

なんて事をお前はしやがったんだ。

二章

何気ない 言葉一つで この世界 みんな驚く これ才能か b
y カソウ

椅子に座って不機嫌な顔をしている准将とスイセン総務官、二人はにらみ合うように椅子に座っていた。後准将の隣にはチヨウソウがいるが、彼女は顔を青くさせプルプルと震えている。

この頃は真面目で、スイセンの行動さえ生来の生真面目さから来るものであったのだが、多少潔癖が過ぎたのだ。それでもこれをばらすべきか心のうちに納めるべきか、必死に悩んでいたのだが隣のチヨウソウが背中を押した。

だがこう言うタイプは一度動き出すとどちらかが死ぬまで行動しかねない。結構周りの被害を省みなかったりする。

拳とは振りぬかなければ拳とはいえない

准将の生涯を支える言葉になるのだが、取り敢えず賽は投げられたのだ。

最も今ここで准将に査問をかけようとしている人間は、仕事以外の面々の方が多い、どれだけの人間が准将に心臓を掴まれているのかわからない情況だ。

「私に恨みでもあるのか、君の所為で私の人生はおしまいだ」
「いえ恨みなんてありません。後ろ暗いところを用意して人生を歩んだ貴方の失態です」

と言うかなんか准将真面目でも真面目じゃなくても変わらない気

がする。

それより真面目な分、色々融通が聞かなくて性質が悪くなっていた。実際仕事も真面目に行うし、礼儀も正しかった。

だが不正には鬼のように厳しすぎる。それこそ准将がスイセンを見る目はゴミどころか汚物である。

「そう思うでしょう、その辺の盛りのついた動物じゃないんですよ。女性的にもこんな男は制裁があつてしかるべきでしょう」

「って、何でこのタイミングで、よりもよつてこのタイミングで、私に振るんですか、この私に対する悲劇の神の一手は」

ただ准将は女性の意見を聞きたかつただけなのだが、空気が読めないのはこの頃から実はデフォルトだったりする。

真面目で素直ないい子であるが、言い換えれば誰にでも染まりやすく。人の意見は全て良くも悪くも吸収して成長する類の人間だったのだろう。

「ほら見てください、貴方の行なつた行為は女性をこうまで憤慨させている。仮にも幹部である貴方の行為がどう言う物か理解できましたか」

「だがそれを公で晒す必要がどこにある。このお陰で私はこれから先、ミッドチルダで生きていくことは出来ないんだぞ」

「自分の行なつた罪を悔い改めるところから始めてはいかがです。キッチンと更正プログラムを受けて、猿でもわかるその発情振りをどうにかすれば僕はいいと思いますよ。それで管理外世界に引っ込んでください、少なくともあなたはそれだけのことをしている」

そもそも彼が調べて情報を晒す事自体が、最初の取り決めの時から決まっている。スイセンは准将が、所詮前線で功を立てて出世したと思つているようだが、彼の本分はむしろこう言つた事にある。

スイセンのした事は、今ここで口に出すような問題じゃない。本人が既に認めてしまっているのだ。勝手に公開してくれればいいよと。

「そもそも貴方が承認した事だ。前線からのぽつと出から取材だからと甘く見すぎた、貴方の失敗でしょう」

キチンとその旨を記した書類を彼は、目の前の男に突きつけた。ぐうの音も出ないだろう、何しろ直筆で声紋称号も可能。

「ありえない、なんでただの准将が大将クラスの人間にここまで暴言を吐いているんでしょうか。上官侮辱罪に当たるんじゃない」

「それは無い、僕は言われた事に答えているだけ。しかも事実に乗っ取って、そして間違いを正しただけ。侮辱には当たらない」

悪辣だった、これでもかと言うほど容赦なく彼は、上層部の首を刈り取りに来た。

「うわー言い切ったよこの人」

あくまで真面目に言い切り、これを否定したところで准将がまたばら撒くだろうからそれも出来ない。相当の侮辱をしても、実際のところ不利になるのは目の前のスイセンや他の重役たちである。

チヨウソウは准将の発言を聞いて、齒噛みする管理局の柱たちをぐるりと見るが、誰もが苦渋に染まっていた。

下手に査問すればこちらの首が取られることを理解したのだろう。

「不正をせずに管理局が守れないような状況なのかもしれないが、浮気への公的資金横領をカソウモヤソウとチヨウソウトバソウ

が許す事は無い。スイセンさん自分の行なった罪の釈明もキチンと行なえないようなら、管理局の柱の一人をへし折るぐらいのことは僕はしますよ」

「だからなんで私を共犯にするですか。と言うか本当に私は関係ないのに、なんで他の人たちも私にそんな視線向けるんです」

それはカソウが怖いから弱い奴に向いただけである。

顔を真っ赤にさせ浮気フィーバーは、体を怒りで振るわせ続ける。今ここで彼を怒鳴りつけても結局はもつと理解できない被害を撒くだけだと判断したのだろう。

それは間違った行為じゃない。

「返事も出来ないのか!!」

だがそこに准将は食いついた。と言うかなぜそこに食いついた。

「いいか、チョウソウさんはお前みたいな浮気男が嫌いなんだよ。

上からって返事の一つもできないなんて事、無礼千万にも程がある」

「次ぎ振ったら殴るよ、確かに浮気男は豚だけどさ。あの人も豚みたいな顔しているし、削岩機にかけられた様なひどい顔だけどさ。

そりゃね心の醜さは顔に出るっていうけど、あのシヨッキンゲン豚面は、豚にさえ失礼な造詣暴力だよ」

酷すぎる。准将でさえ言葉に詰まる暴力だった。

正直に言えば、ここまでカソウに振られ続けていい加減に逃げ場が無いことを理解したのだろう。

開き直るしか彼女の心の安息はなかった。

「しかも管理局の資金を横領するあたり。心の方はもつと醜いのは

間違いないだろうけど。女につき込む金があるなら整形に、つぎ込めばいいのに、正直見ていて吐き気がするよね視覚破壊専用の顔って感じだよ」

「え、あ、そう、で、すね」

無残だった。准将より酷かった。

彼女がファイバーに向ける視線は、ゴミ豚よりも無残だっただろう。

「大体、顔からして女を金か権力でしか変えない類の豚だよな」

この人自殺するかもしれない。

屈辱のあまり涙を流している、浮気をした不正も働いた。だがここまで言われるほど彼は悪い事をしたのだろうか。

それでも管理局の為に身を粉にして働いたのは事実だった。けれど一度の失敗が彼を生きている価値の無い蛆に変えてしまったのだ。

査問と言うよりここに基本的人権は消失した。

なんともいえない空気が流れる。だが一人だけこの空気が理解できない男がいた。チヨウソウの暴言からいち早くリカバーした彼は立ち上がる。

「さて、お昼の時間ですから一時休憩と言うことで」

何が変わっても基本は変わらない准将の発言が、このいい知れない空気を取り除いた。

ここで正気を取り戻したチヨウソウは、自分の命の危険をようやう感じ取るが、午後の査問はなくなる。理由は一人の心神喪失だ、殆ど再起不能レベルの暴言を吐かれたのだ。

「私言いすぎたのかな」

「少しだけですよ。だって、怒ってなかったじゃないですか、僕も驚きましたけど妥当なんじゃないですか暴言としては」

既に不適切所かそれこそ名誉毀損とかそう言う類の罪に問われてもおかしくない。

「けどチヨウソウさんのお陰でわかりました。暴言と言うのはあんなレベルでいっても許されるんですね。もっと勉強しなおします」

「いや暴言の勉強しなおされても困るんだけど准将」

こうやって改造されていく准将。

どちらにしるスイセンの最後っ屁は、准将にあと二十五日の猶予しか与えていない。

けれど彼らはまだ気付かないのだ。

何しろ、懲戒免職以外の選択肢は無いと思っているから、再就職先を探す事が大切だと思っっていたりする。

「しかしこれはどうしたらいいのだ」

レリアスは一人頭を抱えた。スイセンのことじゃない、准将が用意した書類である。その中にはかなりの不正の事実が書かれてあり、その信憑性どころか事実しか書いてないのだから、対応に困るところである。

その中の一つの書類が、彼にとっては頭痛の種になっていた。

『時空管理局 最高評議会所属 対魔導師無力化対策質量兵器保管課』

正式名称で書かれているだけではない。その保管庫の在り処と予想される場所には、地図で印が付けられている。そして予想される質量兵器の量、また最高評議会の居場所など。

全て間違い無く書かれてあった。

たかが准将にばれていい機密ではない、ほかのどれより一番不味かったのが保管課の内容だ。

この能力、簡単に処分するには惜しい能力だった。

何より自分から手を出すのは痛い目しか見ないのは核心出来た。

仕方なく彼の人となりを聞くべくドソウを呼び出す。それまでどれだけスイセンが喚こうとも、彼を動かす事無いだろうし。懲戒免職の恐れも無い。

資料を評議会に送り、深く椅子に座ると大きく溜息を吐いた。

「なんなんだあれば、合法的テロリストと変わらないにも程がある」

その全ての資料を彼は合法的に手に入れていた。

ただの噂のほすの保管課の情報さえ、どこからか資料を集めてきたのだ。しかもその資料さえ合法的に、どう足掻いても罪に問えないのである。

暗殺などの手段を考えて見るが、なんか死にそうになくてレジアスとしてもどうしようもないと判断した。

あとは最高評議会に任せるだけだ、出来るだけ係わり合いになりたくないとは彼は首を振って、他の人間に彼を丸投げしてしまった。

「そうそうチヨウソウさん、ある情報を調べる時にチヨウソウさんの名前を使ったのでもしかしたら、その事で呼び出されるかもしれないが、僕は手伝えないので頑張ってくださいね」

「ってまた最悪のタイミングで振ったな。どんな恨みが私にあるんですか」

こんな事を言い合う二人の合法テロリストを放置するなどと言う彼らしからぬ手段を取ってしまう。

まさかこれが後々彼の後悔の一つになるとは誰も予想し得なかった。

そしてまさかチヨウソウまでもが、合法テロリスト扱いされるとは彼女さえも思っていなかっただろう。

三章

私って 何でこんなに ゲロ扱い 裁判しても なぜか無罪に
by 未来の准将の被害者

「オラ、田舎においてある子供たちがいるだ。後生だ、オラを村に返してくれ」

「知りません。この三年間で貴方の必要性がさらに上がりました、農業よりも貴方がするべき仕事をしてください」

聞きません、准将の言葉なんて聴きません。

再会そうそうリメンバーゲロとのたまわれた彼女が、准将の言葉を聞くはずがありません。

「オラそんな仕事知らないズラ。どこで貴方は誰ゲロか」

「私にそんな言葉を吐くのは貴方だけです。それと次それ言ったら本気で拳入れますから忘れないように」

それだけ言えば准将が喋るわけも無い。

基本はビビリであるのは当然なのだ。いいかにも小作人の風体をしているが、この状況は実際彼の予想したものではあったのだろう。彼女との間合いを計りながら魔力を高めていく、ストレージデバイス ヨウシキ「ワシキ」レイトを構えた。

馬鹿魔力過ぎる彼にはカリムとて手出しできまい。

「仕方ないなゲロリメンバーよ。我が力受けて消え去るがいい」

「甘いですねカソウさん、私が貴方のような無意識型テロリスト相手に何の策略も用意しないはずないでしょう」

そういつて彼女は畑に背を向けた。それだけで彼の魔法は全て停止した、准将は涙を流してデバイスを地に落とす。

准将に攻撃できるはずが無い、それは三年の月日を賭けて作り出した子供だ。

「あくまめ、ステファンやジョセフを殺す気か。聖王教会はそんな悪魔をトップにしようとは画策しているのか」

「いえ別に私はもう、カソウ対策課のトップですよ。いいですか質量兵器より、貴方の方が危険だと判断されているんです。ちゃんとした死体を確認するまで、誰一人貴方の死亡なんか信じないんですよ」

折角平穩に生きようと努力した准将に、カリムは更なる鉄槌を下した。

「なんて世間体の悪さだ。俺はただサボりたいだけなのに」

「ええ、正直な話このまま農業をやっている貴方なら特に問題は無いでしょうね。ガジェットたちに仕事をさせているとは言え、完璧に農作業用にカスタマイズされていますし」

スカリエツティも思いもしないガジェットドローン 農作業用カスタムズ 彼に見せたら泣くと思う。

准将はあきれたカリムにすがりつく。

「おねげえだ、オラは農作に従事していきっていくだ。おねげえだから静に暮らさせてくれ、お願いだゲロリアン」

かなりマジのお願いのはずなのに、軽く准将は蹴り飛ばす。

空気を読まないどころかここでもやるかお前はといった様子だ。

「ちょっと待ってくださいいなせそこで私の名前がつくはずのところ
にゲロリアンなんて名前が」

「だってあなたさまは、教会騎士ゲロリアン＝マクシミリアンさん
でしょう」

そして誰だ。

原型がなさ過ぎる。アぐらいしかあってないんじゃないだろうか。

「あなたは何年も過ごした同僚を忘れるんですか。それ以前に私の
イメージはそれだけですか」

「そして貴方の番犬が、確かシャツハトルテだったような」

論外すぎる。と言うかなぜそつちの方は覚えているのだろうか。

「俺は恨みだけは忘れない男です」

「だったら余計私のほうは覚えているでしょうが普通は、何で私を
覚えていないんですか」

「いえ、あなたの顔を見てもリメンバーゲロしか浮びませんでした」

この後、ブレンバスターを決められる准将はカリムの成長の恐
ろしさに怯えたとか何とか。

「そんな夢を見たんですよ」

「准将気持ちいいぐらいに病気ですね。ラジオにゲロってそりゃ無
いでしょう」

あんな暴露を平然とやらかしておきながらいつもの様にお仕事を

している准将。

フリートークは彼の夢の話から入っていた。また前のようにさらに問題発言を吐くんじやないかと、みんな戦々恐々としていた。真面目に仕事するなど厳しいお達しを受けたため、自粛しているだけだ。

前のような発言をされるぐらいならゲロのぐらいの言葉許されるだろう。

「けど僕はあんな不真面目じゃないですよ」

「そうですね、准将は人三倍ぐらい仕事しますもんね。けど潜在意識はそう言う事を思っているんじゃないでしょうか」

「やめてくださいよ、本局のヤマシロ提督じゃないんですから。あの人は前線任務を受けるのがいやだからって、書類操作までしているんですよ。証拠もありますからね」

びしりと空間が凍った、当たり前のように紡がれる准将のダイナマイト発言。

爆弾じゃないのはその時の趣です。

「また私を巻き込むかこのお人は——」

凄い悲鳴が巻き起こった。

「え、こんな事管理局の誰でも知ってる事でしょう」

「今の今まで初耳ですよ。と言うかそんな証拠を当たり前のように用意しないで下さい、貴方なんて人は広報じゃなくて公安に行ってくださいよ」

確かに大活躍だろうそれこそ八面六臂をそのままに体現できる。

大暴れにも程があるだろう。異動届を出せばすぐにでも来てくれと言われるだろう。

「いやですよ、僕は仲間をあげつらう奴らが嫌いなんですよ」

「てめえ鏡取り敢えず見ろや、お前のやってる行為がそうだろうがわかってんのかお前」

「だから堂々とやってるじゃないですか」

そう言う問題じゃない。公安なんてものは元々身内から嫌われてなんぼの世界だ。

こういうことはあって当然なのだが、彼もその標的にされるのは必然だ、それ以前にこんな発言しているのだからにらまれて当然である。

「そう言う意味じゃないです、何でそうありえないボケを平然とかませるんですか」

「こういう情報が駄目なら、どんな内容だったら許されるんですか。実はレジアス中将が女性である言う情報はどうでしょうか」

「あのあの顔面要塞がどうやって女性になるのか教えていたくださいんですけど」

彼女の発言を聞いて准将は首をかしげた。

「いや冗談に決まってるじゃないですか。僕だってそんなこと言う筈ないじゃないですか」

「准将あなたはどうでもいい事だけ冗談なんですな」

しかもそのどうでも良いのさえ、彼の口から出てくると事実のように聞こえるからさらに劣悪だ。

疲れた表情を見せるチヨウソウと広報スタッフ達、それならいつ

そ准将を出さなきゃいいのに、その辺りは上からの命令が取り下げられない限り出来ないのは下のつらい所だろう。

と言うか、上もあれだけの爆弾発言をする人間を放置しているあたりあまたが平和すぎる。それは准将に突っかかる何されるとかわからない恐怖心もあるのだろう。

「じゃあ次は誰の不始末をまきましようか」

この後チヨウソウに殴り飛ばされ意識を失う事になる准将だが、また夢の光景を見たとか何とか。

取り敢えずこの放送が流されるたび、心の臓を冷やす事になるのだが、不正している奴らが悪いだけだろう。

「お願いですから准将、私を巻き込まないで下さい」

手を真っ赤に染めて涙ながらに叫ぶチヨウソウの姿は、なぜか管理局の中でも評判になっていた。

いくらなんでもやりすぎだが、こういった彼女の攻撃が准将に世間体を植え付け、ビビリに変えていったのだが、こういうことは当の本人は気付く事は無いのだろう。

最もこれから先も彼女の改造が、彼女の首を絞める事になるのだが、今更過ぎてどうしようもない。

「何で僕がこんな目に」

だからそれは全てお前が悪いのだ。

四章

ありえない まさか私の 一言で あんな悪魔が 出来るなんて
！！ by 鳥葬的な人

「そついえば准将つて、簡単に不祥事見つけてきますけど偽造とか
つて出来るんですか」

「え、ああ、そりゃ出来ますよ。誰でも出来るでしょう、けどそんな
無粋な事しませんよ」

「えー准将馬鹿でしょう。つかえる手段は全部使うのが本当の戦い
と言つものです、遊び心は必要ですが、戦いともなれば本気を出す
のが相手に対する礼儀でしょう！！」

またあんたはろくでもない事を准将に吹き込みおつて。

感銘を受けたのか、准将は首を上下に振って目を輝かせる。

「なるほど、戦いともなれば全力手相手を叩きつぶす事こそが寛容
であるということですね」

「そつ言つことですよ准将」

「そうか、なるほど、そうですね虎はウサギを狩るときさえ全力
を尽くすんですから」

何もいう必要が無いかもしれないがこれは、ラジオが終わり打ち
上げを待つ彼らの時間つぶしの会話だった。

彼女の言葉を体の染み入らせるように、何度も深く頷く。

チヨウソウはそんな彼の姿を少しばかり嬉しそうに見ているが、
いまだ自分の失態にまだ気付いていないようだ。

「そうか手加減をしちゃいけないのか。なるほど、なるほど、なる

ほど、なんと素晴らしい言葉でしょう」

准将の悪いくせに拡大解釈と言うのがある。

今彼の言われた事にあるファクターを加えて彼は聞いているのだ。どんな時であつても手を抜くというのは、失礼と勝手に彼は思つてしまう。

裏工作さえその一つの手段だと彼の認識させてしまったのは、実は普通の男より男前、四十代男の渋さを感じさせる事の無いチョウソウである。

きつと准将を後に知るものはこういふだろう。

あんだ、なんて事をしてくれたと。

「そうですね、つまり今まで手加減していた僕が相手に対して失礼だったと、すいませんだからみんな不快な顔をしてたんですね」

「え、なにその、見当違いの剛速球、と言つか准将手加減してたの！！」

「ええ、本当は彼らの名誉を守るつもりでした。ですが、先ほどの言葉を聴いては、黙っていられません」

黙っているとチョウソウは本気で思つただろう。

しかしながら自分で発言した手前、撤回するにはあの准将を論破しなくてはならないのだ。

無理である。

准将は人の話は聞く時は死ぬほど聞いて、全部吸収するくせに、聞かない時は馬耳東風どころの騒ぎじゃないからだ。

無意味に極端すぎるのが彼のいいところだったり悪いところだっ

たり、どっちだろう？

「あの、本気と言うのはどのぐらいのレベルでしょうか」

「社会復帰不可能」

鬼だ。ましてやサボりたいと叫ぶ准将じゃない、ある意味一番動いていた頃の准将だ。

「ちょ、ちょ、ちょっと准将、そのトリガーを引いたの私ですか」

「そんな事ありません、ただ背中を押してくれただけです」

「駄目です、もうこれ以上やってはいけませんよ。既に相手は社会復帰不可能なんですよ」

チヨウソウは必死に止める、少なくとも自分の所為で悲劇が起きるだけは止めたいらしい。

それにこんなあほな事で上層部に目を付けられるなんてお断りだ。

「え、あ、そうだったんですか」

「ちょっ、え、ええ、なにそれ、なんですか、あれやっちゃったって感じの発言は」

彼女のリアクションを確認して、准将は遠い目をした。

「戦争って、準備が最も大切って知ってますか」

「まあ一応管理局員だしそれぐらいは」

「武器は多いほどよくて、人員は多いほどいいんです、数こそ力なんです」

何が言いたいのが微妙に遠まわしすぎた。

だがいやでも理解させられる。彼がこの不倫発言をする為に、用

意した兵站は、相当数を誇るのだらう。

「……戦争とは火力こそが勝利の鍵ですから、殲滅するべくたった今撃つちやいました」

「馬鹿だ馬鹿すぎる、管理局の機密情報とかどうするんですか。首が物理的に飛びますよ流石にそれは」

「そう言うときにいい言葉がありますよ、万事塞翁が馬に在らず！」

それはどうにもなっていない。

「意味の分からない事を言っていないで、対策を考えてください」
「そうですね、事を起こされる前に辞任に追い込むとか、事を起こされる前に再起不能にしてやるとか、事を起こされる前にあらゆる所に飛び火させるとか、事を起こされる前に本人を殺害するとか」
「対策じゃなくてヤケクソのカウンターパンチじゃないですか」

取り敢えず准将は全部できる自信があるらしい。

真面目とか言っておきながらなんだが、平然と殺害が出てくるあたり、こいつ根本的にクズである。

「大丈夫です確実に出来ます」

「それはどちらにしろ、殺人や相手からのカウンターパンチが恐ろしいんですけど」

「大丈夫です、私は」

一度空気を凍りつかせて解凍させる。

秒間六発と言う拳が准将を地面に伏させた。さらに襟首を掴み彼をガクガクと振り回す。

「どういふことかな准将、私はつて明らかに私に被害来るよねそれ。それとも何かな、君のような人間外トラブル発生装置が私のような善良な一般人に迷惑をかけるというのかな。」

首が二回ぐらい首が飛んだ方がいいんじゃないかな、人間としては既に劣等人種の癖に、優劣種の私になに豚が迷惑をかけてるの」

酷いと言つかチヨウソウも准将も根本的に人間のクズである。

さらに一撃拳をぶち込み腹を蹴り飛ばす。

「僕がなにをしたつて言っんですか」

「しすぎたのが悪いんですよ。このうら若き乙女が何でどろどろとした政治の分野に飛び込まれるんですか」

「大丈夫です貴方ならきつと、地上本部指令を殴り倒せますつて」

一応准将なりのフォローだ。

当然だが意味の無い彼の発言に彼女の怒りがまた限界に達しようとしたが、そんな時彼女の端末に連絡が入った。

至極全うな理由でだが、困った事にそれは彼女にとっては最悪の一言を告げる者になる。

准将がやらかしたと、しかも今回はいつもの比じゃ無いと言っ。

「管理局不正証拠リストが流れてきたつて、准将なんでこんなありえない核爆弾を落とすんですか」

「いえ僕は元々あったものをコピーして、渡しただけですよ。何とかゲロツサとか言っ微妙に幸薄そうな人物に垂直落下式ファルコンアローを決めたら偶然手に入れました」

「それは強奪と言っんです。と言っかなんで、よりも寄つて査察官にそんな事をしてるんです」

首をかしげる准将、なんとというか本当に何も考えていなかったらしい。

あの芸術的な偽装技術はどこに言ったのかと思うような、そんなボロボロな情報収集である。

「ああ、ちゃんともみ消したから大丈夫ですよ」

と思ったが、流石准将だ。もう真面目とかそんなフレーズを使いたくない。

むしろ行動的とか、やりすぎとかそんな感じだ。

「そんなに気にしなくても大丈夫ですよ。査察官が、そんな書類を取られたことを公表する事なんてありえませんか。部署が許しませんよそんな失態、どうせ今躍起になって犯人を捜して適当な罪をでっち上げようとかしてるんですよ」

「准将なら捕まるだけの罪ありすぎでしょう」

だが困った事に証拠が無い、目撃者も何も無いのだ。

今回ばら撒いた事で判明すると思うだろうが、その辺りは准将だぬかり無い。

実は未来よりも管理局が色々と危ういのだが、これによる被害はまだ加速していくのだ。

「けどもう止まれないですよ、犯した罪よりも善行を積みましょう。まだ撒ける不正は山ほどあります。これを器に管理局の大掃除としましょう」

「何でそれに私を巻き込むんですな貴方は、こんなことしたら管理局の人材不足にさらに拍車が」

「大丈夫です、人生万事塞翁が馬に在らずですよ」

彼に引つ張られながら悲鳴を上げるチヨウソウ。

最早彼女は逃げられない、この歩く合法テロリストを止める事など彼女には出来ないのだ。

これから先のカソウ准将の暴走は管理局に対してダメージを与える事件となる。

DS事件進もつが戻ろうが最早地獄と言う事件が始まる。

「それ言葉の意味違つてしょうがー」

総勢250名の幹部クラスの人間の首が尽く落ちる事件へと繋がるのだが、准将本人は一切覚えていない。

最もこの事件こそ准将がああ課に行く事になる最初の原因である事件である。

四章（後書き）

気が向いたらあらすじを変えてみる人。

五章

DS事件終わりました。

准将のダイレクトアタックやらで、悲惨な事を迎えたDS事件。地上本部のお偉方の首が面白いように飛んでいった事件は、管理局の連綿と続く歴史の中における最大の汚点として後世にも語り継がれるかもしれない。

と言つても、本人達の依願退職と言つ形をとつた為か、思ったよりも速いペースで騒ぎは収束していった。

その悲惨な悲劇を起こした男は、原因と言つ事もあつてその後始末に借り出されていた。その出向も終わり管理局にまた平和が訪れる。

仕事は出来るので人十倍ぐらい働き、それは獅子奮迅の活躍を見せていた。この事態の原因の癖に、彼の力によって大きな騒動もななく事態が収束するあたり、二三回殺されても誰も怒らないんじゃないだろうか。

「さて、皆さん帰ってきて欲しくなかつた英雄カソウ准将が出向から帰ってきました」

「前線とかで指揮してました、途中から面倒になったので裏工作ばかりで戦つのをやめてしまいました」

軽く笑っているがどうやったらそんな事ができるのか追求したいところである。

自分の尻を自分で拭えるだけマシだが、笑つて言える難易度ではない。

「そういえば、あえて何も言わなかった人たちが苦労様です。目に余るようなことがなければ、同じ事はしないので気にしないで下さい」

「貴方はいつもこの広報課に何かしらの爆弾を置いていきますよね。と言っか少し口調変わってません」

「そうですか、多分前線の空気に当てられて、少し粗くなった感じがするだけですよ」

けれど管理局としてもカソウの扱いにはそろそろ困り始めていた。ある意味管理局が内部に保有する毒物だ。ある意味汚職をしていたりする人間の自業自得ともいえるかもしれないが、どちらにしろ恐ろしい存在には変わりはない。

けれどこれでもまだいるのだ、カソウが今回首を刈り取った上層部の人間は、純粹に組織を都合よく金を吐いてくれる財布かなんかと思っっている人間だけだ。

必要悪と言う言葉ぐらい彼は知っていた。

ある意味真の暗部ともいえる場所までは、手を出していないのだ。

まっとうな道を歩いていない者達には、これほど恐ろしい存在もいないだろう。

「准将のお陰で結構首になりそうでしたけどいい経験ができたと思っっておきます。もう、こんな事しないですよね」

「当然です、そして僕は今日。顔面フォートレスに呼ばれていますので、ラジオはこの辺で消えますね」

「そうでしたね、と言っわけでちよっとの出演でしたがカソウ准将の復活報告でしたー」

スタジオの外からも拍手が響き、一礼して准将はスタジオから出

る。

スタッフ達と軽い談笑をしながら、今後の予定を話し合いながら次の準備を始めていた。

着崩していた服装を直して、十分ほどの会話の後、地上本部に向かって車を走らせた。

それは後に教会に対してダメージを与える事になる車であるのだが、名前はカブと言うらしい。一体どこの原チャリだと言いたいが仕方ないのだろうか。

呼び出しを喰らっていた彼は、受付で話を通し指示された場所に歩き出す。

騒然としている地上本部、あらゆる意味でろくでもない男なのだ。准将と言う人間は。その中でも迷惑及び力を直接見せられる地上本部では人間扱いされていない。

地上本部では彼はまさに悪魔の扱いを受けていた、一年以上練られた作戦を却下し、個人行動の拳句無傷の勝利を実行する。

冷静に考えれば人間として扱ってもらえるなどと言うことは無いだろう。

最も功績と独断専行でプラスマイナスゼロと言ったところなのだが、彼の悪名は地上本部に轟いていた。

本当なら中將もおかしくないと言っていたカリムの発言は実際事実であるのだ。

最もそれを差し引くだけの悪行もあるのだから当然である。

准将は呼び出された時間より少し早くついたが、そのまま秘書に通される。

「よくきてくれた」

「カソウ准将呼び出しに参上しました」

取り敢えず敬礼だけしてみる。

ただ最近彼はこういう動作がなぜか面倒に感じてきていた。正義の守護者とも言われる男に対してさえそうなのだから、誰にだってそう思うようになってきているのだろう。

「楽しくてくれていい、取り敢えず弁明などはいいい。君がきわめて優秀な人物である事は理解している、正規のルートで取ったはずの情報に君の痕跡がないあたりで理解した」

「それで、何のようなんでしょうか」

「この資料について追求したいのだ。君の今までの実績からかんがみるにこれは確実な話だろう」

そうやって出されたのは、質量兵器保管課に関する准将の書類だった。

それをチヨイスされるとは思っていなかったのだろう。そもそもこの情報自体、最高評議会を通さなければ手に入る代物じゃない。

遠回しに最高評議会とのコネクションでもあるんじゃないかと、レジアスは聞いていたのだが、あまり准将は興味が無いようである。

「そうですね、あの人間やめた三つの脳みそは知ってますよ。そんなの管理局に入ったときから、だけど面識は無いですね」

「無駄に優秀で察しがいいのはありがたいが、一般の局員がそれを知る事が許されない事を知らないのか」

それは明確な脅しだった。こわもての顔から放たれる歴戦の英雄の放つ威圧は相当なものだっただろうが、准将は一度首肯する。だがそれはレジアスに対してじゃない。

「はあ、その取り敢えずそろそろ反論しますよ。あなたが僕の事を知っているように、僕は貴方の事も知っている。それが理解できたなら、脅しは控えてください。こちらも脅さなくちゃいけなくなりますから」

流石准将と言うべきだろうか、そろそろ完成形の形が見え始めてきている。あくまで脅さない事を対等な証だと言っているように見えるが、この男なら暗殺の前にそれを封殺する事でさえ実は可能である。

レジアスとて断じて無能じゃない、むしろ有能な人間だ。ただの無能が守護者扱いされる事は無い。

うつすらと笑みさえこぼし、レジアスの肩をぽんと叩く。

「もう僕達は同類じゃないですか、見てみぬ振りをしていただければ十二分ですよ。少なくとも貴方のマイナスにはならないはずです」

同類じゃないですかと、彼は笑いながら彼に告げる。

平然と犯罪者を放置しろと言ってくる。これがチヨウソウの調教の結果だ、手加減をしない准将はレジアスのここ十年以上の情報を既に集めている。

気付けば彼がその情報を提供した事になっているあたり、何をしたのか想像したくも無い。

要塞みたいな顔をさらに酷くゆがめて彼は震える。

「ほら、僕達は友達ですよ友達。握手しましようよ握手」

彼の後ろ暗いところを最大限彼は突いている。

レジアスとて本来であれば殺しておいても仕方の無い人間である彼がここまで彼の弱点に踏み込むとは思っていなかったのだろう。

脅しをかけて、行動を抑制しようと考えた彼だが、まさかここまですぐで攻撃的な人物であるとは思っていなかった。

先ほどまでの幼い准将殿ではない、触れなければ何の被害もなかったと言いつのに、自分から処刑場に殺されに来た犯罪者と変わらな

い。
「握手ですよ握手、僕としても味方がいないよりはいた方がいいんですよ。貴方のように力のある人との関係なんて特に欲しかったんです」

レジアスは震えた。本当にこいつは何者だと、薄ら笑いに恐怖心を煽られる。

だがまさかこの時、准将がお腹がすいたから、レジアスさんに奢ってもらおうと思っていたなんて事は知らない。

それ以上に彼が脅しに入ってから言葉は全て食事に対しての事であること自体、レジアスは生涯気付く事はなかった。

そして最後で台無しである。

五章（後書き）

男は女に問うた「あのさ君の名前なんだっけ」、その日一組の恋人が喧嘩別れする事になった（実話）

六章

もしかすると、私と言う人間は最も殺すべき存在を殺さなかったのかも知れない。　by 顔面要塞の人

「お久しぶりですユーノ先生、ちょっと仕事頑張りすぎて上に嫌われましたけど、どうにか教えを守って仕事をしております」

「そう、でもさ君は手加減を覚えた方がいいんじゃないのかな。流石に今回ののはやりすぎだよ」

「そうですか、けど僕の知り合いは手加減をするのは相手に対する最大の無礼だと聞いたのですが」

時と場合を考えると聞いたかっただけなのだが、この無駄に素直な性格は、周りの環境次第ではなくてもない人間になるんじゃないかと、いやな予感がした。

教え子は、彼の心配など放置して、楽しそうに無限書庫の司書たちに挨拶している。元々は同僚だ、強引に引き抜かれても彼はこの司書達に、大して先輩と言う意識がある。

最も英雄に頭を下げられる彼らは、むずがゆいものを感じてはいないだろう。

「その場合もあるよ、手加減をする必要がある場所も絶対あるから忘れちゃ駄目だよ」

「なるほど、そう言う場合もあるんですか。つまり手ごわい敵であれば慈悲など加えずすぎ放題しろと」

「え、あ、まあ、そう言う事かな。あまり弱い人にはしてはいけないよ」

基本ユーノの言う事なら何でも聞く彼は、当然のように元気よくわかりましたと返事をする。

彼はこの一言で自分の生徒が、まっとうな道に歩いてくれると信じていたようだ。

ただまさか、立場が上の人間に全て手加減なしでいい。

と言う訳の分からない不等式が出来るとは理解できなかったろう。この意識の所為で、彼は後にあんな風になる。

自分より立場の上の人間に媚び諂う事の出来ない様になってしまっただ。

ユーノ自身こんな発言で彼が、慇懃無礼な男になるとは思わなかっただろう。そもそもこんな適当な発言で人が、変わるなんて誰も思いやしない。

「なるほど弱いものには手加減をすることも必要と」

「そうそう、じゃないと無差別に弱者をいたぶる駄目人間になるからね」

ふと気になったのだが最早准将は、人格形成段階で何を間違っただろうか。

ヒントは結構暗い過去があるといったところだろう。

グラナガン出身で両親共に健在でとても家族関係もいらしい、とても真面目な人たちで、厳格に准将は育てられた。馬鹿だったけど。

「なるほど弱者は優しく、強者は徹底的に、そうですね僕はイジメは好きじゃないです」

「そうだよ、そう考えておかないと君は酷い人になるよ」

ある意味これが最低限の准将の両親ではないだろうか。これが他の人間だったら、どうなったか考えるのも恐ろしい。

少なくともその人間は本局か地上本部のトップにはなっていたんじゃないかと邪推してしまう。

「それを守ればきっと君は真面目な人間のまままでいられるさ」

駄目だよ、チヨウソウのお陰で今ケミカルな化学反応起きてるんだから。

つまり今准将は、チヨウソウの発言＋ユーノの発言＋今までの人生〃今後の准将になるのだ。

いやだ凄く想像したくない。

「そうです、そうです、ちょっと最近仕事がきつすぎてどうしようもなくなってきたんですよ。それで先生にどうしたらいいのか聞こうと思って」

「えー、あのさ君の処理能力を上回る仕事って普通に労働基準に違反してるんだから文句言わないと」

「いえ、言えるわけ無いじゃないですか。僕より地位の低い人達ですよ。出来ませんよ」

なんて面倒な馬鹿だ。

先ほどの発言の手前取り下げること出来ずに、失敗したかとユーノは顔を歪めた。

けれどユーノを信じていると言うか、既に教祖様扱いしている彼の言葉まだかと犬のように尻尾を振っていた。

「そうかい、じゃあ仕事をさ分割できるようにしてみたらどう。総務にも取り合って人員を用意してみるとか、それで仕事を分散して

終わらせればいいんじゃないのかな」

比較的妥当な手段だ。仕事は皆でやれば楽になる方程式はこの辺りからできたのだろう。

愚直な馬鹿は本当に扱いに困るものである。

「そうですね、先生の言うとおりでした。ちょっと疲れてるんですね、最近寝る時間もあんまりなかったからこんな簡単な事が考えられなくなってますよ」

「そうだね僕も昔同じことして倒れた経験があるよ。君も体を壊さないように仕事をしないといけないからね。休み休み仕事をしないといけないよ」

「了解しました、じゃあ今からまた仕事を始めるんでまた今度御礼をしに着ますね」

そう言うつと簡単な会釈をして准将は走り出した。

多分総務に向かったのだろう、今の准将の仕事は少しばかり多すぎる。人員の出向を頼むぐらいの事はしてくれるだろう。

しかしだ、広報課の面子は准将を助けることはなかったらしい。当然である、彼らも准将の所為で各方面に対しての謝罪などをしているところだ。

彼らもそういった事は頼んでいるだろうが、准将の願いともなれば総務も動かざる終えないだろう。何されるか彼らだって怖いと思うし。

「一体なぜこんな事に」

レジアスは一人悲痛な表情をしていた。管理局のためとは言え彼も後ろ暗い男である。幾ら後ろ盾があるうとカソウ准将は少しばかり手強い。

殺されてもただじゃ死なないだろう事は理解できる。

最高評議会に相談するのもありかもしれないが、どちらにしろ彼らでは准将をとめることは出来ないだろう。

質量兵器保管課の事を知る男だ、そのままあの脳みそ達を殺すかもしれない。

准将に脅されてから二度激戦区に放り込んでみたら無血勝利を平然とやらかし、暗殺などは絶対に読まれることはもう確実だった。彼の情報収集能力及び使用能力は間違った方向に伸びすぎている。しかもそれがカソウ准将の名声を上げることになるのだからふざけた話である。

「どうすればいい、私はどうすればいい」

彼の苦悩は相当なものだっただろう。

どれを知られているかわからないのだ、人造魔術師の事かもしれない、戦闘機人のことかもしれない。

スカリエッティの事かもしれない、どちらにしるどかれ一つが公になればレジアスはお仕舞いだ。

しかしながら悲惨である、准将は実はレジアスのことを最初から売るつもりは無い。

こんな道化は予想外だろう、未来の准将ならこの姿を見て爆笑していただろうが、今の彼なら心の一つでも痛めるかもしれない。

動揺していたレジアスは鳴らされていたノックに気付かなかった

のだろう、扉の開く音を聞いて体をビクリと震わせた。そしてキッチンと敬礼をして、声が部屋に響く。

「どうもレジアス中将、一つお願いがあつてまいりました」

噂をすれば影と言うやつだ。

最も彼が着て欲しくない人間が、彼の眼前に現れるのだ。心臓に病気でも抱えていたら死んでたかもしれない。

「総務に頼んで広報課に人員の派遣を頼んだんですが、折角中将と知り合いになつたんだし優秀だと思ふ人物を推挙してもらえますか」

あくまでレジアスに対して下士官らしい態度を示す。

これでもうやくレジアスは自分の勘違いに気付いたのだ。この男は自分を売るつもりは無いと、ただ自分が敵対した人間の量を捌ききれぬ自信が無いからこそレジアスを脅したのだと。

彼は一方的に勘違いする。

そもそも裏表の無い准将は侮蔑する人間には徹底的に行なうのにそれをしないとすることは、敵意を抱いていない。

もつと言つなら、准将はレジアスの事を優秀な地上本部の長だと思つている。また今彼の地位に人を預ける事がどれほど危険かぐらい理解していた。

彼は必要悪と言う言葉を、自身の行為で知り尽くしているのだ。

レジアスの悪行がばら撒かれないのは、同類が今更傷を舐めあつてるのと変わりはない。

けれどレジアスは勘違いする。あくまで准将とレジアスは、どち

らもが必要な管理局における必要悪だと、二人の友人関係はそういうものだとは判断した。

「明日までに派遣する、後二時間もすれば通達が来るはずだ。職務に励んでいてくれ」

「了解しました」

そういつて部屋から退室するカソウ。

また一生涯の勘違いを深めていくのだが、この関係が彼の娘を救うことに成るのだから驚きである。

すんなりと自分の提案が通って気楽な准将は今日の仕事を終わらせると、定時で仕事から上がったらしい。

そしてレジアスもまた一人の強大な味方を手に入れた事を理解した。勘違いであっても、実際そうなるのだから世の中不思議である。

七章

銀河を七色の虹に染める、管理局麗しの美女プリティレジアスただいま参上。魔法のステッキ、アルカンシエルで、皆を虹色に変えてあげるわ byなんて事やっちゃまったんだ

仕事が減った代わりに仕事の難易度が倍になった。

結局のところ人員が増えても准将のやってる仕事は変わらなかった。それどころか眠る時間も無いほどに、彼は追い詰められていく。まさかそれが、自分の招いたものだと言う事が誰も気付かない。

「流石に、死にますこれ以上寝ないと僕でも死にます」

「って准将、ラジオ冒頭で酷い事言わないでくださいよ。リスナーが逃げちゃいます」

「いや明らかに労基に違反してますよね最近の仕事は、僕いい加減に死にますよもう六徹ですよ」

しかしながらランクSの情報処理魔導師が死にかけるってどういう状況だ。

実際そう思ってたチヨウソウだが、上から睨まれて色々な仕事を押し付けられているのだろうと判断していた。

確かにそれは事実だ、動けないぐらい徹底的に仕事をさせれば流石に、彼が動けなくなると誰もが思うだろう。彼はそれを実行されていたのだ。

通常であれば倒れるどころが放り出してしまっても問題ないレベルの量だ。

正直彼にこんな仕事を送り込んでいる連中は、なんでこの仕事が

一日で終わるのと本気で首をかしげている事だろう。

「いや本当に体がボロボロですよ僕」

「どこをどう見ても健全体ですよね准将は」

「僕は昔から体調の悪さが体に出ないと評判でね。熱が四十度超えても誰も気付かないで倒れて信じてもらおうような人間でして」

それは生物的にどうなんだ。

チヨウソウも流石にあきれた様子で苦笑いをした。最も一応人間だったんだこの人と。

「けど本当なら倒れてしまいそうな気がするんですけどね」

「僕の目算じゃあと三日が限界ですね。一応その前に有給でも取りますよ流石に過労死しますこのままじゃ」

だが上が許すとも思えない。

本当に過労死させてしまえと思っている人間も結構いる。

それだけ彼の行なった行為が、上の人間は彼に対しての准将が脅威であると認識させたのだ。

「あー眠い、今寝たら仕事が一」

「あのですねラジオ中にも仕事するぐらい追い込まれるって、広報課にそんな無茶な仕事ありますか」

「えーと、教導隊の訓練プランとか、不足人員の対策とかの書類もあるし」

課が違う。明らかに課が違う。と言うか部署が違う。

開いた口もふさがらないだろう、何でお前その仕事ができるんだと。最早チヨウソウの中で准将は論外の人だが、上の人間にいいだろう。

せめて広報課としての仕事を用意しろと。

「取り敢えず出来るんでやってる。それに広報課の仕事は最近僕一人で終わらせてますけど年でこんなに多いのか困りものですよ」
「そういえば最近、仕事が楽になったか思ってたけど殆ど准将がやってたんですか」

「一応僕のところに来る奴は全部してますよ。けどねー流石に皆さんの仕事を奪う事はできません」

ただ予想外だったのがこの人アホほど仕事ができる。
アホだから仕事が出来るといふべきかも知れない。

与える仕事与える仕事全部終わらせてしまうから、しかも一回終わるたびコツを手に入れて、かなり手早く終わらせてしまう。

だからこそ彼が動けなくなるほど仕事を与えてみれば、広報課かどころか広報部でも収まらず。他の部署の仕事まで与えなくてはならなくなってしまうのだ。

と言うか他の部署の仕事まで押し付けられるのだから、流石に文句の一つでも言ってもいいだろうと思われる。

彼に仕事を送り込んだ人間もなんで文句の一つもないのかひたすらに疑問だろう。彼ら自身やりすぎたと、冷や汗を流していた。

「いいんですかそれだけの仕事明らか、暴力じゃないですか」
「なに言ってるんですか。僕は准将ですよ、こうやって仕事を送ってきて、僕の力を試しているんですよ皆さん。また適正の有無を調べているはずです、若年で准将になった僕に対する上の配慮でしょう」

「なるほどそつちがあつたか」

ちなみに准将だろうがなんだろうが、こんなふざけた仕事しねーよとしかチヨウソウは思っていない。

だが誰も理解していないのだろうか、こんな風に仕事を与え続ければ准将が、その部署の事情を把握してしまう事を。

「それに大分管理局の内部事情を把握しましたしね」

そして准将は爆弾を放った。

資料をそもそも仕事をやらせすぎたのだ彼らは。

「そのお陰で無駄な部分がかかなりあることも判りましたよ。例えばある執務官なんかは明らかに、捜査費を流用しています。そもそも執務官としては無能ですね、試験の方はもう少しそういった能力も問うようにつくりにするべきでしょう」

「あのですねラジオで流してくれるのはまた困る内容じゃあないんですか」

しかし准将は首を横に振った。

「大丈夫でしょ、もうやめてるし。と言うか上のクビ切られた時に逃げてるし」

「あの首切り大惨事に、やめていった人たちですか」

あの事件だけじゃない、それに連動して着られていった人間を含めれば千名弱の人間が自主退職や懲戒免職で消えている。

ただくだくだと、書類の中身の説明をざらざらとしてみた。当然の事だが開示機密に値しないものに限定はしていた。

彼の痛いところをつこうとする人間は彼のあらを捜し出そうとするが、困った事に人の犯罪を見つける彼は、その逃げ道を知っている。その道を堂々と歩み彼らに隙など見せなかった。

「あとちょっと問題のある動きとかを言ってもいいけど。これは査察官とかにまわしておくかね」

「そうですねそれがいいですよ。いつもいつも大暴れしていると、皆に迷惑をかけてしまいますから」

ふむと一言言うだけで彼は特に何も考えていない。

今この放送を聞いている上の人間はいやな汗でも流している事だろう。

やべえ仕事送りすぎたと。

そして准将のラジオでの発言こそカソウ准将第二の事件、カソウ准将暗殺未遂事件の始まりとなる言葉であった。

突如として仕事が減りだした准将は、査察官と会う約束をしている場所に足を向けた。

准将の情報にハズレなどあるはずも無いと判断している彼らはこれを気にまた一斉介入をするつもりだろう。

だが同時に准将を煙たがっている人間がいなわけではない。

と言うか嫌っている人間の方が圧倒的に多い。

元々油と火程度には化学反応を起こせば危険な准将が公安と一緒に動く事自体がろくでもない話だ。

特に自分に後ろ暗い連中は当然であろう。

そして彼が今回その一番触れてはいけない所と手を組みかけているのだ。実力行使をしてもおかしくない。

「流石にこればかりは上の人も許してくれないか」

最初から暗殺されてもおかしくない行為を続けていたのだ。

そしてこれはある意味最高評議会の試験でもあった。レジアスは既に准将の事を告げている。

もろもろの事情が准将に対しての暗殺行為と言う方法とらせたのだろう。

准将はこの頃魔導師としてのランクは英雄になった時からかけられているリミッターがあるが通常でもAAAランクぐらいだ。

だが広報課にいるのだからリミッターをかけた方がいいとの判断から、彼の今のランクはBになっている。

ちなみにこのリミッターは昨日突然かけられたものだ。

あからさま過ぎて笑いしか出てこないのはどういう見だろう。

暗殺者達は音もたてずに彼に忍び寄るが、一応英雄と呼ばれるぐらいだそれなりに、

人の気配のするほうに逃げようとするが彼らがそれを許す事は無い。

「ちょっとこれは酷すぎる」

苦笑いするしかないだろう。ちょっとやりすぎたと反省しているのだろうか。多分そんなことは無い。

しかもデバイス一つ彼は用意していない。魔法は出来ないことも無いが、明らかに不利だった。

元々馬鹿魔力に明かした巨砲攻撃しか出来ない准将だ。こんなと

ここで使うわけにもいかないから、近接系の攻撃はキチンと覚えている。

デバイスの反応がするほうに向けて准将が走り出す。

「まあ四人しかいないしどうにかなるか」

いきなり近接戦闘に移るとも思っていなかったのだろう。射撃体勢のまま固まっていた暗殺者達の一人は准将にシャインングウィザードを叩きこまれてそのまま意識を飛ばした。

周りの同様冷め在らぬ中、一人のデバイスを引っこ抜きそれ思いつき殴り飛ばした。

魔法を使えと言いたいが、その間に孤立した敵に向けて垂直落下式のDDTを打ち込む。

路上でこんな攻撃をするのだ、死んでいるかもしれないが、殺される前に人を殺して何が悪いと言う話である。

だがそれで全員がしとめられたわけではない。すぐさま准将は起き上がり、狭い路地に逃げ込んだ。

「何で魔法使わなかったんだ僕は、取り敢えず近距離はそれほど強くないらしいしどうにかなるか」

一応英雄の面目躍如と言うところだろう。

彼は完全に気配を消して陰に溶けるように息を潜めた。それと同じに暗殺者達は、彼が息を潜めている場所に現れた。

「一気に二人もやられたぞ、一応英雄だったの忘れてた。小細工が得意なだけかと思ってたが、少し油断しすぎた」

「だがまだ殺せないわけじゃない。依頼はまだ完結して無いんだぞ」
「そつだそつだ、その言葉が欲しかった」

いきなり話に介入してくる准将。

だが最初は誰も気付かなかつた。いきなりのんきに話をしている余裕があるとも思わなかつたのだろう。

先ほど彼にデバイスで殴られた男の首を固め壁を蹴り上げ、顔面を地面に叩きつける不知火だ。

豚肉でも地面に叩きつけたような音が響く。暗殺者でこれだけ堂々とした大技の連発、しかもどちらかと言えば魔導師だ。これだけ魔力を使わない准将の行動に、どう対処していいのか疑問が募るのだろう。

その思考の困惑を彼は容赦なくついでくる。

固まっていた二人のうち一人を蹴り飛ばす。衝撃に逆らえないのかその儘彼は転がるが、先ほどの不知火ついでに奪っていたデバイスを、もう一方の咽喉に叩き込む。

呼吸が一瞬とまり、更に側頭部にデバイスを叩きつけられ。そのまま反動で壁に頭をぶつけて受身も取れないまま地面に倒れる。

しかしあと三人も豪快にしとめたが、准将は最後の一人をしとめるまで一切油断をしなかつた。

デバイスを起動させようと力を籠めた。

だが准将は狙い済ましたように、最後の一人のデバイスを力任せに彼の持っているデバイスで殴りつけ、持っているデバイスを弾き飛ばす。

更に腹にそのままデバイスを突き出し痛みで思考を停止させた。

「最後は伝家の宝刀でお仕舞いだ」

ジャーマンスープレックスホールド。

路上でこんなもの放たれた日には、生きている人間の方が少ないほどの必殺技であった。

しかしながらだ、魔法使えよ。

上の人間に封殺される事になる事件だが、カソウ准将暗殺未遂事件の顛末である。

また准将の攻撃で死んでいる暗殺者はいなかったが、彼の攻撃が元で、体に障害を抱えてしまい本業に戻る事が出来た人間はいなかった。

八章

この日が決定的だった、あの英雄が完全な変貌をとげるその始まりの日だった。

暗殺者によって命を奪われかけた准将。だが障害が残るほどのダメージを追わせた結果、過剰防衛とされ減給される事となった。

准将はいいわけはしなかった調子にのって攻撃した事実があったからだ。

それでも実際の話、四人のA Aランクの魔導師に襲われて命を奪わなかったのだから十二分に正当防衛が成立するはずである。

だからこそ周りの准将信仰者達は大いに暴れた。

再三にわたるデモやスト、暴動にまで陥った。管理局もこの程度の処分では、こんな事になるとは思わなかったのだろうが、処分を撤回するような事はしなかった。

准将も何も言わずに、受け入れたためその騒ぎは一週間ほどで収束する。

「どうでもいいけど仕事がまた増えた」

「うわあ、最早訴えてもいいレベルなんてもんじゃないでしょうそれ」

「ですね、そろそろ鬱になって来ましたよ。流石に仕事したくなくなってきました」

珍しい准将の愚痴だ。本当にうんざりしてきているのだろう、殆ど彼を便利屋かなんかだと思っているとしか思えない量だったりするのだ。

軽く酒を煽りながら彼の珍しい弱音を聞いてチヨウソウは、本格的に参って来たんだと同情する。

「そうですね、いい加減仕事しすぎだと思ってきました。周りの准将クラスの仕事量を調べてみたら、明らかに僕の方が多い状況だ。流石の僕も頭にきたなあ」

久しぶりの発言だが准将は彼女の話の聞いていなかった。

「もう駄目だ、いい加減仕事しすぎだと思ってきました。周りの准将クラスの仕事を調べてみたら、明らかに僕の方が多い状況だ。流石の僕も頭にきたなあ」

「え？ ちよつ、ちよつと准将落ち着いてくださいよそこは男なら」

「男だつてね、笑って済ましていいことと悪い事があると思うけど」

だが今回仕事が多くなったのは彼が調べた結果の歪みの調整の結果で増えているだけだったりする。

最もその前から嫌がらせと言つていい仕事量を押し付けられているのだから怒つても仕方ない気もする。

「いつそのクビそうとつかえすれば、仕事が減るんだろうか」

「それはどう足掻いても准将以外上にいけなくなるシステム」ですよ。独裁的な感じで、それ以前にそれをやると管理局が死にますよね」

「ははははは、冗談だよ。いくら僕でもそこまで出来ないから。それにそこまでのネタもないしね」

あれから三度ほど准将は暗殺者によって命を狙われている。

その全てを返り討ちにするあたりさすがだが、そうだったことも重なりかなり准将はやさぐれていた。あまり飲むことの無い酒もか

なりの量を飲み、足元も覚束無い状態になっている。

「くそ、真面目に仕事して来た人間に管理局がやる事がこれか。いくら僕でも怒るぞ本当に」

「真面目すぎて上の人間から嫌われるパターンですね」

「そんなパターンがあるとは、僕は真面目であればいいとユーノ先生から教えてもらったと言っのに」

それはユーノの気質からくるもので、彼は実際そうやって生きてきたかもしれない。

だがチヨウソウは当たり前前の事のように准将を馬鹿扱いです。

「何言ってるんですか、真面目であるところと無いところがあるからこそ魅力的な人間が出来るんですよ」

彼女にしてみればこれで准将が大人しくなればいいと思ったのだろう。

それに自分もどちらかと言えば不真面目な人間だったからいいわけじみたものも感じられる。

「そうですかユーノ先生の言っていることの方が正しいでしょう」「そう言うことじゃないです。常に真面目である必要が無いといっているだけです。そんなんだからこうやって仕事が増えるんですよ、准将はこれぐらいの仕事が出来るんだって具合に」

ある意味間違っていない。こいつこれだけの仕事をやってもどうにでもなるんだとはもう思われている。

准将自身も大分限界が来ていた。だから悪魔のささやきに耳を貸してしまった。

「そうか、そうだったんだ。そんな簡単なことだったんだ、やる気がなくなつて、真面目じゃなくなつていいんだ。状況に応じて対応を変えればいいだけなんだ」

基本はそうである。真面目だった准将ではいつか緊張の線が切れるというものだ。

准将はその線が今チヨウソウの所為でぷつりと切れてしまった。肩の力がいきなりふつと抜ける。

そしてその代わりに湧き上がるのは怒りだった。

「そうですね。真面目に生きるなんてものは、ユーノ先生ぐらい素晴らしい人間じゃないと無理なんだ。僕みたいな人間は先生みたいになれない」

「准将方向性が間違つてきてますよ」

「いえ、間違つてなんか居ない。冷静に考えれば僕に与えられた仕事は広報課を逸脱している、眠れないだけじゃない、法律にだつて違反している」

普通に考えれば見つかる公式のような気もする。

「つまりこれは僕に対する、嫌がらせだったんだ。そういえばお仕事大変だけど頑張つてくれたまえとか言われてた。しかも私の仕事までしてくれてありがとうって」

「気付きましたよよそれは、どう考えても嫌味じゃないですか。いくらなんでも人の悪意に鈍感すぎますよそれ」

「なんだ喧嘩を売られてたんだ。なるほど、なるほどね、喧嘩を売つてたんだ……あの豚」

完全に准将は目が据わっていた。酒の化学反応の所為で、最早齒

止めなどと言うものはなくなっていた。
いつもならある理性コトが完全に崩壊していた。

「よりもよって俺に喧嘩を売るとは、人生崩壊してもいいようだ」
「あれ、准将一人称完全に変わってますよ。明らかにやばい人ですよ今のその表情、もしかしてまた私が後押ししたの、また地雷踏んじゃったの」

ある意味正解だ。だが問題は酒である、人生を酒で失敗するもの者いるが、この場合はどうなんだろう。

取り敢えず人生（ただし相手）は崩壊するだろうが、こついうのも言うのだろうか。

それよりも酒が問題だった。

いつも崇拜するユーノと言う人間が酒の所為で薄れていた、そして日ごろの不満、最後にチヨウソウの言葉で完全に決壊しただけだ。けどのみに誘ったのはチヨウソウだ。

チヨウソウの所為でした。酒じゃねえ。

「折角、日ごろの疲れを癒してあげようと思って愚痴を聞いてあげたのに」

「気にしないでもいいでチヨウソウさん。キチンと崩壊させて上げますから」

「敬語だよかった准将敬語だよ。言ってる事物騒だけどまだ理性保ってる」

ちなみにだが過去の回顧録でもチヨウソウに対しては准将は敬語を使っている。

だから特に意味は無い。

「あの浮気豚は生きている限り俺に怯えてもらおうとしよう」

「って変わってない、なんか管理局の核弾頭を作った気がしてとてもいやな予感で手が震えてるから。落ち着いてくださいよ准将」

自分の生み出した准将と言う怪物に怯えるチヨウソウ。

なんか自分の生み出した生物に怯えてしまった博士みたいだが、必死に准将をなだめようとするチヨウソウの姿が哀れすぎる。

最も彼女が火薬庫でガソリン撒いてファイヤードダンスした結果のよゆうな気もする。

「さあ頑張りましょう。次の敵は本局事務総長ですよ、あの豚の人生滅ぼしてやら無いと僕の怒りが収まりません」

「だからさ、ちよつとは手加減くださいよ。どんなチャレンジャーですか、事務総長って完全に格上どころの騒ぎじゃないでしょう」
「大丈夫ですよ。僕は格上になんて手加減しません、躊躇うな拳は振りぬいてこそその拳でしょうもう止まりませんよ」

准将は拳を作って彼女に笑いかける。

一人顔を青くさせている人間がいるがよつたからでは断じて無い。

「ああ、私の馬鹿。この人に不用意な発言をすれば何が起こるか分からないことは身をもって理解していたのに」

どこかに端末で連絡する准将。酒の勢いもあるだろうが、最早止まらない事だけは確実だった。

次の日から悲劇は起こる、たった一人の人間の報復の恐ろしさを上層部どころか管理局中に刻む、准将の広報課最後の大事な仕事である

「お願いです、誰かこの人をとめて。本当にこの人が動くとかやばい

から、お願いですから誰か」

だが結構な量を飲んでいた彼女の発言が酔っ払いのくだまき以外に感じるだろうか。

この日チヨウソウは、嘆き涙を流しながら自分と目の前の人間が起こす管理局内部テロを黙って見ることしか出来なかった。

八章（後書き）

空を飛ぶ車の世界がある。そこは天才達の楽園だった。

しかしその世界は消え去ってしまふ。楽園の象徴だった塔がへし折られてしまった事で。

斉藤さんのオリジナル作品 webの片隅にて掲載。嘘です。

九章

いやと言つほど現実と言つ名の馬鹿が攻撃してくる。

アレはそうまだはる麗らかな日であった。まだ男は管理局による平和を実現させるべく必死に頭を働かせていた。

だが人生とは上手くいかない、本当に上手く行かないのだ。いきなり秘書が扉を激しく開けて部屋に入ってくる。冷静な秘書らしからぬ行動に、彼はどうしたんだと驚きながら話しかけた。

「フンソウ事務総長あなたの不倫がでっち上げられています!!」

そう今まさにその現実と言つ名のアホが、彼に牙をむいたのだ。しかもでっち上げなんかい。

「最早收拾がつくレベルじゃなくなっています。首謀者はおそらく、いや確実にカソウ准将、しかし証拠は全てありません」

「な、なんだと、それは一体どういうことだ。したことも無い事実で私の地位が揺らぐのか」

カソウ准将が牙を剥けられるが、冷静に考えれば誰も事務総長を狙わないだろう。あちらのカウンターパンチも相当だからだ。

しかし忘れてはならない事務総長の敵は馬鹿であった。これでもかって言うほどの馬鹿だった。

カソウに繋がるあらゆる証拠は無い。だが一番最初の発信源は間違い無く彼だった。

ラジオ「どんな処理がお好み」からの発信が最初であった事は事実である。しかし情報爆発は殆ど同時、声高々にカソウがやったと

言っても誰も信用しないだろう。

「もはや事実はないと否定してもどうにもなりません。あのカソウと言う男を仕事で縛れる人間と思っただ事がそもそも問題でした」

「どういうことだ次の計画で、大幅な増員計画も立った状態で私が抜ければ、この計画自体が頓挫するのだぞ。カソウ准将を呼べ、勝手な情報を巻いた罪で査問にかける。

英雄が査問で免職されれば、その事実が無根であった事の証明に成るはずだ」

公開査問と言う形をとる事になるのだが、准将がこのぐらいのことを予想していないはずがない。

この男は後々管理局を手玉に取るような馬鹿な人間になるのだ。その程度の予想がついていなくて挑めるような組織じゃない。

大体それを行なってもなお准将は管理局には勝利できなかった。

「わかりました、騒乱罪などの罪が適用できるはずです」

「一刻も時間をかけずに行なえ。でなければ計画が終わるのだ」

欠陥が破裂しそうな怒りをフンソウは抱えていた。

最初に喧嘩を売ったのは間違い無く彼だ、准将は喧嘩を売ってはいいない。

自業自得と言えばそれまでだが、こんな馬鹿を敵にする事になるとも思わず嫌味な言葉を使った自分を殴り倒してやりたかった。

振るえる腕を握り締め、その時がくるのをじっくり待つ。

名誉毀損などでも訴えられるような算段をつけておく必要がある。た。

相手は何しろ上層部の首を簡単に切り捨てられるだけの情報量を持つ人間だ、だがいままででっち上げなどしたことはない、正攻法

の人間だとフンソウは理解していた。

だからこそでっち上げなどでは、脆い足場を無理矢理作ったと思っっている。

性格の実直なものが、小細工を弄するときには欠陥ばかりだということを彼は、今までの経験から理解していた。

「早急に情報をまとめろ、私は根回ししてくる」

それから二時間後カソウ准将の公開査問が始まる。

これがカソウ准将が保管課に入る最後の騒動であるのだが、これで人生を叩きつぶされる男は、准将を甘く見すぎていた。

組織同士の戦いならともかく、個人同士の戦いでカソウと言う男が、簡単に勝てるような敵ではないからだ。

厳かな戦いは准将無言のままに進んでいた。

会話も中盤に差し掛かる頃まで准将が口を開いた事は一度もなかった。次々出てくる浮気を否定する内容の文章を彼に突きつけたのだ。

その全てが道理に乗っ取ったもので、否定する事すらはばかられるような内容ばかりであった。

故に准将の発言は全て事実無根であり、名誉毀損などに該当するなどと言う言葉が、全国放映される査問会場で響き渡っていた。

そこに当然の如くいるチヨウソウは、時空管理局の上の人間にあわわとあわてるだけで何も喋る事はできなかった。

実際そこにいるのは事務総長クラスの人間ばかりである。それこ

そ管理局に君臨する人間だ。

そんな人間のスキヤンダルを、平然とぶちまけた准将は、管理局に対して内部分裂を起こす可能性もあった。それゆえに反乱罪も適応されかねなかった。

「それで反論はあるのかねカソウ准将」

「え、もう言い訳終わったんですか。もうチョイ聞いてアラを見るのもありかと思っただんですが」

一瞬で空気が死滅する。

これまで黙っていたのは、反論するのも面倒な内容だと打ち切ったのだ。

それどころか周りを見回して鼻で笑う始末だ。

「なんていうかももう少しマシないわけして欲しい。そうですねチヨウソウさん、ここにいる人たち本当に馬鹿ですよ。今までのかれこれ三十分近い会話は、全部人生の無駄ですからね」

「今迄で一番偉い人たちに囲われているのに余裕ですね准将は、けど振らないで下さい。どうしようもないです私は」

巻き込まれた彼女は彼が目の前で管理局内部テロを行なうさまを見ていた。

そして思ったのは敵にしたらこの人ヤバイだけだ。

「否定するならそれだけの証拠を用意しろ」

「やめてくれませんかね、金蠅みたいな顔をして息をはかないで下さい。シモの匂いがしますよ」

「じゅ、じゅんしょう、流星にそれは酷いんじゃない」

鞆から取り出す書類。言っておくが全部偽造だ、ただし全て証拠

になるだけの材料を備えた代物である。

例えば事務総長が女性と密会していた写真などが、用意されていく。実際は企業や他の組織との会談だが。それは機密に該当し喋ることを許されない。

だからここでは誰も喋れないのだ。そしてこれを見て周りの人間が思うことはどうだろう。

いいわけができない状況がここに用意されているのだ。

どれだけ品行方正に生きてきても、こういう音思案があつて屈服されるのが人生だ。

誰一人それに対して口を開くことは出来ない。機密を口に出出来るような人間はここにはいない。

何しろそういった人間は首を落とされた、ここにいるのはどんな事をして、管理局による平和を用意するための命を賭けてきた人間ばかりだ。

それを見越して准将はこの写真を出した。

フンソウさえその写真を見せ付けられ苦悩の表情を作った。簡単に言えば密会している人間は、犯罪組織の長だったりする。

ここでそれをばらせばどちらにしる御破産だ。悪辣すぎる、そもそも実直とか准将に一番当てはまらない言葉だ。

敵を知り己を知れば百戦危うからずと言つのは妄言でもなんでもない事実だ。准将の性格の悪さは折り紙つきだ。

「足りないなまだ用意するけど、必要なのかなこれ以上」

脅しだ。それも周りの人間に対する、手出しする方が問題だったのだ。そのたび愚痴る准将にチョウソウが准将をブーストして行っ

た。その状況を作らなければ誰も平和で過ごせたと言うのに。
しかし手出しをさせる原因になったのもやっぱりチヨウソウだった。特ダネがホシーとか叫んだから准将が用意したのだから。

あれ、一番悪いのチヨウソウじゃね？

最もそれがわかっていているのは、実は誰もいない。ある意味必然で起きたのだらう、全部原因を作ったのがチヨウソウだったとしても。

「どうやら言い訳も無いようだ。それに騒乱を起こしたかったわけじゃない、オレはただそう言う情報があるといっただけだ。それにいたる所にばれてただらう、名誉毀損にも該当しないね。ここで更に情報を用意されても困るだらう」

へっへっへと笑う。悪逆の限りを表情に縫い込み、とても楽しそうに鼻歌を歌う。

そして席を立ち上がりフンソウのところまで歩いていく。途中チヨウソウの静止もあったが、軽く無視した。

「これはチヨウソウさんからの言葉だ。キチンと受け取ってくれ」

両肩をつかみできるだけ顔を近くに近づけて、フンソウを馬鹿にする。

准将を止め様と近くに寄っていた二人にだけ響いた。

「残念だったな工口爺、これがお前に捧げるチヨウソウさんの鎮魂歌だ」

「最後の最後で私に全力で責任を投球するな————」

彼女の叫びは査問会場に高々と響き渡る。しかしフンソウの目は

憎しみ満ちていて、その死線が射抜く先にはチヨウソウとカソウがいた。

だが感情だけを向けても何も変わらない。

フンソウ事務総長はこの日を持ってただの浮気男として汚名を受ける事になる。管理局を長年支え続けてきた男の失落の時であった。

九章（後書き）

その時作者はエロが欲しかった。

十章

終わりは過去を振り返るように、全部終わった後の回想を笑い話にするべきだ。

簡単に言えば准将はあれから直ぐ左遷された。

チヨウソウはあれから直ぐに引き抜かれどつかのラジオのパーソナリティーをしていた。

話は経過報告として伝えるだけでいいだろう。

上層部から完璧に厄介者扱いされた准将は、題目的にはフンソウの所為で左遷される形で、資料整理課に送られる。

だが正確にはフンソウに連動するように、彼を仕事に関わらせ無いと言う手段を取ろうという事になった動きを、最高評議会やレジアスが使い准将を送り込んだのだ。

この当時の准将の身辺事情は本当に洒落にならなくなっていった。その一つが家族を評議会に人質に取られたあたりだろう。結果として准将が他の人間に牙を向けられなかったのはそういった理由がある。

結果として彼の名前が忘れ去れるほどの時間、准将は資料整理課にいる事になる。

最高評議会死亡まで准将が行動しなかった理由はこの辺りにあるのだ。

あの当時に准将が起こした事件の一つが、准将の家族の保護があったりするほどだ。

最高評議会と言う枷が出来てしまった彼はこれから少しの間静かになる。

チヨウソウは昔から誘われていた事もあるが、准将が左遷されるようになれば、自分に降りかかる脅威がどれほどの物か冷静に判断できたのだろう。

誘いに乗って管理局をやめる事になる。

准将は彼女のラジオをよく聞いているのだが、そのあたりは実は彼の律儀さだろう。

カリムが准将にその事を聞くと、「これがオレの人生の指針だ」と言うほどであったのだから相当だ。

けれど彼と彼女が出会うことはそれからなくなっていた。

そんな二人が久しぶりに出会うのだが、それは准将二十八の時である。

「お久しぶりですチヨウソウさん」

「お久しぶりです准将、最近は大活躍ですね。と言うかここ数年と
言うべきでしょうか」

流石歩く管理局の核弾頭と言った感じで、准将がただの英雄だった頃から准将の非常識性に気付いていた、というか被害を受けていた彼女は、いい方向に進むとこんなにも凄いのかと、少々枯れた笑いを作る。

「あの当時は本当にお世話になりました。しかし今回はリバースの所為で、本当に面倒な事をお願いしてしまい本当に謝罪するしかありません」

「いや、いや、准将いくらなんでもかしこまりすぎ」

しかし敬意を示す人間には徹底的に敬意を示す奴である。

そんな彼の態度に恥ずかしさでも感じるのだろう。結構あわてた様子で場を取り繕う。

「けど准将も本当に大活躍ですよ。この歳で何を回顧するのかわからないのに回顧録を出すそうですし」

「一生懸命仕事をしていたら少しだけ、俺のする事に空きが出来たんですが、リバー스가意地でも休ませ無いと言う感じで回顧録を仕事として書けと持ち込んできたんですよ」

「完全に仕事で鎖を嵌めているんですか。また当時みたいにでつち上げて立場を奪えばいいじゃないですか」

しかし准将は遠い目をした。

「とつくに三度ぐらいしたんだが、こんな事が起こるのはあなたの所為です。乙女をなんだと思ってるんですかと言いやがって、ワンワン泣き出しまして」

「なるほど准将も女性の涙には勝てないと」

そうか昔私もそうすればよかったのかと、クビを上下に頷いた。しかし准将は首を横に激しくブンブンと振る。

「やはりチヨークスリーパーは女性にするものじゃないと理解しましたよ」

「あのね、君は泣いている女の子をなんだと思ってるんだい。それ以上に女の子をなんだと思ってるんだ」

「うるさいと」

最悪すぎる。この人変わってないよと、無駄に過去のトラウマがよみがえるようだった。

身を乗り出して准将に突っ込みを入れるチヨウソウに目を丸くし

て驚いた。

「え、やっぱり拳をぶち込むべきでしたか。それともDDTを決めるべきだったんでしょうか」

「そのどちらで攻撃を加えても准将が最低と言う意味にしかなら無いよ」

「ああ、だからそれで黙らせるたびに貴方は鬼ですかーと言ってくるのかりバースは」

あーそれですむんだその人、完全に准将のすることになれてる。

よほどのマゾヒスト以外あの人の対応は出来ないものだと彼女は思っていたが、そのリバースと言う人はどれだけ目の前の准将と付き合っているのか同情することしか出来なかった。

「フルネンソンのバスターならいいんでしょうか」

「攻撃からはなれようよ」

「えー！！ あまりいやらしい事はしたくないんですけど」

エロの発想に行くが、彼女はそんな事を求めちゃいない。

二十八にもなって顔をああも赤らめる彼は、一体どれだけ初心なのだろうか。

「つまり絞め技で行けと」

「変わってないよね、攻撃してるよねそれ。間違い無く体に結構なダメージ残るよねそれ。それ以前にいやらしくないよね」

「えーどうせあの三十教会女は処女ですよ。流石にあいつを抱くのはちょっと勘弁して欲しいですよ、絶対に後引きますよ」

本気でいやそうである。

ここまで言われれば彼女は訴えていい。けど無罪になると思う、

意味がなさ過ぎる。

多分こう言う事も慣れてきているのだろう。准将が訴えられたと言ったニュースも無いし。

「大体三十過ぎても容姿が変わらないと言うのがオレには不愉快ですよ」

「そういえば准将は、三十以上の女性が恋愛対象だったね」

「それは別にいいでしょう、そういえば本題です資料をもらいましよう。そろそろ端末から連絡が来る頃ですよりバースから」

准将の言葉を受けて、用意した紙の書類。

いまだき紙で書類を用意するのは准将ぐらいだが、それを当たり前のように用意するチヨウソウは間違い無く准将の部下だ。

それを受け取るとばらばらとめくる。

「うわ青いですねこれ、昔の事ですがこれは恥ずかしい」

「うん確かに真っ青だよみんな、蒼白って感じだったよね」

「今なら確実に誰にもばれないで実行する自信がありますよ」

うん、絶対にしないでね。

かみ合わない会話はともかく、自分の過去を振り返り恥ずかしそうに笑いのようなテレのような表情をした。

自分の黒歴史でも見ているようなものだろう准将からしてみれば。

「けどこれは回顧録書いたら管理局辞めますね!!」

「いや無理だと思うけどリバースって人が許さない気がするけど」

そりゃもう必死にそういった工作をするだろう。

自分の醜聞をばら撒くのは准将もはじめてする行為だが、本当に彼はいい加減管理局の仕事をしたくないのだろう。

結構暗い笑みを作って笑っていた。実は結構追い詰められているのだろうが、彼のそう言う笑みに彼女はいやな予感しかない。

そんな時端末に連絡が入る。

当然の事だがリメンバーとだけ名前が書いてあった。それを見るなりいやそうな顔をする准将。

「リバーズさんですか」

「そうですリメンバーの奴が帰ってこいと、とても帰りたくありません」

「あれ、繋がってないような」

そういつて首をかしげるチヨウソウ、本当にいやなのだろう准将は。

昔の知り合い。しかも彼にとっては恩人であるチヨウソウとであったのだ、簡単に帰りたいわけが無い。かといって端末にでなければ、大搜索が開始されるといって面倒な仕様になっている准将。

どうすると必死に悩む彼の姿は本当に哀れだった。ふと准将はチヨウソウを見てひらめく。

端末を受け取り、カリムのと連絡を取り合う。

「あいよ」

『准将ですか、そろそろ時間になりますから帰ってきてください』

「うるさい、俺は今から結婚するんだよ邪魔すんなリメンバー」

『え、ちょっと准、准将。なんですかその無茶振りはー！ー！』

そういつて端末を切ると、正面にいるかつての恩人に土下座する。今さつきからの意味の分からない准将の行動になれていない彼女は、動揺していた。

結婚するのか、おめでとうとか頭の中では思っではいたが、それはそれと言っことにしておこう。

「お願いです、結婚してください」

お前はいくつの段階を飛ばすつもりだ。

取り敢えず振りぬいた拳はどこに止まるのかそれだけは気になるところである。

十章（後書き）

これで完結、後日談があったけど公開しません。

後日談 准将だからありえる終わり

「ちょ、ちょっと准将、なんでカリムさんに頭下げてるの」
「ハハハあのイノナカノナカミ滝行がここにいるはず無いでしょうが」

そういつて頭を上げる准将、軽く笑いながら頭を上げる。
そして顔を蒼白とさせて呆然とした顔を作り上げた。

「何で、いらっしやるの君」

「いえ、准将がサボらないようにと思つてついでに来てたんですが、あんなふざけた事を言うので出て来たら」

あーそうと呆然としている彼にはその声は入ってこない。
殆どなりふり構わずサボる為に、頭を下げてしまった准将は目標を間違つてしまったのだろう。

逃げたいためとは言え恩人である人間に、もうやけっぱちとは言え頭を下げた彼は、本当に真摯に自分の感情をぶちまけた。
いつもの准将ならともかく、別のベクトルとは言え本気だった。
真面目にやるとなぜか自分に被害が降りかかる准将の性質は昔から変わっていない。

「え、あの、いまさらそんなことを」

「いやあのな、俺はお前に告白なんか」

「まさか、今までの暴言は愛情の裏返しですか」

会話を聞かないカリムさん。何気に准将に対するスルースキルが溢れている彼女は、今までの准将の行為を正当化していく。

どこまでドMなんだこいつ。
顔を真っ赤にして思いつき取り乱している。

「けれど私は教会のシスター、どうしたらいいんですか」
「うわ凄いい、准将まさかこんな美人に脈ありなんて」
「明らかに不整脈ですよ」

うざそうに顔をしかめる准将。どこまでカリムが好みじゃないのか理解が出来ない。

普通に告白された彼女は大慌てだった。
無駄に冷静な准将は、生まれて始めてこんな事言われたんだろうなーとか凄く他人事だった。

「ああちなみに准将、ここで嘘つて言ったらもぎ取ります」
「つてまで、え、まさかお前これを狙ってたのか」
「ええ、これで公私にわたって管理できるわけですね」

これじゃ魔王に捧げる犠牲だ。
ただし立場が上なのが犠牲なのは問題外だが、もはや多分だが駄目な弟を心配する姉のようなものなのだろう。彼女一応ゲロツサの姉だし。

そういった感情があるのだろう。

「あの悲劇の日が復活するのか、あの恐怖のリメンバーゲロが」
「こうなったら私も意地ですよ。生涯貴方の行動に対する防波堤になるつもりです」
「うわあすでに夫婦漫才してるこの人達」

もぎ取られるのも困るが、カリムとの結婚なんて准将は生涯をかけてお断りだ。

大慌てで周りを見回し、チヨウソウの腕を掴む。

「オレはこの人と結婚するんだ」

「いや私、人妻だよ。しかも二児の母」

「お願いしますここでだけでも口裏を」

しかし准将は忘れているのだろうか。

カリムとチヨウソウは同じカソウ准将被害者の会所属である事を、いやでも波長が合うだろう。

彼女は満面の笑みで勝利宣言をするように笑う。

「お断り」

彼を連れ去ろうとする、鬼の手から逃げるように准将は悲鳴を上げる。

実際はそこまでいやでもなかったりするのだが、その後の人生がどうなるか予想がつくのだろう。

まあ、人に迷惑をかけるやつが、人生を生涯ともに生きていくほど甘いものじゃないのは、既に今までの人生経験で理解しているだろう。

このあとつやむやに意地であるのだが、この一部始終をチヨウソウやカリム、部下やドソウ、そして准将に恨みを持つ上層部によって殆ど事実として世間に認知させられる事になる。

かつて彼がでっ上げた数々の悲劇と同じ事だ。自業自得にしかならないだろう。

結局躊躇いなく振り下ろす拳の向く先は、結局のところ彼のところだったというだけだろう。

書類偽造や裏工作、そういったことの得意だった英雄はそうやって囚われることになる。

けど晩年は農業やってたらしいよカリムと一緒に。

本当にお仕舞い。

後日談 准将だからありえる終わり（後書き）

読者に作品を請われて出さないのは、三流物書きの私ができる礼節だと思っています。だからって三部を求めないでもう書けないから書けるのはプリティレジアスだけです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3521h/>

リリカルなのは 質量兵器保管課

2011年1月29日02時08分発行